

大和郡山市埋蔵文化財発掘調査報告書 第2集

# 原田遺跡

第3次調査報告

1992.3

大和郡山市教育委員会

# 原田遺跡

第3次調査報告

1992.3

大和郡山市教育委員会

## 例 言

1. 本書は、大和郡山市小泉町出屋敷で実施した「原田遺跡」第3次調査の発掘調査報告書である。
2. 調査は、大和郡山市靴工業団地拡張を契機として実施した。
3. 調査期間は下記の通りである。

### (試掘調査)

平成2年8月20日～同8月29日

### (本調査)

平成2年8月30日～同11月28日

4. 調査面積は、約1,000m<sup>2</sup>である。

5. 調査は、下記の組織で実施した。

### [調査員]

山川均（大和郡山市教育委員会）、濱口芳郎（同）

### [補助員]

下大迫幹洋（奈良大学）、荒木浩司（同）、本村充保（同）、武田浩子

### [作業員]

堀川正治、米田利男、岸田勝信、杉山典三、市井義治、谷潤喜一、嘉幡嘉弘、中島治雄、大橋一夫、喜多美寿子、城タマエ

### [事務]

大和郡山市教育委員会社会教育課

6. 本報告書は、以下の分担で作成した（所属は当時）。

### [製図、トレース]

武田、下大迫、荒木、本村、山川、濱口

伊藤敬太郎（奈良大学）、竹内直子（京都女子大学）、宮崎秀俊（関西大学）

### [写真]

山川（遺構・遺物）、濱口（遺構）

### [執筆]

I～III、VI章 山川

IV章 濱口

なお、V章については1、2は奥田尚氏（櫛原考古学研究所研究嘱託）、3は金原正明氏（天理大学付属天理参考館）、4は三辻利一氏（奈良教育大学）より玉稿をいただいた。

### [編集]

山川

# 本文目次

I 調査の契機および経過 .....	1
II 位置および環境	
1. 地理的環境 .....	3
2. 歴史的環境 .....	4
III 調査の概要	
1. 署序 .....	12
2. 遺構および遺物 .....	12
(1) SD-01 .....	15
(2) SD-03 .....	33
(3) SK-06 .....	37
(4) SK-08 .....	44
(5) SX-01 .....	46
(6) SX-02 .....	48
(7) SD-02 (SK-02) .....	51
(8) SK-05 .....	53
(9) その他の遺構および出土遺物 .....	59
(10) 繩紋土器 .....	61
(11) 石器、石製品、ガラス小玉 .....	61
IV 原田遺跡の韓式系土器・陶質土器について	
1. 古墳時代後期の韓式系土器・陶質土器 .....	66
2. 蓋形陶質土器について .....	68
3. まとめ .....	71
V 自然科学的検討	
1. 土器に含まれる砂礫 奥田尚 .....	79
2. 石器の石種について 奥田尚 .....	84
3. 原田遺跡 木製品の樹種と花粉分析 金原正明 .....	86
4. 原田遺跡出土の韓式系土器および須恵器の螢光X線分析 三辻利一 .....	95
VI 総括 .....	113

# 図 目 次

図1	調査地および既往の調査地	1
図2	大和郡市地形分類図	3
図3	原田遺跡および周辺の遺跡	6
図4	基本土層柱状図(1/10)	12
図5	原田遺跡構造平面図(1/200)	13.14
図6	SD-01 土層縦断面図(1/40)	15
図7	SD-01 土層断面図1(1/40)	16
図8	SD-01 " 2 (1/40)	17
図9	SD-01 4区・5区木製品出土状況(1/40)	19.20
図10	SD-01 最上層出土土器実測図1	21
図11	SD-01 " 2	22
図12	SD-01 最上層出土韓式系陶質土器拓影	23
図13	SD-01 " 軟質土器拓影	24
図14	SD-01 最上層出土円筒埴輪拓影	25
図15	SD-01 上・中・下層出土土器実測図	26
図16	SD-01 出土土製品実測図	27
図17	SD-01 出土木製品(ナスピ形農具)実測図	28
図18	SD-03 遺物出土状況および土層断面図1(1/20)	29.30
図19	SD-03 " 2 (1/20)	31.32
図20	SD-03 出土土器実測図 1	34
図21	SD-03 " 2	35
図22	SD-03 出土韓式系軟質土器拓影	36
図23	SK-06 平面図および土層断面図(1/40)	37
図24	SK-06 出土土器実測図	38
図25	SK-06 出土土器および石製品実測図	40
図26	SK-06 出土木製品実測図 1	41
図27	SK-06 " 2 (ツチノコ)	42
図28	SK-08 平面図および土層断面図(1/20)	44
図29	SK-08 出土土器実測図	45
図30	SX-01 平面図および土層断面図(1/40)	46
図31	SX-01 出土土器実測図	47

図32	S X - 0 2 出土土器実測図	47
図33	S D - 0 2・S K - 0 2 遺物出土状況および土層断面図(1/20)	49.50
図34	S D - 0 2 出土土器実測図	51
図35	S D - 0 2 出土鉄製品実測図	52
図36	S K - 0 5 遺物出土状況および土層断面図(1/20)	54
図37	S K - 0 5 出土土器実測図	55
図38	S K - 0 5 出土木製品実測図1	57
図39	S K - 0 5 " 2	58
図40	その他の遺構出土土器および石製品実測図	60
図41	繩紋土器拓影	62
図42	石器実測図1	63
図43	" 2	64
図44	石製紡錘車、ガラス小玉実測図	65
図45	古墳時代後期の韓式系土器・陶質土器	69
図46	蓋形土器1	70
図47	" 2	71
図48	" 3	72
図49	原田遺跡 花粉組成図	90.91
図50	大阪陶邑群と望星里群の相互識別	98
図51	産地推定	98
図52	Rb-Sr分布図1	99
図53	" 2	99
図54	各期における原田遺跡の変遷概念図	117

## 写 真 目 次

写真1	西田中遺跡(堅穴住居、弥生中期)	9
写真2	菩提山遺跡(堅穴住居、古墳前期)	9
写真3	高月遺跡(掘立柱建物、7世紀)	9
写真4	筒井城跡(井戸、中世)	9
写真5	出土木材樹種顕微鏡写真1	92
写真6	" 2	93

写真7	花粉顕微鏡写真	94
写真8	螢光X線分析試料写真1	104
写真9	" 2	105
写真10	" 3	106
写真11	" 4	107
写真12	" 5	108
写真13	" 6	109
写真14	" 7	110
写真15	" 8	111
写真16	" 9	112
写真17	原田遺跡第1次調査航空写真	113

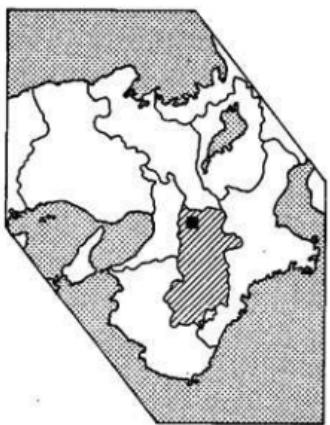
## 表 目 次

表1	周辺の遺跡一覧表1	7
表2	" 2	8
表3	韓式系土器出土遺跡地名表1（奈良県、京都府）	73
表4	" 2（大阪府1）	74
表5	" 3（大阪府2、兵庫県）	75
表6	" 4（和歌山県、滋賀県）	76
表7	器種と類型	81
表8	砂礫の種類	82.83
表9	出土樹種一覧	87
表10	分析値	100.101
表11	母集団からのマハラノビスの汎距離の二乗値	102.103
表12	出土遺物観察表1	119
表13	" 2	120
表14	" 3	121
表15	" 4	122
表16	" 5	123
表17	" 6	124

## 図版目次

- 図版1 1. 原田遺跡と周辺の地形（南上空より）  
2. 遺構完掘状況（真上より）
- 図版2 1. 遺構完掘状況（北西より）  
2. 同上（東より）
- 図版3 1. 調査風景（SD-03）  
2. 同上（SD-01）
- 図版4 1. SD-01 最上層遺物出土状況（韓式系土器、東より）  
2. 同上 中層木製品出土状況（南より）
- 図版5 1. SD-01 完掘状況（東より）  
2. 同上 層序（縦断面）
- 図版6 1. SD-03 上層遺物出土状況（東より）  
2. 同上 完掘状況（東より）
- 図版7 1. SK-06 上層遺物出土状況（東より）  
2. 同上 下層遺物出土状況（ツチノコ等、西より）
- 図版8 1. SK-06 完掘状況（西より）  
2. SK-08 半掘状況（西より）
- 図版9 1. SX-01 遺物出土状況（西より）  
2. 同上（部分）
- 図版10 1. SK-02、SD-02 上層遺物出土状況（東より）  
2. 同上 完掘状況（東より）
- 図版11 1. SK-05 第1層遺物出土状況（南より）  
同上 第2層遺物出土状況（南より）
- 図版12 1. SK-05 第3層遺物出土状況（南より）  
2. 同上 第4層遺物出土状況（南より）
- 図版13 遺物（SD-01）
- 図版14 " (" )
- 図版15 " (" )
- 図版16 " (SD-03)
- 図版17 " (" )
- 図版18 " (SK-06)
- 図版19 " (" )

- 図版20 遺物 (SK-06)
- 図版21 " (SK-08、SX-01、SX-02)
- 図版22 " (SD-02)
- 図版23 " (SK-05)
- 図版24 " (" )
- 図版25 " (" )
- 図版26 " (その他の遺構、縄紋土器)
- 図版27 " (縄紋土器、石器)
- 図版28 " (石器)
- 図版29 " (埴輪)
- 図版30 " (韓式系土器)
- 図版31 " (" )
- 図版32 " (" )



大和郡山市の位置

## I 調査の契機および経過（既往の調査、図1）

今回の調査は、大和郡山市による靴工業団地建物増設に伴うものとして実施された。同工業団地は昭和58年に靴工業関係の企業を集中する目的で造成されたものであったが、その際、権原考古学研究所が同地を発掘し、古墳時代を中心とする大規模な遺跡を発見した<sup>①</sup>（第1次調査。詳細についてはVI章参照）。また、同地においては水路改修もあわせて行われ、その際の調査（第2次調査）では浅い溝やピット（布留期）が検出されている<sup>②</sup>。

試掘調査は、対象地にトレンチをL字形に配して実施した。その結果、遺構が存在する対象地西側部分（微高地部分）においてトレンチを拡張し、本調査を実施した。それぞれの調査期間については次の通りである。

（試掘）平成2年8月20日～同8月29日

（本調査）平成2年8月30日～同11月28日

調査面積は約1,000m<sup>2</sup>である。調査の経過については後の調査日誌（抄）を参照されたい。なお、遺跡の名称については今回より從来の「法起寺南遺跡」を改め、その地名より「原田遺跡」と称したい。それは、遺跡の位置が法起寺の「南」ではなく「東」に位置すること、および周辺には別種の遺跡も多く、それらとの混同を避けるためなどの理由に基づく。

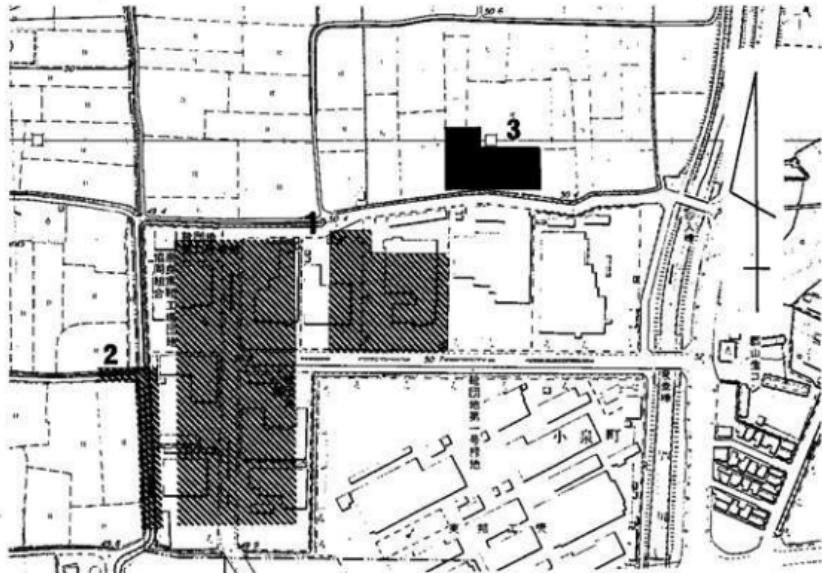


図1 調査地および既往の調査地

〈注〉

①伊藤勇輔「法起寺南遺跡」『奈良県観光』第318号、奈良県観光新聞社・1983

②同「法起寺南遺跡－水路改修に伴う調査」『奈良県遺跡調査概報』1982年度第1分冊、奈良県立橿原考古学研究所・1983

調査日誌（抄）

8月20日	10月16日
試掘トレント設定。重機により表土除去。	SD-01木製品とりあげ。
8月27日	10月22日
基本柱状図作成。部分的に遺構を確認する。	SX-01写真撮影。SD-02, SD-03 挖り下げ。
8月30日	10月25日
遺構検出部分のトレント拡張、本調査へ移行。	SD-02 (SK-02) 挖り下げ、 SD-03 中心部写真撮影（遺物出土状況）及び実測。
9月3日	10月26日
遺構面の精査。基準杭の設定。	SD-01花粉分析のため金原正明氏来跡。 (サンプリング)
9月6日	10月29日
遺構略測図作成開始。ベルコン設営。	SD-02 遺物出土状況写真撮影及び実測。
9月7日	10月31日
SD-01の基本層序を確認。	SK-05, SK-06 挖り下げ。
9月10日	11月2日
農業用水の流入によりトレント水没。	終日排水作業。
9月12日	11月6日
冠水後のトレント復旧作業。	SK-05, SK-06 遺物出土状況実測。
9月14日	11月8日
昨夜來の豪雨のためトレント再び水没。	ピット素掘溝等掘り下げ。
9月19日	11月16日
台風による豪雨のため夜間にポンプ等チェック。	SK-06 最下層よりツチノコ多数出土。
9月28日	11月17日
プロカメラマン太田潤氏来跡。	SK-08 遺物出土状況写真撮影及び実測。
10月5日	11月19日
SD-01掘り下げ。	航空測量。午後よりタワーから全体写真撮影。
10月9日	11月28日
SD-01土層写真撮影及び実測。	繩紋土器出土。
10月12日	現地作業終了、器材等撤去。
SD-01 4区木製品出土状況写真撮影及び実測。	

## II 位置および環境

### 1. 地理的環境（図2）

奈良盆地の中央よりやや北寄りに位置する大和郡山市は、市域の約70%が緩傾斜扇状地もしくは氾濫原などの低地で占められており、奈良県内においても有数の穀倉地帯として知られている。また当地では、ご多聞にもれず近年、宅地開発等が盛んではあるが、奈良市などに比較すると、依然として水田などの農地が占める割合は高い。

大和郡山市の地形は、市域のそれぞれ東寄りと西寄りを南北に貫流する河川、ならびに西端の矢田丘陵によって特徴づけられる。2大河川のうちの前者は佐保川であり、それ自体広域な氾濫原を形成している。また、その東側には春日断層崖によって形成された諸丘陵（天理市域）を開析する諸河川（北から地蔵院川、菩提仙川、高瀬川等）が形成したごく緩傾斜の扇状地が広がっている。後者は、富雄川である。この川は現在は南北に流れているが、かつてはその東側に広がる緩傾斜扇状地上を網流し、佐保川に合していた。現在の流路は、その扇状地の西側扇側部において人工的に川筋を固定されたものである。

なお、富雄川の西方にある矢田丘陵は、断層によって画された矢田丘陵（本体）と、それより派

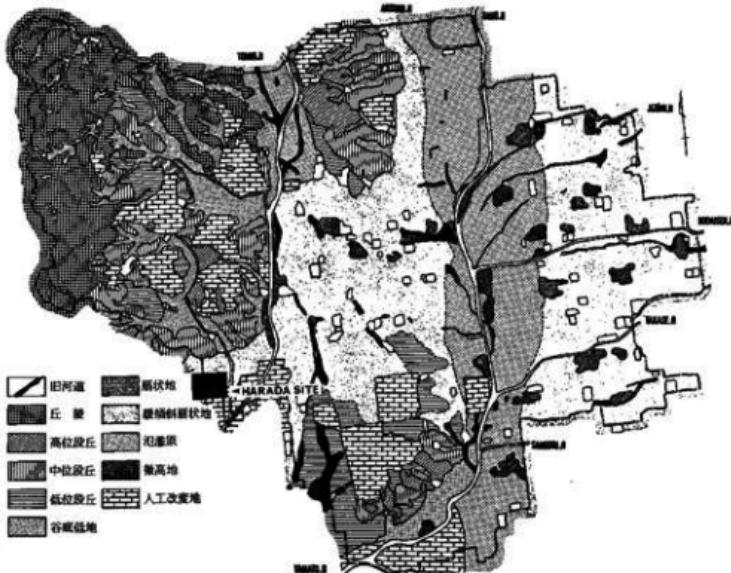


図2 大和郡山市地形分類図

生する低丘陵群より成る。後者のうちでも、より南側は頂面がフラットな段丘であり、弥生～古墳時代前期に至る集落が営まれていた。原田遺跡が立地するのは、その丘陵を開析する小河川(芦川)が形成した小規模な扇状地上である。扇状地は比較的緩傾斜ではあるが部分的に起伏に富み、その東側に展開する旧富雄川緩傾斜扇状地に比すとやや高燥といえる。遺跡の主要な遺構が展開するのは芦川の自然堤防上の微高地であり、表層は細～粗砂より成る。

なお、遺跡の東方には前述の旧富雄川緩傾斜を挟んで、頂面が平坦な額田部丘陵がある。

## 2. 歴史的環境(図3、表1・2)

ここでは、地理的な要素は無視し、原田遺跡を中心とする一定の範囲の遺跡について概観する。

### 〔繩文時代〕

本図域において、最古の遺物としては、慈光院裏山(25)より出土した有舌尖頭器があげられる。ただしこれは、弥生時代中期の遺構(溝)より出土したものである。

つぎに、満願寺(28)で後期後半の土器が出土しているほか、同期のものとして、今回原田(1)より土器の出土をみている。また、西里(84)では後期前半の土器が知られている。

なお、晩期末(もしくは弥生時代早期)の土器(凸帯文土器)が出土した遺跡としては、満願寺(28)、稗田・若槻(2)、西里(84)、東安堵(62)がある。ただし、いずれも自然河道や包含層より出土したものであり、顯著な遺構は伴わない。

### 〔弥生時代〕

まず、前期より開始する遺跡としては、明らかなもので稗田・若槻(2)、満願寺(28)、西里(84)がある。これらは、いずれも弥生時代を通じて営まれる大規模な集落であり、それぞれの地域における拠点的集落といえる。

つぎに、中期より開始するものとしては、主なもので慈光院裏山(25)、西田中(18)、菩提山(31)などがあげられる。これらは、いずれも高所(段丘上)に集落が営まれるのが特徴といえる。

後期に至ると、中期に引き続き段丘上に集落が営まれる。この時期から開始する主なものとしては、三井・岡原(99)などがあり、菩提山(31)なども継続する。なお、小泉調練場(100)では後期の方形周溝墓が検出されている。

### 〔古墳時代〕

古墳時代に至ると、段丘上の集落としては菩提山(31)などが一部継続するが、これらは前期のみで廃絶する。かわって低地上の集落として本庄・杉町(4)、東安堵(62)、東福寺(68)酒ノ免(69)、そして原田(1)などが登場する。このなかでも原田および酒ノ免は大規模な集落と思われ、後期まで継続する。

つぎに、主要な古墳について見てゆこう。まず、前期古墳としては小泉大塚古墳(32)がある。

本古墳は特異な構造の竪穴式石室を持つことで知られている。

ついで、中期古墳としては瓦塚1～3号墳(93～95)があげられる。本古墳では鳥形、家形など  
の形象埴輪のか、魚形土製品が出土している。

後期古墳としては、前方後円墳として新木丸山古墳(11)、六道山古墳(34)、額田部狐塚古墳  
(45)がある。さらに、終末期古墳としては、藤ノ木古墳(83)、仏塚古墳(86)、笹尾古墳(22)、  
竜田御坊山古墳(82)があり、いずれも横穴式石室が発掘調査され、多彩な遺物が出土している。

#### 〔飛鳥～奈良時代〕

本図域内においては官道遺跡として下ッ道(101)、北の横大路(102)がそれぞれ南北、東西に  
走っている。これら官道が整備された時期は、7世紀前後と考えられている。また、北の横大路沿  
いには高月遺跡(36)があり、7世紀中葉の掘立柱建物が10棟検出されている。

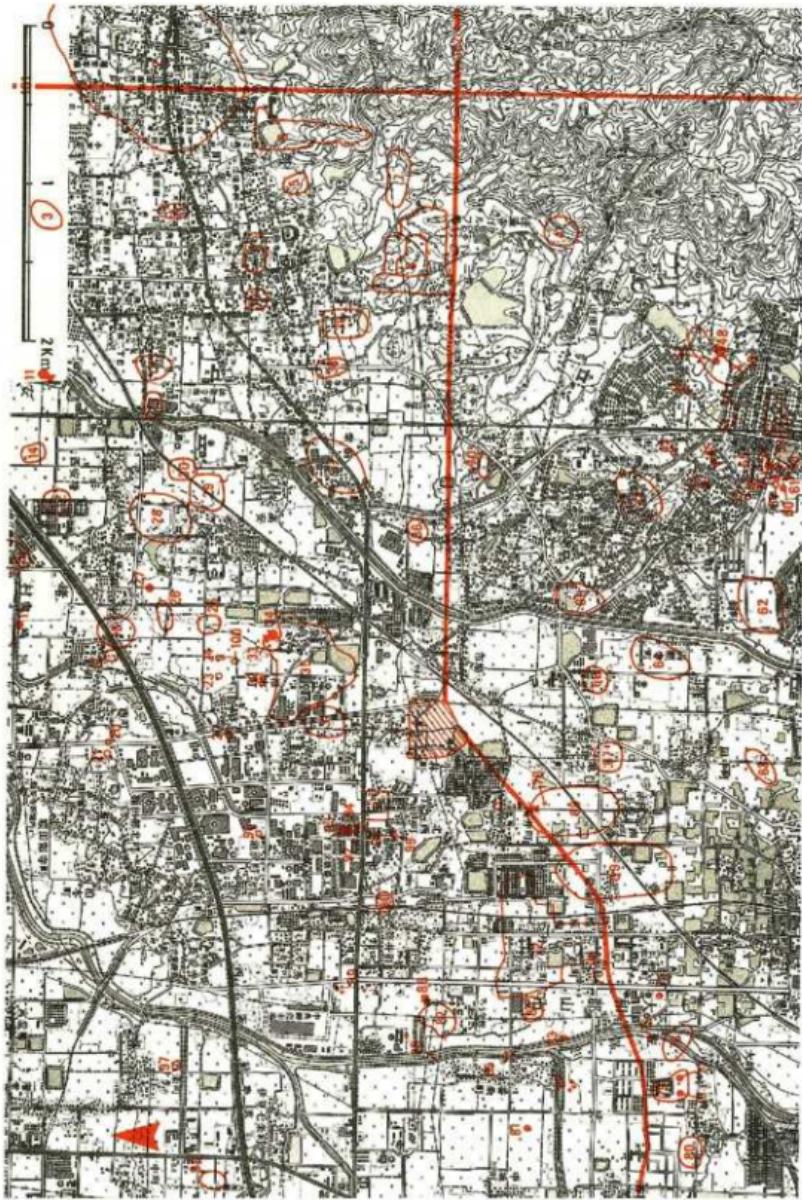
なお、主要な寺院としては法隆寺(72)、法輪寺(90)、法起寺(91)、額安寺(52)がある。  
また、瓦窯としては西田中瓦窯(19)、三井瓦窯(92)が知られている。

#### 〔中世～近世〕

中～近世の主要な遺跡としては、まず城郭があげられる。本図域内で著名なものは、小泉城(35)、  
筒井城(8)、である。なかでも後者は合計3次にわたる発掘調査が行われている。つぎに、居館  
等については稗田・若槻(2)や満願寺(28)において遺構の検出をみている。

ほかに、額田部瓦窯(51)は、中世の瓦窯として著名である。

図3 原山遺跡および周辺の遺跡（国土地理院発行1/25,000地形図「大阪東内部」を70%縮小）



No.	遺跡名	所在地	時代	参考文献
1	原田遺跡	大和郡山市小泉町	古墳(前)	20, 56
2	稗田・石楓遺跡	大和郡山市稗田町ほか	弥生～中世	18, 21, 37
3	南鬼塚遺跡	大和郡山市柳町	古墳～中世	
4	本庄・杉町遺跡	大和郡山市杉町	奈良～平安	17, 36
5	遺物散布地	大和郡山市丹後庄村	中世	
6	番条城跡	大和郡山市番条町字北ノ城	室町	55
7	遺物散布地	大和郡山市筒井町字八ノ坪ほか	奈良	
8	筒井城跡	大和郡山市筒井町字新池ほか	中世	21, 38, 35, 55
9	遺物散布地	大和郡山市丹後庄村小泉	奈良	
10	遺物散布地	大和郡山市白銀池	古墳	
11	新木丸山古墳	大和郡山市新木町丸山	古墳(後)	48
12	遺物散布地	大和郡山市小南町東池	奈良	
13	遺物散布地	大和郡山市小南町新池	古墳	
14	遺物散布地	大和郡山市田中町堀内、宮内	奈良	
15	古屋敷遺跡	大和郡山市田中町	繩紋～近世	20, 39
16	外川遺跡	大和郡山市外川町	弥生(後)	6
17	割塚古墳	大和郡山市千日町東池	古墳(後)	50
18	西田中遺跡	大和郡山市西田中町瓦谷	弥生(中)	33
19	西田中瓦窯	大和郡山市西田中町瓦谷	奈良	43
20	古墳(消滅)	大和郡山市西田中町瓦谷	古墳	
21	古墳(消滅)	大和郡山市西田中町瓦谷	古墳	
22	笛尾古墳	大和郡山市小泉町	古墳(後)	18
23	小泉孤塚古墳	大和郡山市小泉町孤塚	古墳(後)	2
24	小泉東孤塚古墳	大和郡山市小泉町孤塚	古墳(後)	5
25	慈光院裏山遺跡	大和郡山市小泉町慈光院山	弥生	13, 21, 53, 54
26	遺物散布地	大和郡山市西田中町瓦谷	古墳	
27	古墳	大和郡山市西田中町瓦谷	古墳	
28	満願寺遺跡	大和郡山市満願寺町	古墳	20
29	遺物散布地	大和郡山市池之内町古池	奈良～室町	
30	遺物散布地	大和郡山市出口	奈良～室町	
31	菩提山遺跡	大和郡山市山田町新山田字菩提山	弥生～古墳	34
32	小泉大塚古墳	大和郡山市小泉字大塚	古墳(前)	2
33	六道山遺跡	大和郡山市小泉字六道	弥生	
34	六道山古墳	大和郡山市小泉字六道	古墳(後)	24
35	小泉城跡	大和郡山市小泉町	中世～近世	55
36	高月遺跡	大和郡山市小泉町高月	飛鳥	40
37	遺物散布地	大和郡山市小泉町高月	古墳	
38	遺物散布地	大和郡山市小西町薬池	奈良	
39	遺物散布地	大和郡山市筒井町字新池ほか	古墳	
40	遺物散布地	大和郡山市今国府町字北垣内	古墳	
41	遺物散布地	大和郡山市馬司町字古屋敷	奈良	
42	遺物散布地	大和郡山市西町	奈良	
43	古墳	大和郡山市西町	古墳	
44	古墳	大和郡山市西町字堀内	古墳	
45	額田部孤塚古墳	大和郡山市額田部南町字小山	古墳(後)	10, 32
46	舟墓古墳	大和郡山市額田部北町字北町	古墳	32
47	古墳	大和郡山市額田部北町字西シマ	古墳	
48	松山古墳	大和郡山市額田部北町字西シマ	古墳	
49	遺物散布地	大和郡山市額田部北町字棚ヶ池	古墳	
50	鎌倉山古墳	大和郡山市額田部寺町字鎌倉	古墳(後)	32
51	額田部瓦窯跡	大和郡山市額田部南町字別所	鎌倉倉	1
52	額安寺	大和郡山市額田部寺町ほか	奈良(前)～	16, 22, 42, 44, 46
53	南方古墳	大和郡山市西町字南方	古墳(後)	

表1 周辺の遺跡一覧表1

No.	遺跡名	所 在 地	時 代	参 考 文 献
54	古墳	大和郡山市西町米連	古 墓	
55	古墳	大和郡山市西町米連	古 墓	
56	古墳	大和郡山市西町米連	古 墓	
57	古墳	大和郡山市西町米連	古 墓	
58	古墳	大和郡山市西町墓ノ間	古 墓	
59	古墳	大和郡山市西町墓ノ間	古 墓	
60	古墳	大和郡山市西町米連	古 墓	
61	古墳	大和郡山市西町米連	古 墓	
62	東安堵遺跡	安堵町東安堵	弥生(後)	4
63	遺物散布地	安堵町西安堵字苗代坪		
64	下池遺跡	安堵町東安堵字三反田	古 墓(後)	4
65	遺物散布	安堵町東安堵字藤池		
66	高安寺跡	安堵町西安堵字苗代坪	奈良(前)	42, 44
67	高安遺跡	斑鳩町高安	奈良~室町	15
68	東福寺遺跡	斑鳩町東福寺	古 墓	17, 21
69	酒ノ免遺跡	斑鳩町	古 墓	16, 17, 19
70	調子丸古墳	斑鳩町東福寺字東福寺	古 墓	27
71	駒塚古墳	斑鳩町東福寺字東福寺	古 墓	27
72	法隆寺	斑鳩町法隆寺	飛鳥~	28, 29, 30, 31, 42, 44
73	舟塚古墳	斑鳩町法隆寺字小物	古 墓	27
74	斑鳩大塚古墳	斑鳩五百井字大塚	古 墓(前)	9
75	戸垣山古墳	斑鳩五百井字戸垣内	古 墓	51
76	遺物散布地	斑鳩五百井字高畠		
77	古墳	斑鳩町小吉田字射上	古 墓	
78	間人女墓	斑鳩町小吉田字清水垣内	古 墓	?
79	遺物散布地	斑鳩町小吉田字清水垣内		
80	遺物散布地	斑鳩町稀葉字広間		
81	古墳	斑鳩町龍田字守谷	古 墓	
82	御坊山1~3号墳	斑鳩町龍田字御坊	古 墓(後)	3, 16, 49
83	藤ノ木古墳	斑鳩町法隆寺西2丁目	古 墓(後)	13, 26
84	西里遺跡	斑鳩町西里字大符原	绳纹(後)~弥生	7, 45
85	寺山横穴群	斑鳩町龍田字寺山	古 墓(後)	3
86	仏塚古墳	斑鳩町	古 墓	25
87	遺物散布地	斑鳩町		
88	古墳	斑鳩町	古 墓	
89	三井古墳群	斑鳩町	古 墓	62
90	法輪寺	斑鳩町三井字井垣	奈良(前)~	20, 44, 47
91	法起寺	斑鳩町岡本字岡本	奈良(前)~	11, 42, 44, 46
92	三井瓦窯跡	斑鳩町三井跡辰巳ノ鼻	奈良(前)	1
93	瓦塚1号墳	斑鳩町三井跡辰巳ノ鼻	古 墓	12
94	瓦塚2号墳	斑鳩町三井跡辰巳ノ鼻	古 墓	12
95	瓦塚3号墳	斑鳩町三井跡辰巳ノ鼻	古 墓	12
96	狐塚古墳	大和郡山市山田町字野田	古 墓	
97	松尾寺	大和郡山市山田町	奈良~	8
98	遺物散布地	平群町白石畠字宮内		41
99	三井・岡原	斑鳩町	弥生(後)	57
100	小泉調練場	大和郡山市小泉町	弥生(後)	21
101	下ッ道		飛鳥~奈良	58
102	北の横大路		飛鳥~奈良	58

表2 周辺の遺跡一覧表2

写真1 西田中遺跡（竪穴住居、弥生中期）



写真2 菩提山遺跡（竪穴住居、古墳前期）



写真3 高月遺跡（掘立柱建物、7世紀）



写真4 筒井城跡（井戸、中世）



参考文献一覧（表1、2に対応）

1. 奈良県立橿原考古学研究所『三井窯址及び額田部窯址』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書 13 1935年
2. " 『小泉孤塚・大塚古墳』 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書 23 1966年
3. " 『竜田御坊山古墳群』 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書 36 1978年
4. " 『東安堵遺跡』 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 46 1983年
5. " 『奈良県古墳発掘調査集報I』 奈良県文化財調査報告書28 1976年
6. " 『六条山遺跡』 奈良県文化財調査報告34 1980年
7. " 『西里遺跡』 奈良県文化財調査報告50 1986年
8. " 『松尾寺』 奈良県文化財調査報告書53 1987年
9. " 『斑鳩大塚古墳』 奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報10 1958年
10. " 『額田部孤塚古墳』 奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報17 1961年
11. 奈良県教育委員会『法起寺旧境内緊急発掘調査概要』 1969年
12. 奈良県立橿原考古学研究所『斑鳩町瓦塚一号墳発掘調査概報』 1976年
13. " 『斑鳩藤ノ木古墳概報』 1989年
14. " 『奈良県遺跡調査概報』 1976年度 1977年
15. " 『奈良県遺跡調査概報』 1977年度 1978年
16. " 『奈良県遺跡調査概報』 1978年度 1979年
17. " 『奈良県遺跡調査概報』 1979年度 1981年
18. " 『奈良県遺跡調査概報』 1981年度 第1分冊 1982年
19. " 『奈良県遺跡調査概報』 1981年度 第2分冊 1982年
20. " 『奈良県遺跡調査概報』 1982年度 第1分冊 1983年
21. " 『奈良県遺跡調査概報』 1982年度 第2分冊 1983年
22. " 『奈良県遺跡調査概報』 1985年度 第2分冊 1986年
23. " 『奈良県遺跡調査概報』 1986年度 第2分冊 1989年
24. 奈良県橿原考古学研究所編『奈良県の主要古墳I』 奈良県教育委員会 1971年
25. " 『斑鳩・仏塚古墳』 斑鳩町教育委員会 1977年
26. " 『藤ノ木古墳第1次調査報告』 斑鳩町教育委員会 1990年
27. " 『斑鳩の古墳』 斑鳩町教育委員会 1990年
28. 国立博物館『法隆寺東院における発掘調査報告書』 1984年
29. 文化庁文化財保護部記念物課『法隆寺若草伽藍跡昭和43年度発掘調査概報』 1986年
30. 文化庁文化財保護部記念物課『法隆寺若草伽藍跡昭和44年度発掘調査概報』 1989年
31. 奈良県立橿原考古学研究所・奈良国立文化財研究所『法隆寺防災施設工事・発掘調査報告書』 法隆寺 1985年
32. 大和郡山市教育委員会『額田部孤塚古墳周濠部発掘調査概要報告』 大和郡山市文化財調査概要1 1984年
33. " 『西田中遺跡第1・2次発掘調査概要報告』 大和郡山市文化財調査概要4 1985年
34. " 『菩提山遺跡発掘調査概要報告』 大和郡山市文化財調査概要10 1988年
35. " 『筒井城第2次・平城京右京八条二坊四坪発掘調査概要報告書』 大和郡山市文化財調査概要11 1988年
36. " 『本庄・杉町遺跡発掘調査概要報告書』 大和郡山市文化財調査概要14 1989年

37. 大和郡山市教育委員会「若桜遺跡カナヤケ地区発掘調査概要報告書」大和郡山市文化財調査概要16 1990年
38. " 「筒井城第3次森目地区発掘調査概要報」大和郡山市文化財調査概要20 1991年
39. " 「古屋敷遺跡第3次発掘調査概要報告」大和郡山市文化財調査概要22 1991年
40. " 「高月遺跡発掘調査報告書」大和郡山市埋蔵文化財発掘調査報告書1 1991年
41. 平群町教育委員会「平群町遺跡分布調査概報」1989年
42. 保井芳太郎「大和上代寺院志」1932年
43. 京谷康信「奈良時代窯跡調査概報」「考古学雑誌」4-1 1932年
44. 石田茂作「飛鳥時代寺院址の研究」1936年
45. 橋口清之「大和法隆寺村発見の繩紋式土器」「大和志」4-5 1937年
46. 福山敏男「奈良朝寺院の研究」1948年
47. 石田茂作「法輪寺伽藍の発掘調査報告」1952年
48. 末永雅雄「日本の古墳」1961年
49. 泉森岐「法隆寺竈田御坊山発見の環状金具とその類例について」「関西大学考古学研究室年報」1 1967年
50. 小島俊次「割塚古墳の調査」「青陵」14 1969年
51. 中井一夫「斑鳩町戸垣山古墳の測量調査」「青陵」27 1975年
52. 久野邦雄・岡川尚功「斑鳩町三井の古墳群について」「青陵」31 1976年
53. 寺沢薰「慈光院裏山遺跡採集の石器」「青陵」38 1978年
54. 泉武「慈光院裏山遺跡出土の須恵器」「青陵」41 1979年
55. 村田修三他編「日本城郭大系」10 新人物往来社 1980年
56. 伊藤勇輔「法起寺南遺跡」「奈良県観光」318号 1983年
57. 寺沢薰「三井・閻鳳」「大和を掘る」奈良県立橿原考古学研究所 1988年
58. 岸敏男「大和の古道」「日本古文化論叢」奈良県立橿原考古学研究所 1970年

### III 調査の概要

#### 1. 層序 (図4)

図4は、今回本調査を行った地域の基本土層柱状図である。1(耕土層)、2(灰色土、床土層)3(褐色土層)を除去すると、茶褐色粗砂より成る4(ベース)が露呈する。対して、その東側では4層は存在せず、灰色の粘土層およびその下位で粗砂層があり、遺構の存在は認められない。すなわち、今回遺構を検出したのは微高地部分である。また、遺構がなかった東側部分では水田等の存在が考えられたが、トレンチの断面観察等ではそれを確認できず、本調査は断念した。

#### 2. 遺構および遺物

今回の調査では、古墳時代の遺構を数多く検出したが、それらは大別して庄内～布留式期のもの、および須恵器編年におけるTK10～TK209型式期のものに大別できる。以下、主要な遺構について、列記する。

- (1) 溝SD-01 (庄内～TK209)
- (2) 溝SD-03 (TK10～43)
- (3) 土坑SK-06 (TK-209)
- (4) 土坑SK-08 (TK-209)
- (5) 不定形落ち込みSX-01 (TK-10)
- (6) 不定形落ち込みSX-02 (TK-10)
- (7) 潜め井SK-02・SD-02 (布留中葉)
- (8) 土坑SK-05 (庄内前葉)

以上の他、溝、小土坑多数が検出されているが、例えば建物としてグルーピング可能なものはない。



図4 基本土層柱状図 (S : 1/10)

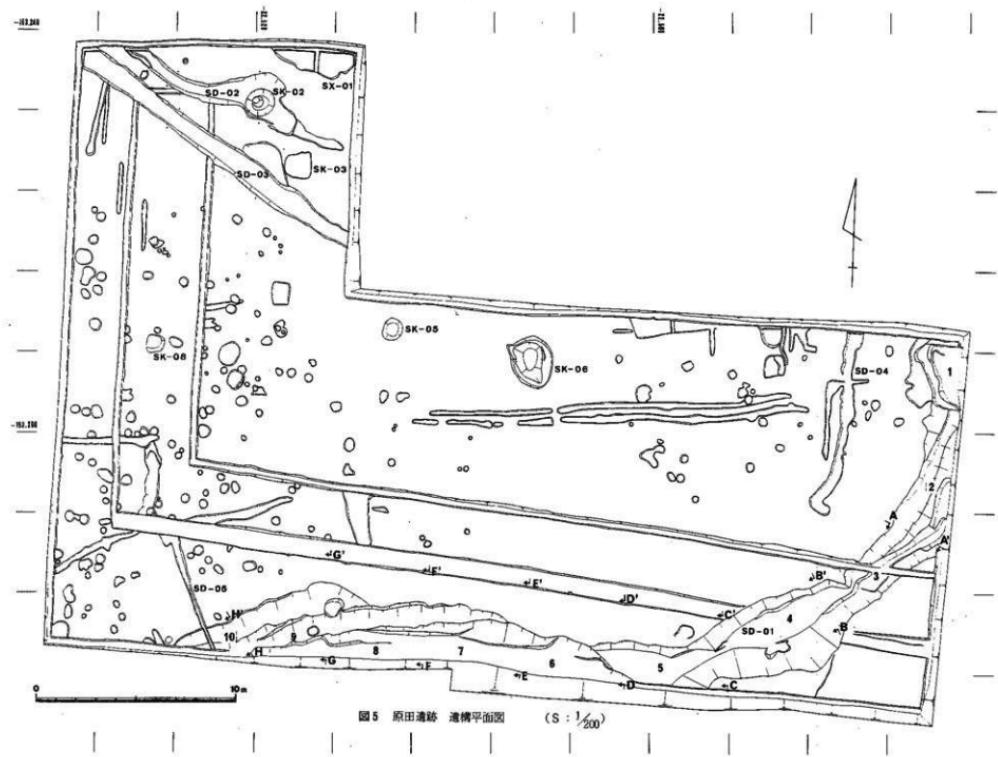


図5 原田遺跡 進構平面図 (S : 1/200)

以下においては上記の主要な遺構個々について、次の要領で説明を加える。

- A. 平面形（平面形状、および規模等）
- B. 層序（断面形状、深さ、および層序等）
- C. 出土遺物（出土状況、遺物個々の報告等）
- D. 総観（所属時期、用途等）

なお、出土遺物のうち、石器のみは後に一括して報告した。

#### (1) SD-01

##### A (平面形、図5)

調査区の北東から南西にかけてゆるやかに弧を描く溝状遺構である。調査区南縁における検出部では溝の南半が未検出のため、幅は不明であるが、実測可能な部位では2~4mを測る。

##### B (層序、図6~8)

溝全体の基本的な層序については、図6の最上層、上層、中層、下層に分層が可能である。このうち最上層（暗茶色の粗砂層）に関しては、溝が一旦埋没した後、洪水等の要因によりその上面を被覆した可能性が高い。他の層（上～下層）に関しては、いずれも灰色ないしは暗灰色を呈し、シルト、ないしは細砂より成り、部分的に粘土層を挟んでいる。なお、最上層を除く上～下層では出土遺物にやや時期的な幅があり、各横断面図にも示されるように、溝内の堆積は静穏に行われたものとはいい難い状況である。なお、深さは最深部で約90cmを測る。

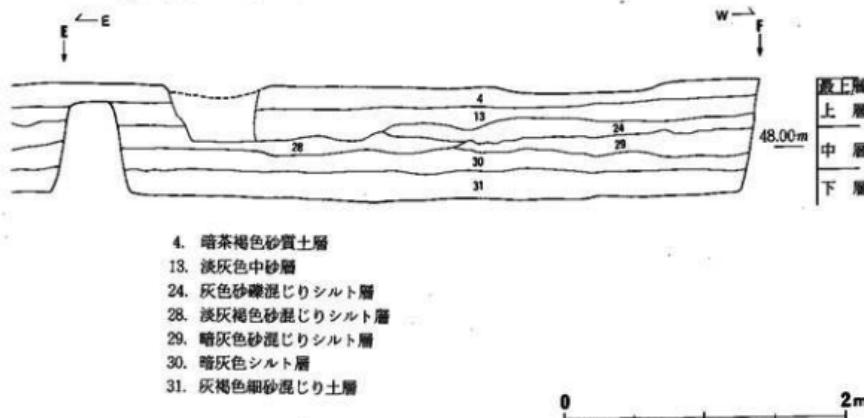
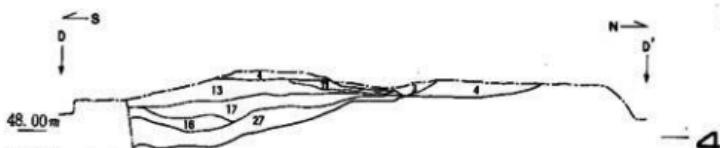
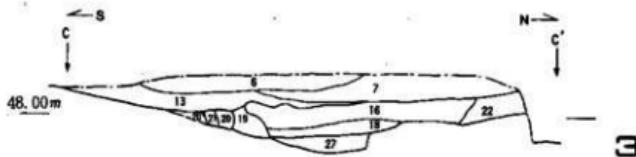
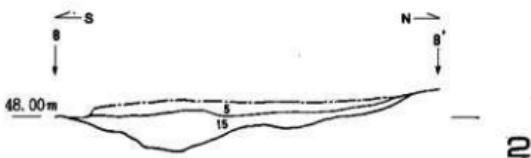
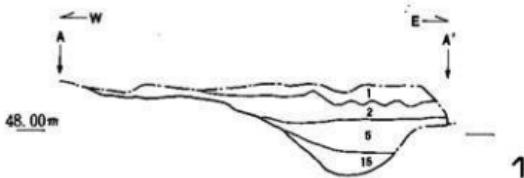


図6 SD-01土層縦断面図(7区 S:1/40)

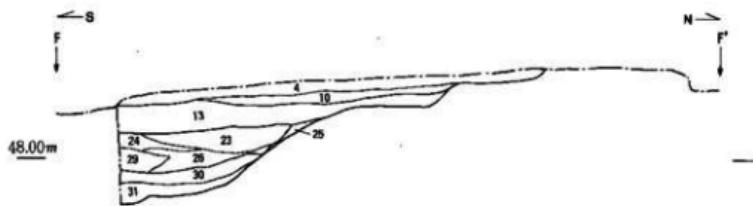


- |                      |                     |
|----------------------|---------------------|
| 1. 黒色土・灰褐色混じり粗砂層     | 15. 暗灰色砂混じり粘質土層     |
| 2. 灰褐色粘砂層            | 16. 灰黑色粘土層 (植物遺体顯著) |
| 3. 暗灰色粗砂混じり粘土層       | 17. 灰色細砂混じり粘土層      |
| 4. 精茶褐色砂質土層          | 18. 暗灰色中砂混じり粘土層     |
| 5. 淡灰褐色砂礫層           | 19. 灰色粘土混じり微砂層      |
| 6. 灰色シルト混じり細砂層       | 20. 暗灰色粘土層          |
| 7. 茶灰色細砂層            | 21. 灰茶色粗砂層          |
| 11. 青灰色粘土層 (地山土再堆積土) | 22. 灰色シルト混じり中砂層     |
| 13. 淡灰色中砂層           | 27. 濃灰色シルト混じり中砂層    |
- 0 2m

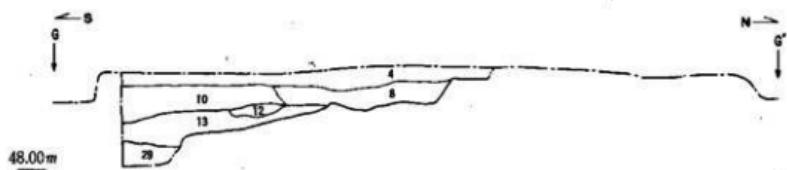
図7 SD-01 土層断面図 (1のみ南面、他は西面 S : 1/40)



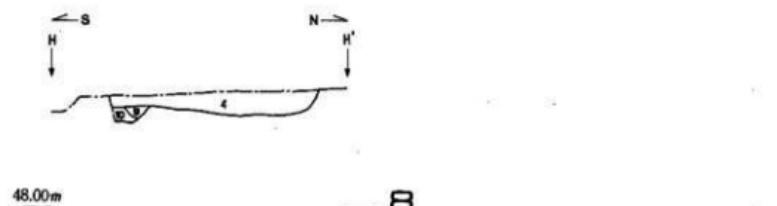
5



6



7



— 8 —

4. 暗茶褐色砂質土層  
 8. 黄灰褐色砂層  
 9. 灰褐色粘砂層  
 10. 橙褐色砂礫層  
 12. 暗灰褐色中砂層  
 13. 淡灰色中砂層  
 14. 暗灰褐色砂質土層  
 23. 灰色砂・粘土層(弧状に互層堆積)  
 24. 灰色砂礫混じりシルト層  
 25. 暗灰褐色砂混じり粘土層  
 26. 灰色砂層(粗砂、中砂弧状に互層堆積)  
 28. 淡灰褐色砂混じりシルト層  
 29. 暗灰褐色砂混じりシルト層  
 30. 暗灰色シルト層

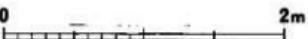


図8 SD-01 土層断面図2 (西面 S : 1/40)

## C (出土遺物)

**出土状況 (図9)** SD-01より出土した遺物には土師器、須恵器、石器、自然木等がある。ただし、一括して投棄された状況下で出土したものはなく、いずれも散発的に出土した。図示した範囲では木製品、および自然木、棒材、板材のほか、ナスピ形農具 (M1) が出土している。ここでは板と杭を用いた塙などの構造物が存在した可能性が高いが、それらは破壊され、個々の構造物は原位置を止めない状況で出土したものと思われる。

**最上層出土土器 (図10~14)** 1-Aで述べたように、最上層は溝がいったん埋没した後、時間をおいてからその上を被覆した層である。その形成時期は当該層出土の最も新しいものより考えてTK-209型式期である。

1・2は、須恵器杯蓋である。両者ともにTK-10型式に属するが、1は天井部外面に手持ちのヘラケズリを施しており、注目される資料といえる。

3~7は、須恵器杯身である。4・6・7では底部外面にヘラ記号をもつ。このうち、4はTK-47型式、5・7はMT-15型式、3はTK-10型式、6はTK-209型式に属する。

8は、須恵器甕である。胴部に列点文を施している。また内部には漆が付着しており、その用途を考えるうえで注目される。TK-10型式に属する資料である。

9は、須恵器甕である。MT-15型式を前後する時期のものと考えられる。

10は、須恵器器台である。脚部に三角形の透しをもち、波状文を施している。全体に小柄で、器体断面がセビア色を呈する。あるいは初期須恵器の範疇に属するものかもしれない。

11・12は、土師器二重口縁壺である。庄内式。

13~16は、いずれも土師器底部の破片である。このうち15は、内面にケズリを施す庄内系甕の底部である。

17・18・20・21は、いずれも土師器高杯である。このうち、17・18・20は5世紀後半のものである。また、21は布留式前葉のものである。

19・22は、土師器底部である。このうち、19は鉢の底部と思われる。

**最上層出土土器 (韓式系土器、図12・13)** K1~K8は、陶質の韓式系土器である。いずれも甕の破片で、同一個体の可能性が強い。外面に繩墨文をもち、内面の叩き目はナデ消している。このうち、K1・K3・K4には横位の浅い沈線を施している。また、断面の色調はサーモンピンクを呈する。時期はSD-01最上層の出土須恵器がTK-47~TK-209型式と幅があるので、詳らかにすることはできない。なお、K9は、後述のSX-02より出土したもので、格子目叩きをもつ資料である。時期はTK-10型式併行期と思われる。

K10~K46は軟質の韓式系土器である。外面に格子状の叩き目をもち、内面はナデで仕上げる。甕の破片であり、K43を除くといずれも同一個体のものとなる可能性が高い。なお、K43は市松状の叩き目をもつもので、他に比してやや特殊である。また、胎土も他のものとは明らかに異なる (V章1項奥田報告参照)。

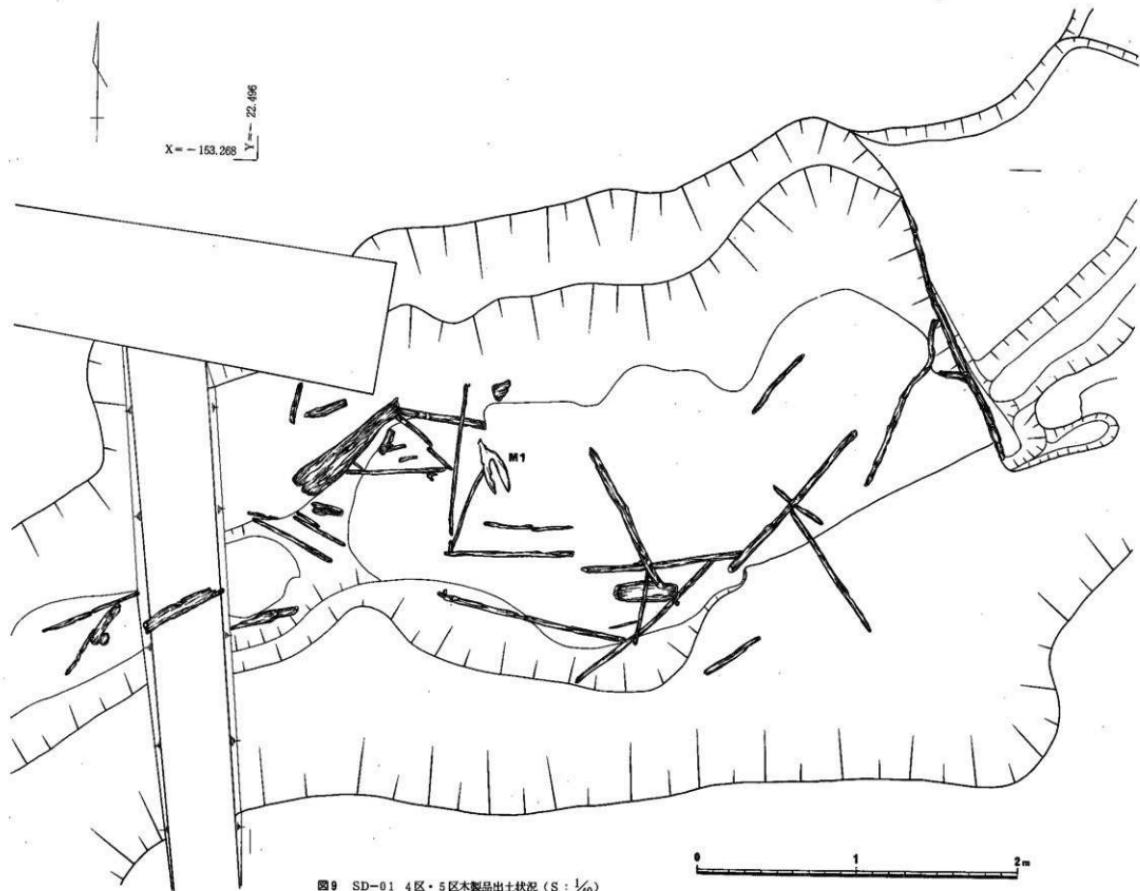


図9 SD-01 4区・5区木製品出土状況 (S : 1/40)



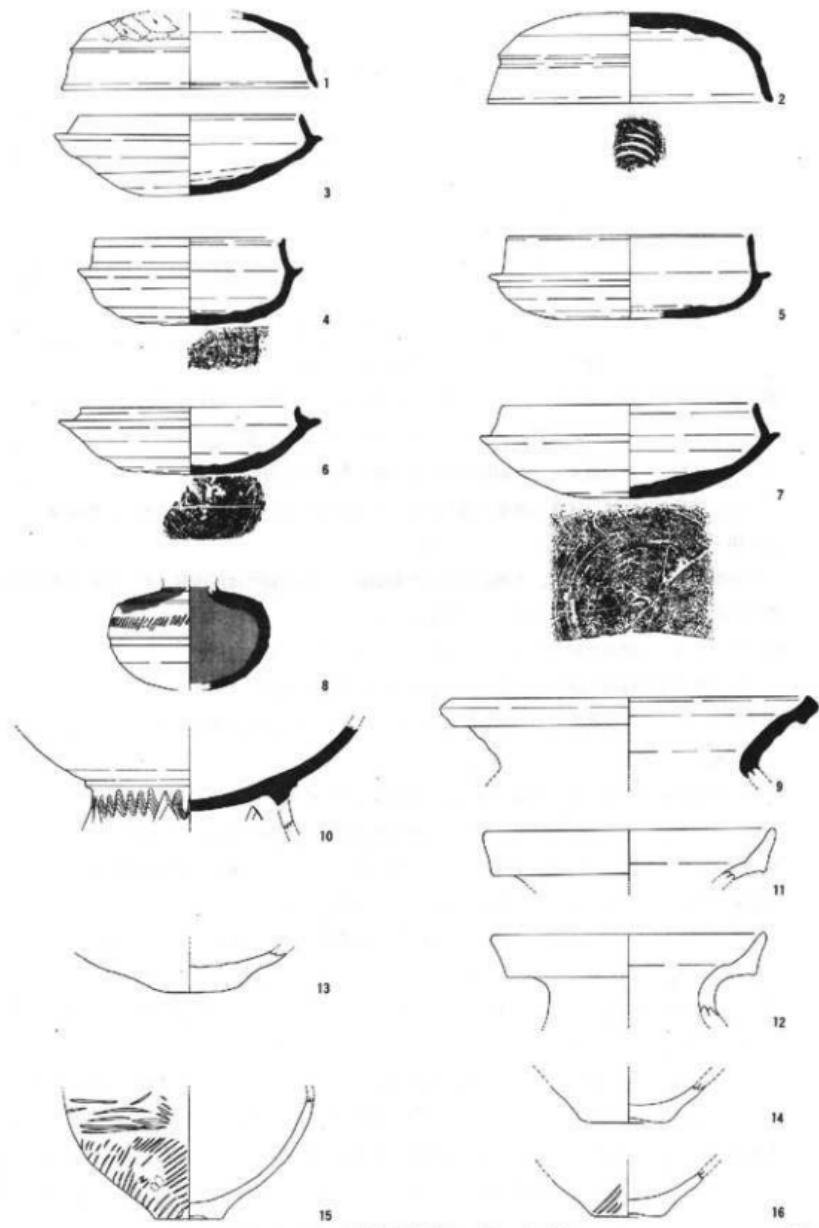


図10 SD-01 最上層出土土器実測図1 (S : 1/3)

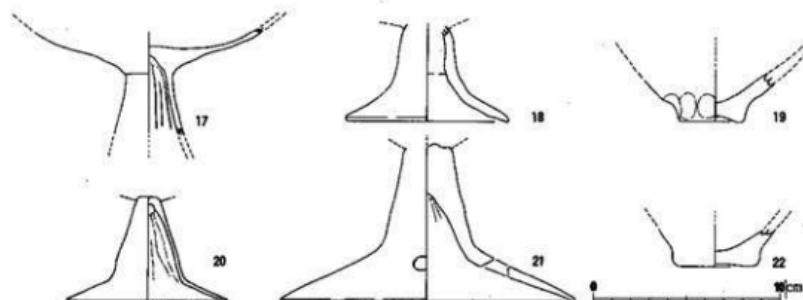


図11 SD-01 最上層出土土器実測図2 (S : 1/3)

最上層出土円筒埴輪（図14） H1～H10は、円筒埴輪（土師質）の破片である。このうちH9は基底部の破片である。外面調整はタテハケのみでタガ部は低く、強いヨコナデによって仕上げている。内面は粗いナデを施す。川西編年におけるV期に相当する資料である。

なお、埴輪の出土は、近在に後期古墳が存在した可能性が高いことを示しており、興味深い。

#### 上・中・下層出土土器（図15）

当該層出土土器に関しては、下層がほぼ庄内期前葉、上～中層では庄内期、および布留期前葉の資料が混在するほか、弥生土器もごく小量混在する。

23・24・32は、土師器高杯である。このうち、32のみがやや時期的に下る。

25は、土師器壺口縁部の破片である。口唇肥厚部に竹管文を施す。

26～31は、いずれも土師器底部である。このうち、29は底部に穿孔がある。また、31では内面にケズリを施す。

33は、土師器鉢である。やや外側に張出した底部（平底）を有する。

34は、弥生土器（畿内IV様式）甌である。口唇部を肥厚し、沈線を巡らしている。

35～40は、いずれも土師器底部の破片である。40を除くといずれも鉢の底部と思われる。

土製品（図16） 図中T1～T4は最上層、T5は下層より出土した。

T1～T3は、フィゴの羽口片である。胎土が2次焼成によって赤片しており、また先端にはスラグの付着をみる。

T4は、紡錘車形土製品である。成形は手づくねによっており、中央部に穿孔する。用途としては紡錘車、土鍾等が考えられる。

T5は、用途不明の土製品である。外面に叩き目状の刻みをもち、おおきく内側する断面をもつ。

なお、本例はほぼ完形である。今のところ管見に類例を見ず、用途も不明である。

木製品（図17） 木製品としては、ナスピ形農具がある（M1）。二叉の刃部をもち、鉄刃先の装着痕はない。刃部については精緻に削りだされている。また、頭部は一部が欠損するが、明瞭な縦縫痕を有する。

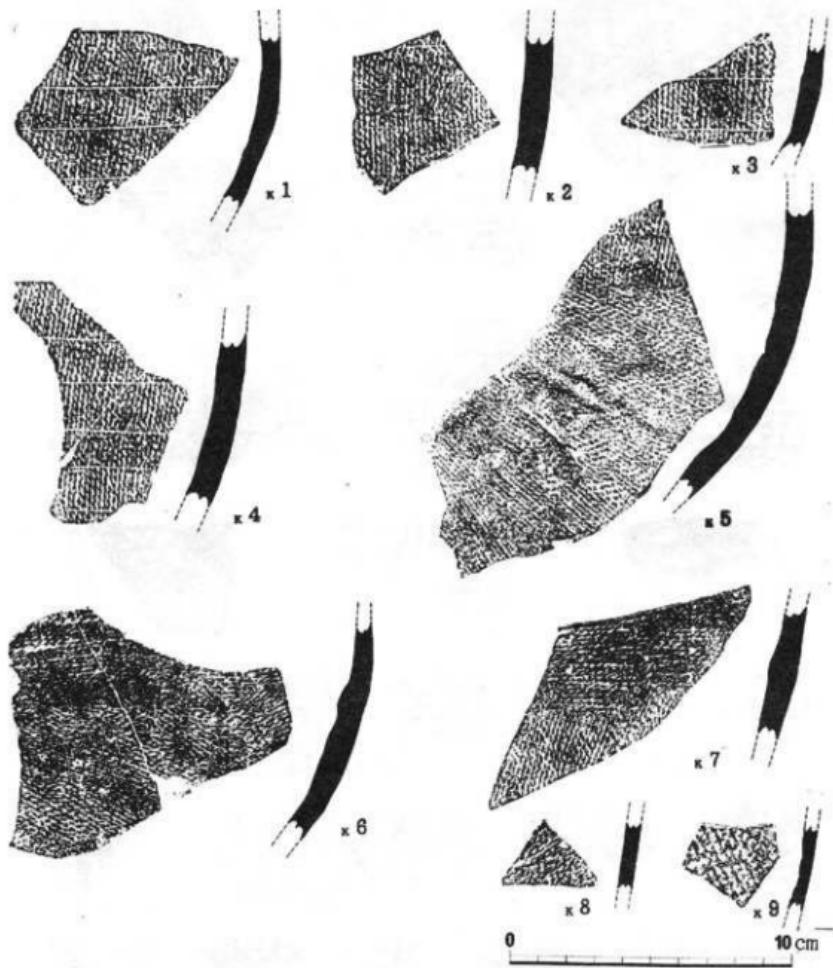


圖12 SD-01 最上層出土韓式系陶質土器拓影 (S : 1/2)

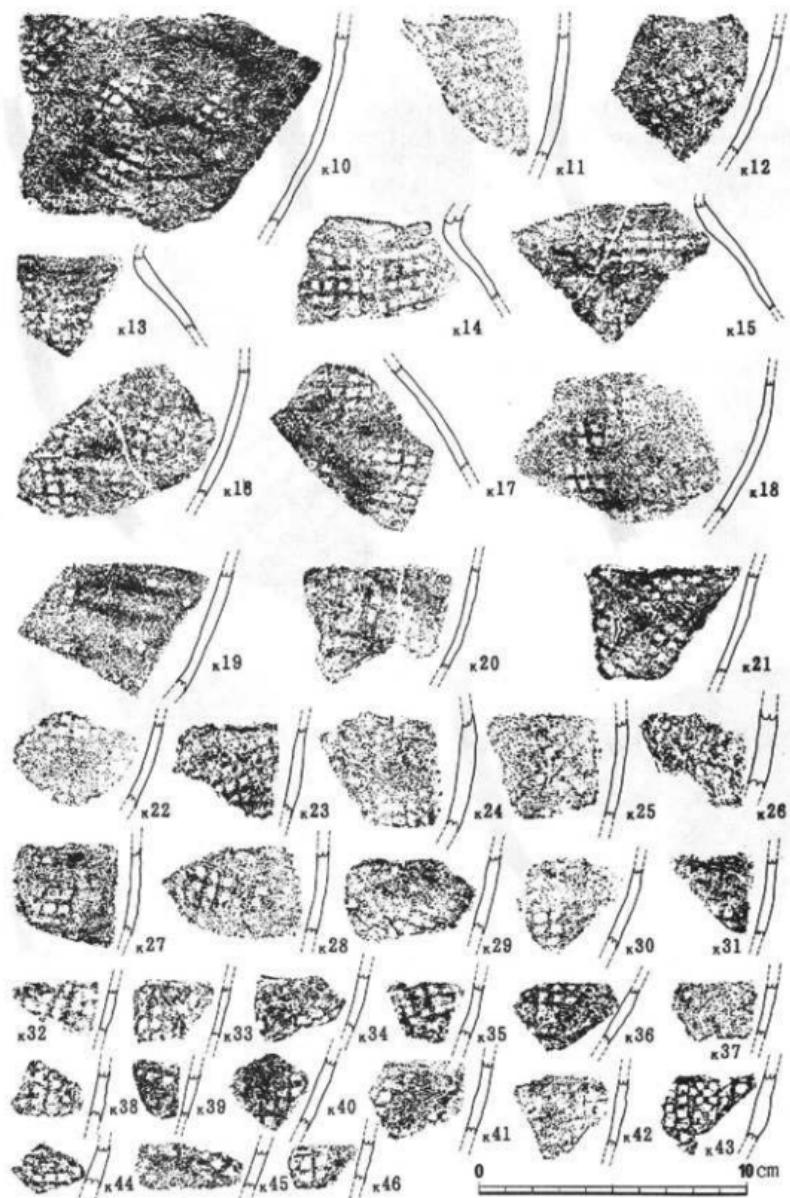


圖13 SD-01 最上層出土韓式系軟質土器拓影 (S : 1/2)

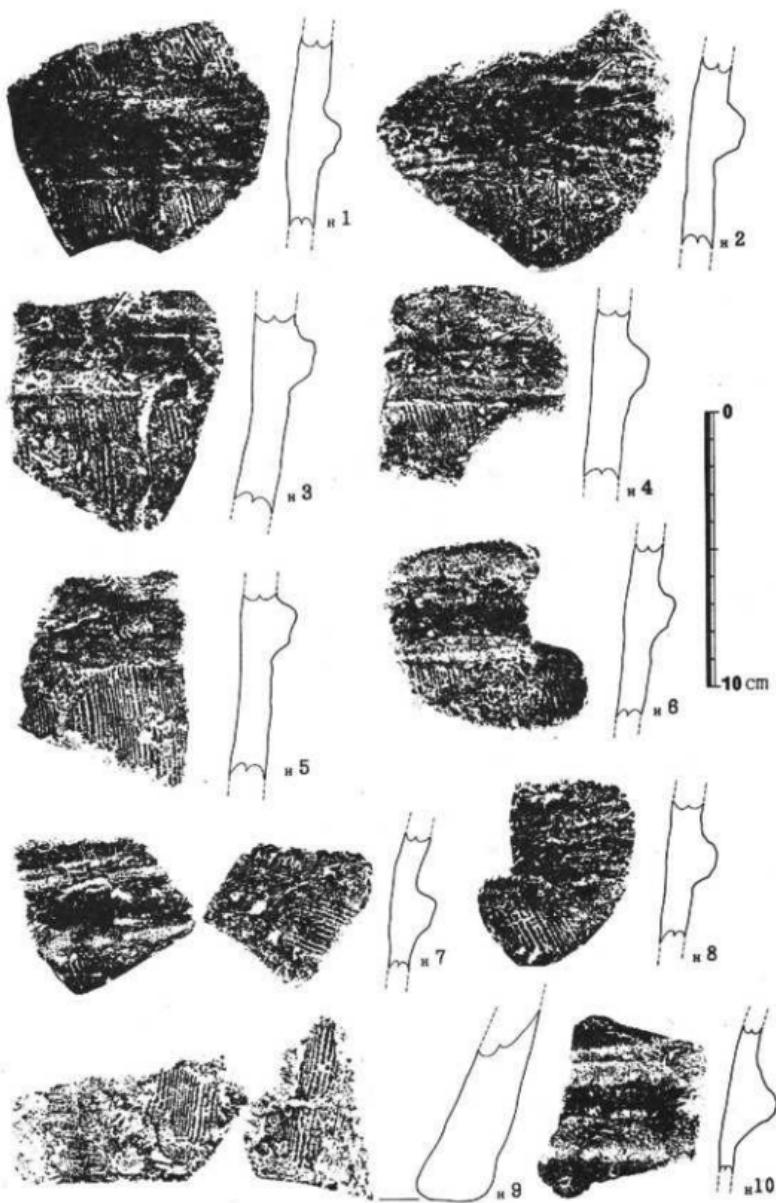


圖14 SD-01 最上層出土圓筒埴輪拓影 (S : 1/2)

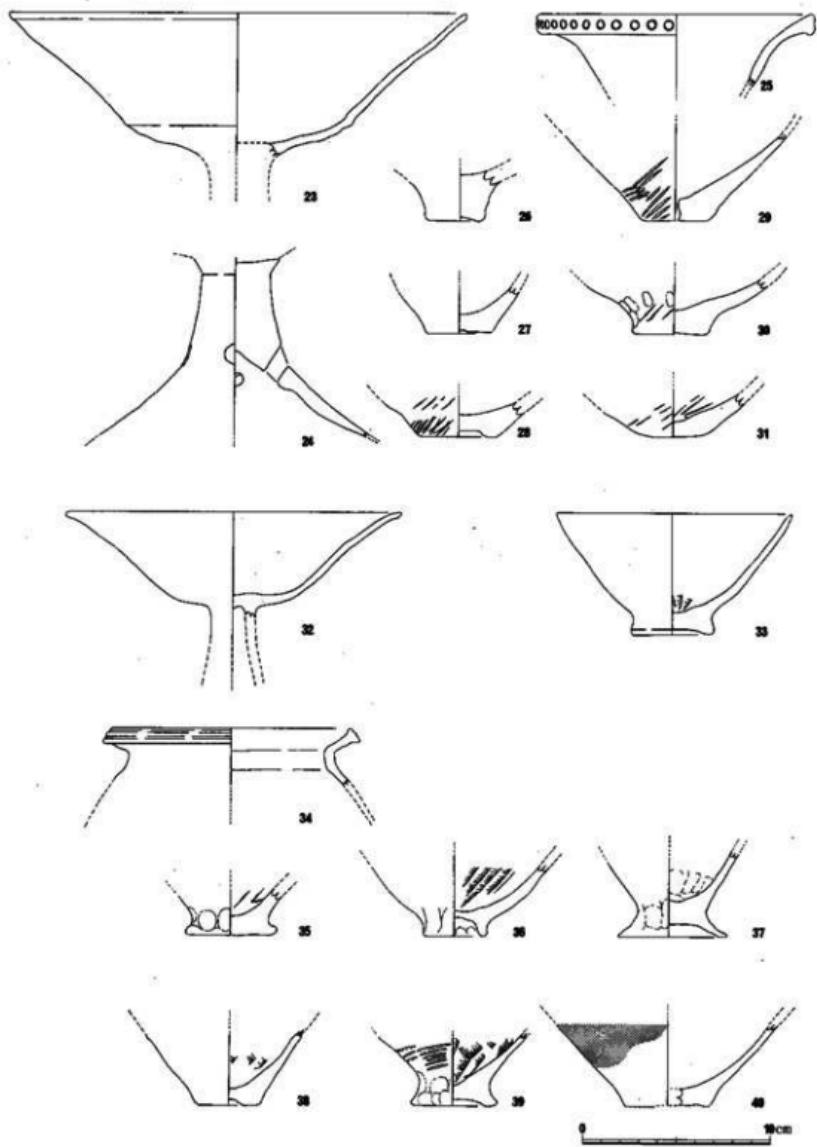


図15 SD-01 上・中・下層出土土器実測図 (23~31-上層、32~34-中層、35~40-下層 S : 1 / 3)

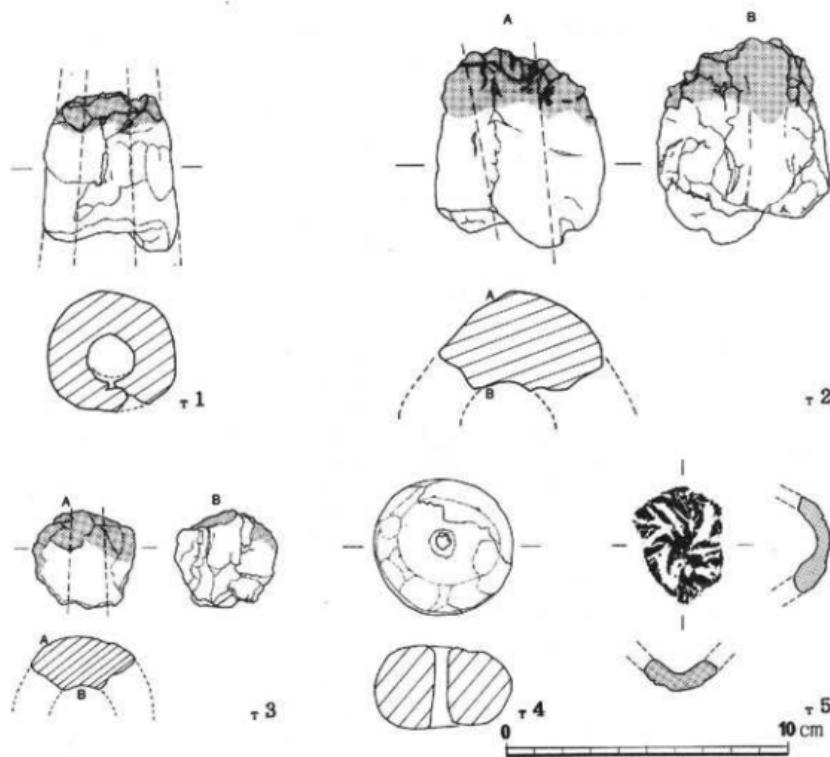


図16 SD-01 出土土製品実測図 (S : 1/2)

#### D (総観)

まず、時期については、下層の堆積した時期は庄内期前葉と思われる。ただ、出土遺物中に若干の弥生土器、およびサヌカイト製の石器、フレイク等を含むので、開削の時期はややそれに先行する可能性が強い。

上～中層はかなり複雑な堆積状況を示すが、形成時期としては布留期前葉と思われる。このSD-01はこの時期にほぼ埋没し、その機能を失ったものと理解される。ただ、その後も若干の凹み地となっていたのか、6世紀末に洪水砂と思われる堆積がその上面を被覆する（最上層）。

つぎに、溝自体の性格であるが、これには全体の形状が不明なことより、明らかにすることはできない。可能性としては集落をとり巻く環濠の一部、または農業用水路としてのものがある。なお、

今回の調査区の南側を権原考古学研究所が調査した際、該期の大規模な集落を検出しているので、  
今回の溝もまた、それらと有機的に関連するものの可能性が高いといえよう。

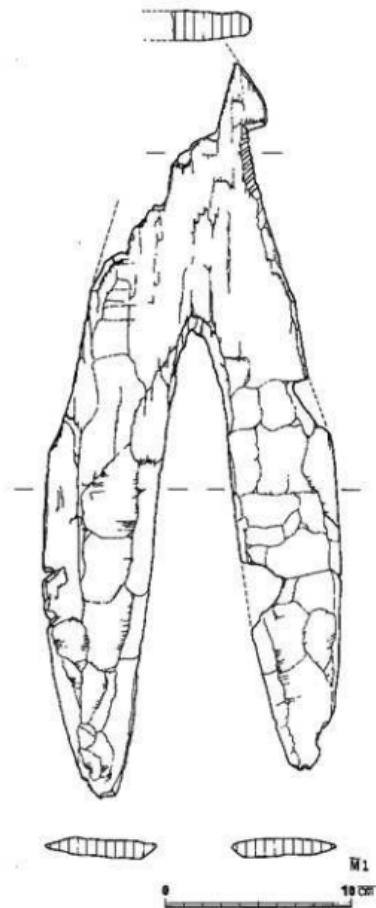


図17 SD-01出土木製品（ナスピ形農具）実測図 (S : 1/3)

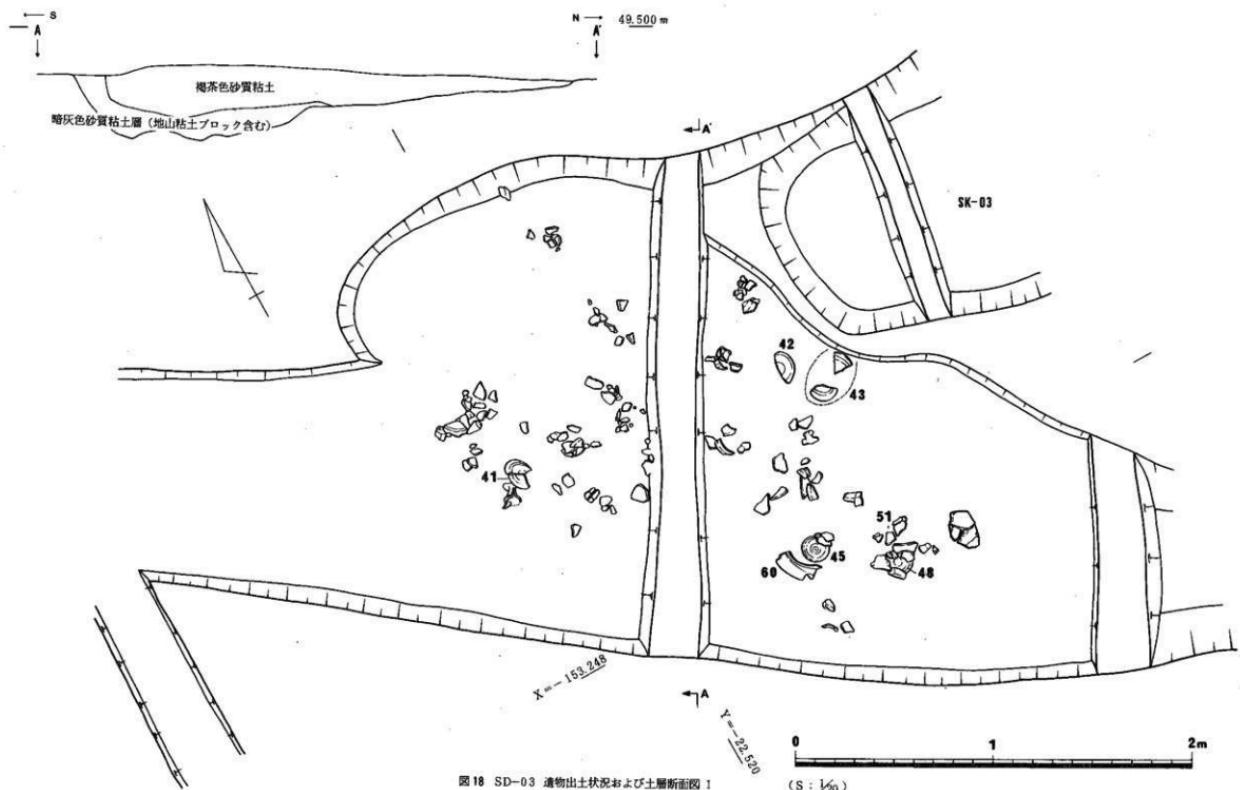


図18 SD-03 遺物出土状況および土層断面図 1  
(S : 1/20)

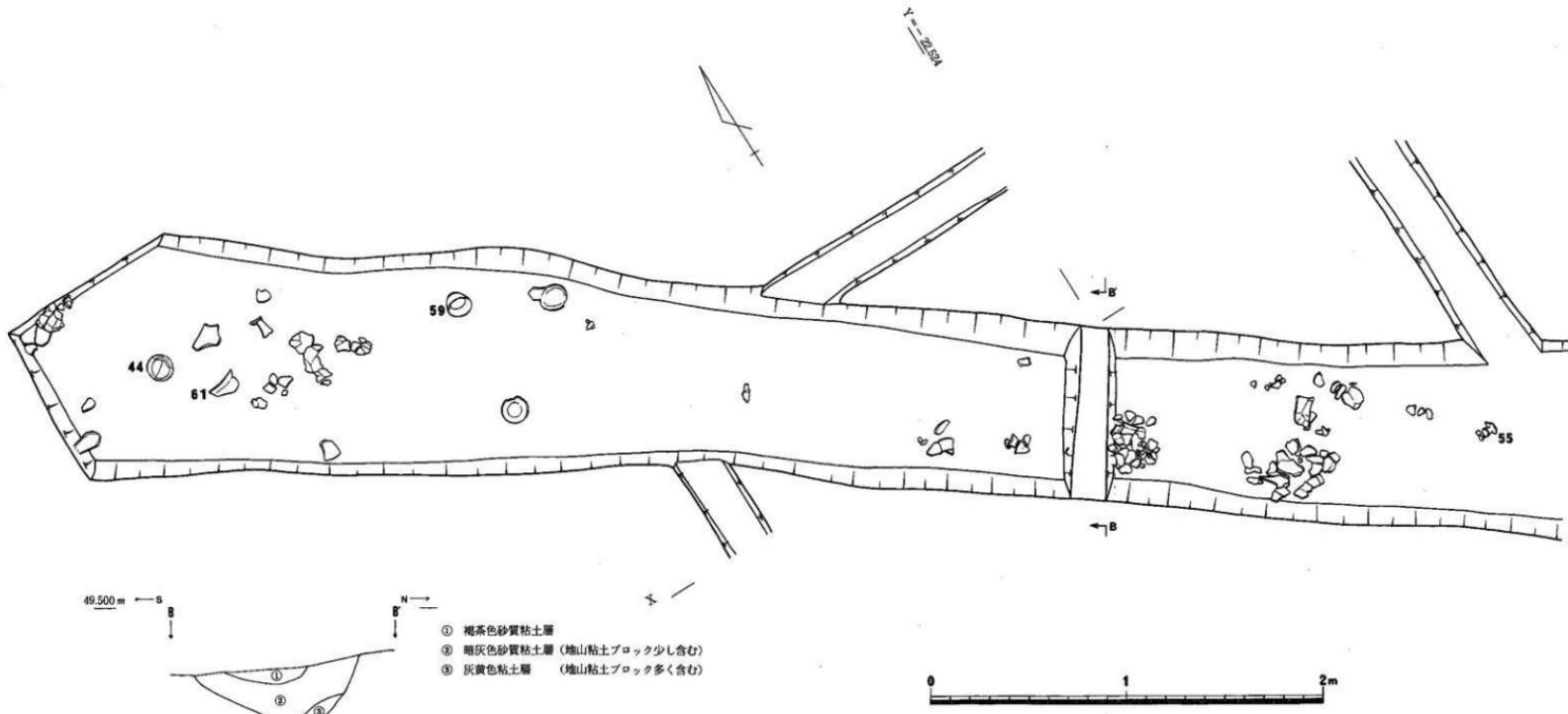


図19 SD-03 遺物出土状況および土壌断面図2 (S : 1/20)

## (2) SD-03

### A (平面形、図18・19)

北西～南東方向に直線的に伸び、調査区を横切る溝状の遺構である。幅は1～1・2mを測る。なお、検出部位の中央東よりにやや北に拡がる部分をもつ。

### B (層序、図18・19)

断面形状はU字形を呈し、深さは約30cmを測る。堆積土層については、上面に小さくやや色調の異なる層が見られる部分があるものの、ほぼ暗灰色砂質粘土1層に限られる。なお、埋没は人為によるもの可能性が高い。したがって本遺構では遺物については層による区分を行っていない。

### C (出土遺物、図18～22)

**出土状況 (図18・19)** 出土遺物は相互にまとめて出土するという形ではなく、それらは比較的散発的な状況で出土した。時期については、TK-10、ないしは47型式の須恵器、それに併行する土師器が主体で、また、若干の布留式土器も伴った。これらについては、後述のSD-02等の時期の遺構からの混入とみられる。

**遺物 (図20～22)** 41は、韓式系陶質土器の蓋である。偏平な器体に凝宝珠状のつまみが付く天井部外面には丁寧な手持ちヘラケズリが施されており、全体として精緻な作りの土器である。

42～46は、須恵器杯蓋である。46はTK-10型式、他のものはTK-43型式に比定できる。なお、46では天井部外面にヘラ記号がある。

47～49は、須恵器杯身である。48・49はTK-10型式、47はTK-43型式にあたる。

50は、須恵器器台（脚台部）である。外面にカキメ（7本/cm）を施し、波状文を描いている。透しは方形のものをもつ。

51は、須恵器高杯（脚部）である。短脚の一段透しだが、杯部がないので時期の詳細は不明である。脚部外面にカキメ（5本/cm）を施し、方形透孔を3方向より穿つ。

52～55は、土師器高杯である。時期は上記の須恵器と平行するものであろう。

56・57は、土師器高杯である。56の杯部は、脚部に対しはめ込むような構造となる。

58は、土師器底部である。外面の一部にケズリがみられる。

59は、土師器鉢である。下端に剥離痕を有しており、台付であった可能性もある。特異な形状であり、管見に類例を見ない。

60は土師器二重口縁壺、61は同広口壺である。いずれも破片のため、詳細は不明。

なお、ここにあげた56～61は、いずれも遺構より古い時期の資料の混入である。その所属する時期は庄内期末～布留期初頭と思われる。

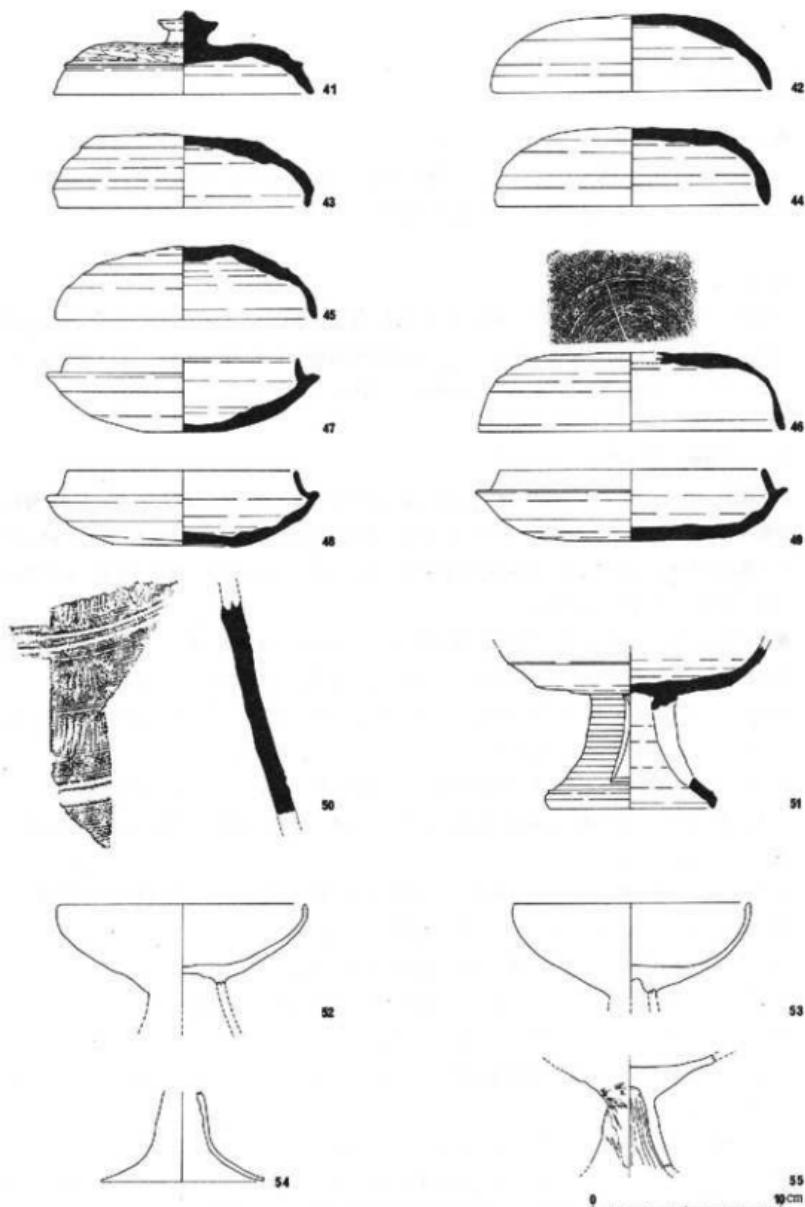


図20 SD-03出土土器実測図1 (S : 1/3)

K47～K58は、いずれも韓式系軟質土器（甕）の破片である。格子目叩きを外面に施す。時期は、TK-10ないし43型式に平行するものと考えたい。

#### D（総観）

SD-03は、遺構全体としてはその一端が調査されたに過ぎないので、全体としてどのような構造となるかは不明である。また、遺物の出土状況としては、一括して廃棄したような痕跡は見出せず、それは完形品が多いとはいえ、出土状況としては、散発的である。また、出土遺物中に韓式系土器が含まれる点は注目されよう。

なお、SD-03の埋没は自然的要因によるものではなく、人為的と思われる。また、埋土中に地山ブロックを含むということは、この溝が開削後比較的短期間のうちに埋められたことを示しているように思われる。

なお、同種の遺構としては、市内では長塚遺跡における「方形区画溝」<sup>⑩</sup>があるが、現時点では、その性格等については具体的な説明は為されていない。今後、鋭意類例となる事例を検討してゆきたいと考える。

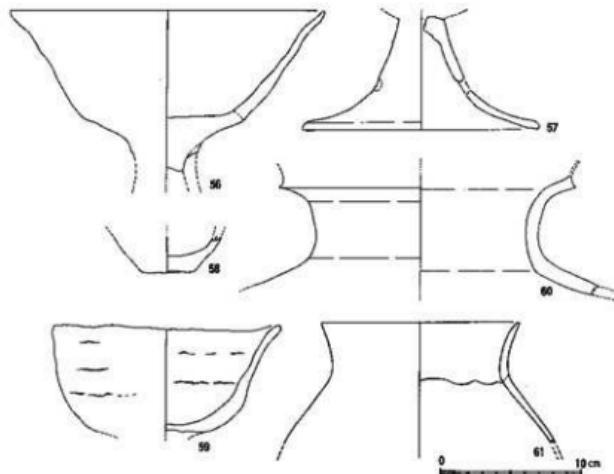


図21 SD-03出土土器実測図2 (S: 1/3)

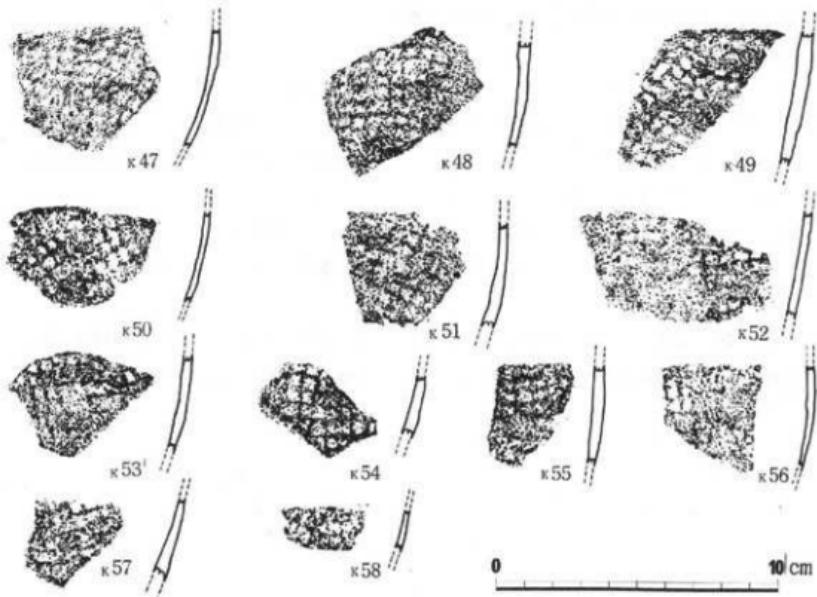


圖22 SD-03出土韓式系軟質土器拓影 (S : 1 / 2)

(3) SK-06

A (平面形、図23)

平面形状は不整円形で、北西部に一部突出した部分がある。これについては、遺構に付属した何らかの構造物を除去した痕跡のようにも見受けられる。規模は、東西約2m、南北約2.5mを測る。

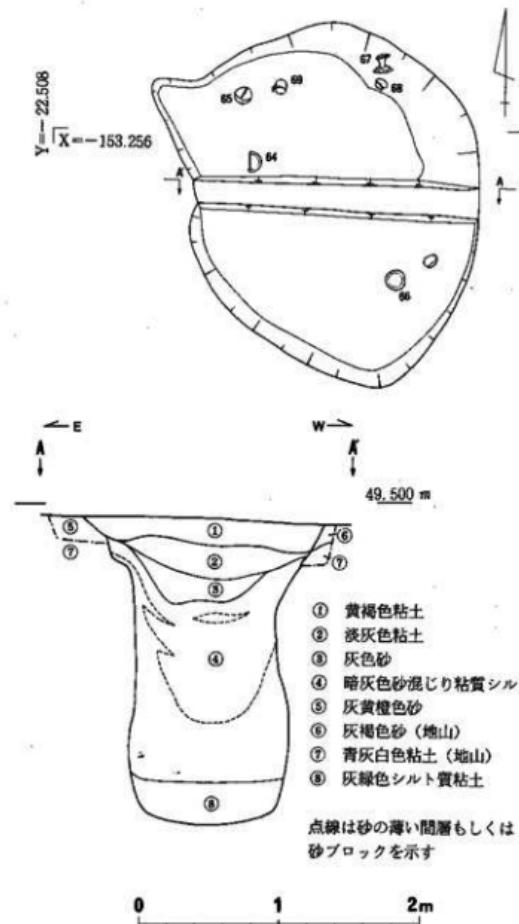


図23 SK-06平面図および土層断面図 (S : 1/40)

B (層序、図23)

層序について下層より述べる。⑧層は、地山である。灰緑色（酸化すると茶褐色となる）を呈し、シルトを多く含む層である。④層は暗灰色の泥質土より成る、厚さ1.5mにも及ぶ厚い堆積層であり、本遺構の堆積土の大半を占めている。なお、層中に砂より成るごく薄い間層や、砂ブロックが含まれる（図23中、点線で標示）。後述の多量の木製品、特にツチノコは⑧層の最下部よりまとまって出土した。①～③層は、④層とはやや間をおいて堆積したとみられる層である。とくに①～②層中からは図24の遺物中64～69が出土している。なお、これによって与えられる①～③層の堆積時期はTK-209型式期、すなわち6世紀後葉である。また、先述の④層に関してはMT-15型式期、すなわち、6世紀前葉と考えられる。

なお、遺構の深さは検出面より約2.2mを測る。ちなみに、より下部の湧水層（粗砂層）には達していない。

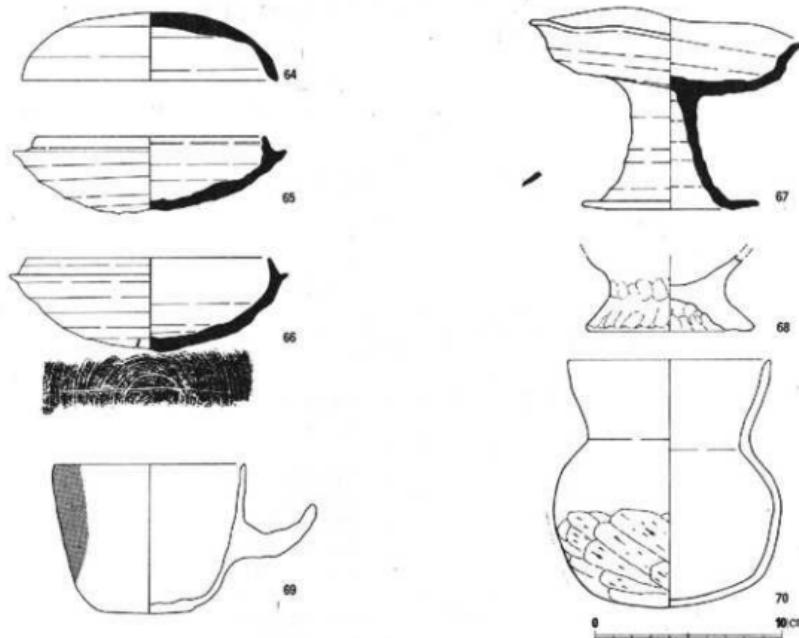


図24 SK-06出土器実測図 (S : 1/3)

C (遺物、図23~27)

**出土状況** 図23に、①～③層の遺物出土状況を示す。個々の遺物は比較的散らばって出土しており、まとまりはみられない。なお、④層下部では図版7-2に示すように、木製品(ツチノコ)が縦集した状況で出土した。なお、SK-06出土遺物中、64～70は第①～③層、71・74は③、④層の層界、以外は④層中より出土した。また、木製品は全て④層中より出土している。

**土器** 64・71は、須恵器杯蓋である。TK-209型式に属する。

65・66・72は、須恵器杯身である。このうち、65・66はTK-209型式、72はMT-15型式に属する。なお、66は底部にヘラ記号を持つ。

74は、須恵器壺である。口唇部の形状よりTK-209型式に属するものと考えられる。

67は、韓式系陶質土器高杯(無蓋)である。いびつな杯部に、透し孔をもたない脚部を有する特異な形状である。なお、脚裾部は外に強く屈曲するのが特徴である。時期は出土層位より考えてTK-209型式期である。

68は、土師器の脚台部である。内、外面共に押捺痕を有する。

69は、土師器把手付碗である。コップ状の体部に偏平な屈曲した把手が付く。

70は、土師器直口壺である。底部外面にヘラケズリを施している。

73は、土師器の底部である。丸底で内、外面共にハケメ(10条/cm)を施している。

75は、土師器把手付壺である。球形の体部に、偏平な把手を2つもつ。体部内面はケズリを施し、外面はハケメ(4条/cm)を施す。

**石製品** 76は、砥石である。図示した2面に磨痕を有する。なお、石材は泥岩である。

**木製品**(図26・27、樹種については表9参照) M-2およびM-3は、板状の製品である。用途は不明。

M-4は、棒状の一端を薄く削った製品の一部である。用途は不明。

M-5は、武器形木製品の把部もしくは柄部と思われる。心持材を念入りに削って整形を施している。

M-6は、刀形木製品である。把部刀部共に精緻な整形が施されている。用材として堅いカシを用いており(表9参照)、またその大きさから考えても、実用の木刀としても充分に使用できる製品である。

M-7は、杭である。直径6.5cmもある大型品で、遺構の側壁にへばり付くように出土したことより考えて、かつてこのSK-06に存在した木製の構造物の一部である可能性が高い。

M-8～20は、全てツチノコである。全部で13個体を数える。このうち、M-20を除く12個体は、④層下部でひとかたまりで出土した(図版7-2)。全て心持材を用いており、材も同種である(表9参照)。心持材を適当な長さ(16～18cm程度)に切り、両端および中心部を削り取ったのみの粗雑な作りである。さらに、顯著な使用痕もみられないことより、これらのツチノコは、一回のみの使用で廃棄された可能性が高い。

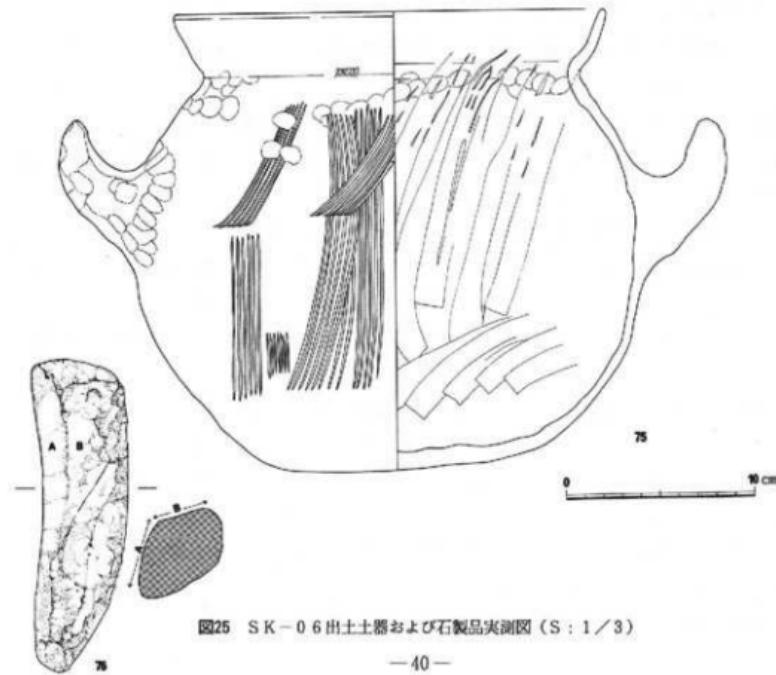
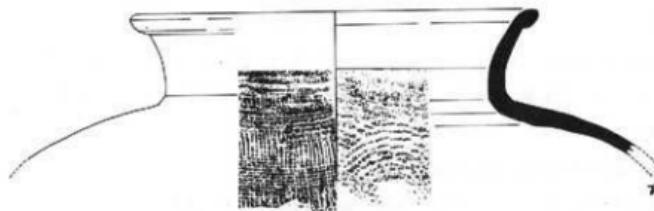
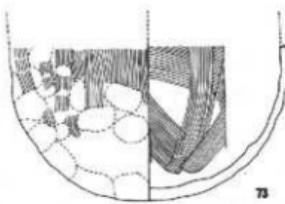
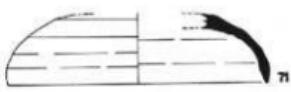


図25 SK-06 出土土器および石製品実測図 (S : 1/3)

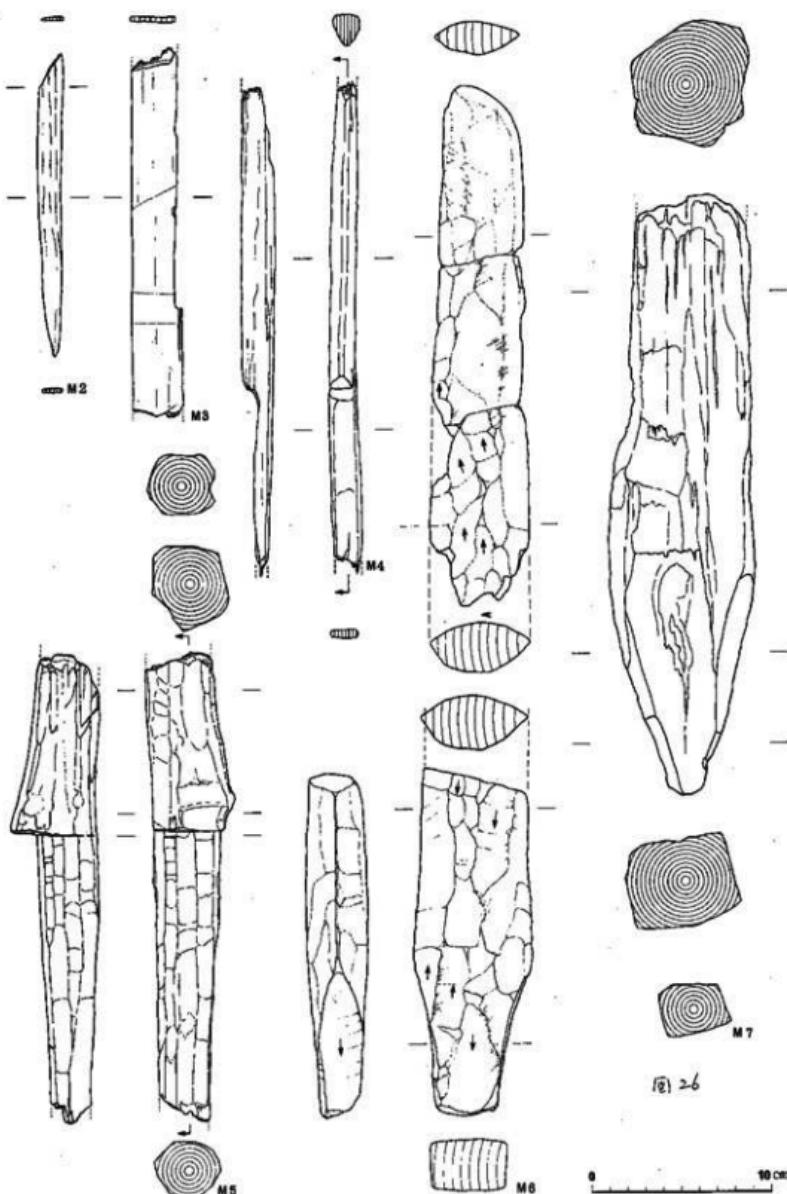


図26 SK-06出土木製品実測図1 (S : 1/3)

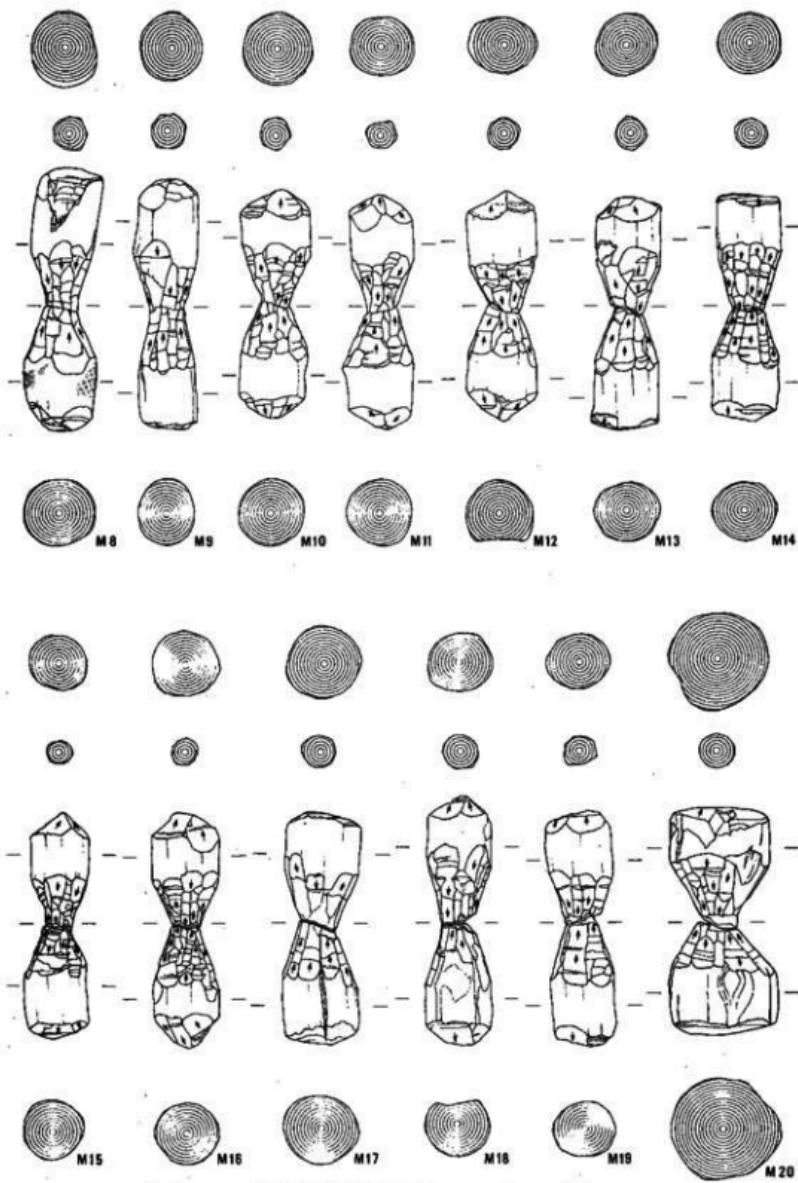


図27 SK-06出土木製品実測図2 (ツチノコ S : 1/4)

0 10cm

#### D (総観)

このSK-06の特徴としては、埋土の時期が6世紀前葉と、同後葉に大別できることがまずあげられる。また、見方によっては、④層による遺構の埋没後、①～③層がそれを切りこんだものとも考えられよう。この場合は、遺構上面に存在した何らかの構造物を撤去したに伴うと考えるのが適当であろう。

つぎに、出土遺物の面より見ると、韓式系土器の出土や、やや特殊な土師器（把手付楕、および甕）の出土、ならびに多量の木製品の出土（特にツチノコ）が注目される。なお、この木製品の内には刀形等の祭祀具も含まれている。ちなみに、ツチノコの多量埋納例をもつ遺構としては、菅見では唐古遺跡例<sup>20</sup>と多遺跡例<sup>21</sup>がある。

以上の諸点によって推定される遺構の性格であるが、まず候補として井戸が考えられよう。ただし、この場合には、現在の主な湧水層（粗砂層）に遺構の下部レベルが達していない点より、やや難がある。また、①～③層をさきに「施設の抜取りに伴うもの」としたが、その「施設」が井戸枠であれば、当該者はさらに下部に至ることが想定されよう。

つぎに、この遺構が木製品の貯蔵穴として考えることも、多量の木製品の出土を前提として可能となる。ただ、この場合には韓式系土器等の特殊な土器の出土、という要素がやや疑問となる。

また、第3の見解としては、祭祀的な遺構としてのものがあげられる。この場合は、出土した遺物はなんらかの祭祀的行為に用いられたものとして捉えられよう。時代は下がるが、藤原～奈良時代には土坑を主体とする祭祀形態の存在が指摘されており<sup>22</sup>、それらは外来神（寄人）を祀る要素が濃いものといわれている。今回のSK-06に関しても、韓式系土器等の出土は、この遺構の用途を推するうえで重要なポイントとなるものと思われる。

以上、この遺構の性格について3つの案を示したが、そのいずれが正しいか、あるいは全く他の性格の遺構なのかは、現時点では不明である。それについては後日、類例の増加によって判断したいと考える。

(4) SK-08

A (平面形、図28)

平面形は不整円形を呈する。東西径が約0.8m、南北径は約0.9mを測る。

B (層序、図28)

壁はほぼ垂直に掘り下されており、底面は平坦である。深さは検出面より約60cm。層序は、平行堆積は認められず、砂質土中に粘土層(①層)が挟まる形となる。なお、遺物は全てこの①層中に含まれていた。

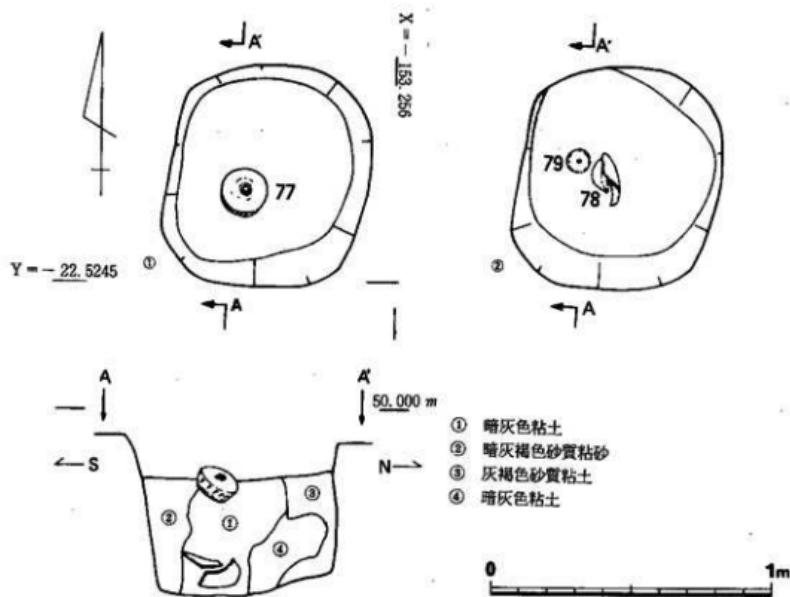


図28 SK-08 平面図および土層断面図 (S : 1/20)

C (遺物、図28・29)

出土状況 (図28) 77のみが比較的上部より出土し、他は破片も含めて下部より出土した。なお、既述の通り遺物は全て粘土層 (①層) に含まれていた。

遺物 77は、須恵器長頸壺である。脚台付 (ほとんど欠損) で該部に円形の穿孔をもつ。また、体部に列点文を施している。

78は、須恵器杯身である。TK-209型式に属するが、前出のSK-06出土のものよりは粗雑で、時期的にやや下がるものもある。

79は、土師器把手付鉢である。前出の69 (SK-06出土) に比すると、やや浅い鉢部に、手づくね成形による把手が付く。時期は、78に併行するものと考えられる。

D (縦観)

本遺構は、その形状、規模、および埋土より考えて柱穴の可能性が最も高いが、今回の調査ではそれと組み合う柱穴が確認できなかったので、他種の遺構の可能性も考えねばなるまい。なお、出土遺物の上から、遺構の性格を特定することは困難である。

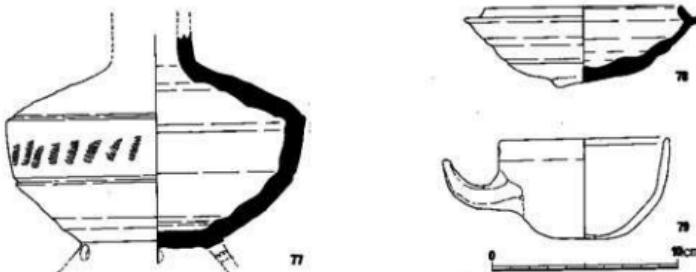


図29 SK-08出土土器実測図 (S : 1/3)

(5)  $SX = 0.1$

### A (平面形、図30)

本遺構は調査区の北西隅より検出されたため、全体の形状は不明である。なお、形状等より考えて竪穴住居の可能性はない。

目 (圖序、圖30)

本構造は、深さが最深部でも12cmしかなく、堆積土も灰褐色粘土層1層に限られる。

#### C (遺物、図30・31)

**出土状況** 遺物は、須恵器（杯、杯蓋）を中心とする。いずれもまとまりではなく、まばらに出土している。

遺物 80は、須恵器杯蓋である。他の須恵器（杯身）に比すると、やや時期的に下る（TK-43型式）資料である。

81~83は、須恵器杯身である。いずれもTK-10型式に属する。

D (送親)

本遺構は前述の通り全体形状が不明のため、遺構の性格等については明らかではない。なお、出土遺物（須恵器）より考えて、遺構の埋没時期は6世紀中葉～後葉と思われる。

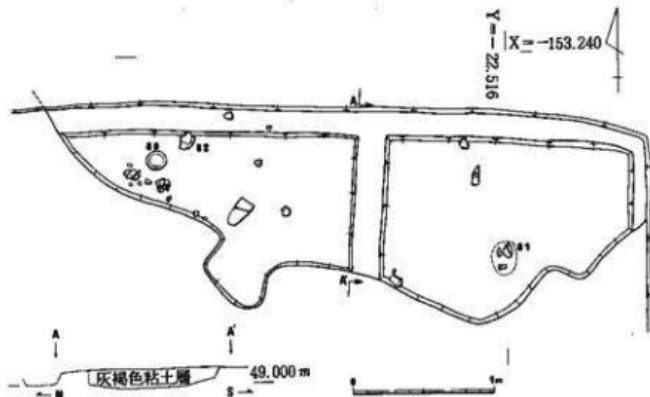


図30 SX-01平面図および土層断面図 (S : 1/40)

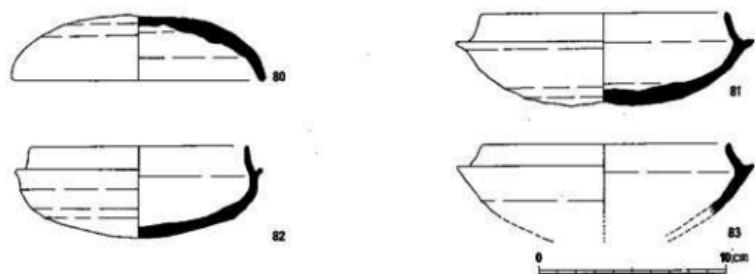


図31 SX-01出土土器実測図 (S : 1/3)

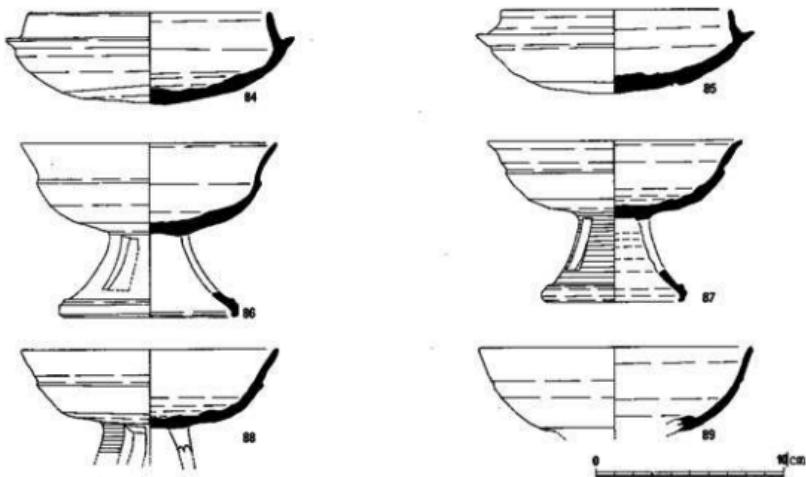


図32 SX-02出土土器実測図 (S : 1/3)

(6) SX-02

C (遺物、図32)

84、85は、須恵器杯身である。いずれもTK-10型式に属する。

86~89は、須恵器無蓋高杯である。いずれも短脚一段方形透しで、三方向より穿っている。所属する型式は共伴の杯身より考えてTK-10型式の可能性が高いが、その場合は短脚という点に疑問が残る。

※) 本遺構には、全体測量(航測)後に検出した遺構であるが、調査時に作成した実測図、写真フィルム一式を現場撤収時に紛失してしまった。通常考えることのできない失態であり、弁解の余地がないが、ここではとりあえず、記憶を基に形状、規模、層序等を以下に記しておきたい。今後こうしたことが起こらぬよう、調査員一同気を引き締めたいと思う。

本遺構は直径約2mの不整形の土坑である。深さは約40cm、堆積土は灰褐色粘質土一層に限られる。

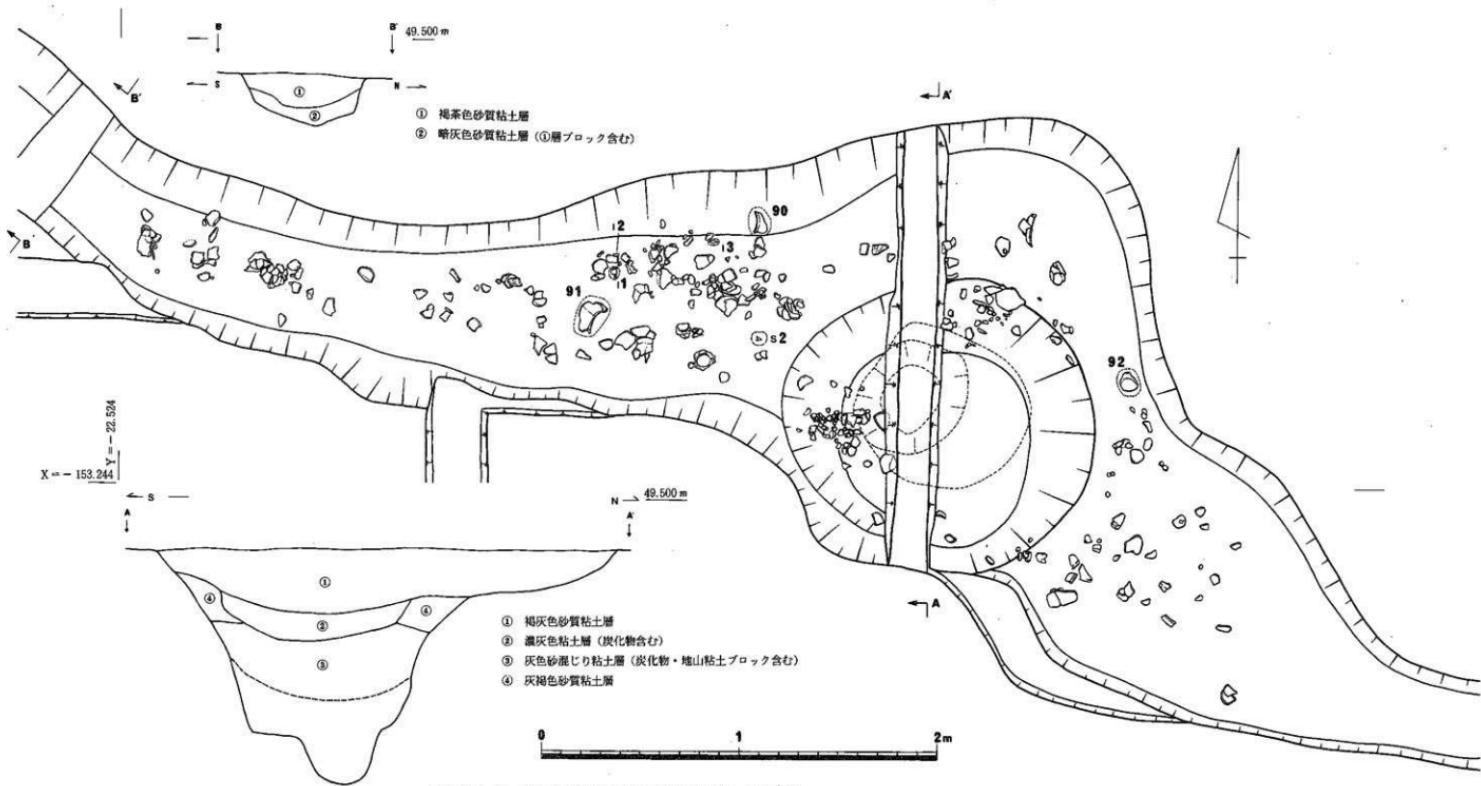


図33 SD-02、SK-02 遺物出土状況および土層断面図 (S : 1/20)

(7) SD-02 (SK-02)

A (平面形、図33)

本遺構は、直径1.5mの円形土坑(井戸)の西側に彎曲した溝(幅約80cm)が付く形となる。また、土坑(井戸)の東側にもごく浅い溝状の遺構がとり付く。なお、図33で示したSK-02平面図中、点線で示したのは、遺構完掘後の状況を示している。

B (層序、図33)

SK-02(土坑=井戸)部分より述べる。深さは約1.2mと、比較的浅いものの、底面が溝水層(砂層)に達しており、豊富に湧水する。また、断面形状にみられるように、段掘りがみられる。層序は、中央に濃灰色の粘土層(堅くしまる)を挟み、灰色の砂質土が堆積している。なお、遺物はあまり含まないが、②層中には炭化物の混入を多く認めた。

SD-02部分は深さ約25cmと浅く、層序は2層に分けて示してあるが、両者の境界はさほど明瞭ではない。

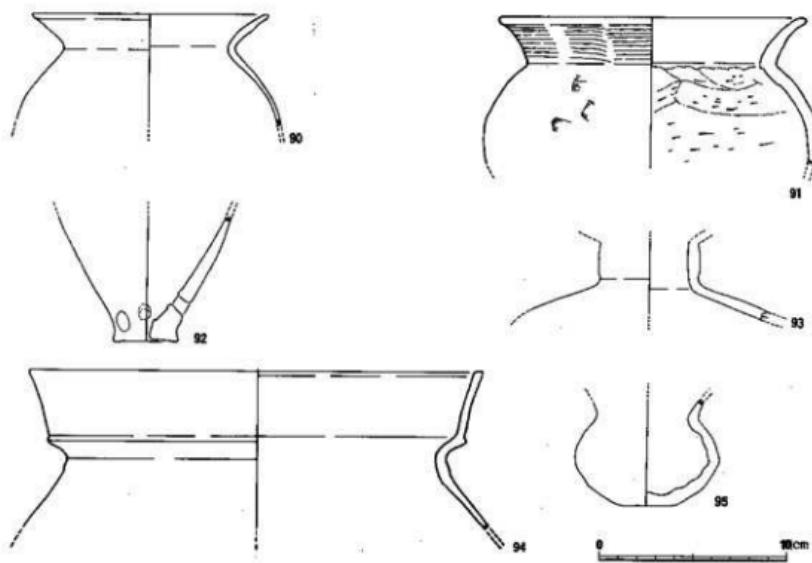


図34 SD-02出土土器実測図 (95のみ SK-02出土 S: 1/3)

### C (遺物、図33~35)

出土状況 (図33) 遺物は、SK-02の周辺において特に多く認められた。ただし、いずれも破片であり、完形品の出土はない。なお、SK-02内部からは、土器はほとんど出土しなかった。また、SD-02埋土中には、サスカイト製の石錐 (図42-S 2・4) や、フレイク、チップが多く含まれていた。おそらくは混入であろうが、一応ここに紹介しておく。

土器 90は、土師器壺である。口唇部は丸くおさめ、体部内面にはケズリを施している。

91は、土師器広口壺である。やや外彎する口縁部をもつ。なお、体部内面にはケズリを施す。

92は、土師器有孔鉢である。穿孔は3方向である。

93、94は、土師器二重口縁壺である。表面剥落が著しく、調整は不明。

95は、SK-02より出土したもので、土師器小形丸底鉢である。内面に指頭痕を有する。

以上の土師器の属する時期は、布留期初頭に位置付けられよう。

鉄製品 I-1および2は、刀子状の鉄製品であるが、正確な使途は不明。

I-3は、柳葉形の鉄錐である。茎は比較的長く、長方形の断面形状をもつ。

### D (総観)

当該遺構は、井戸と溝が一対となる、いわゆる「溜め井」と思われるものである。井戸 (SK-02) 部分より湧水した水は、溝 (SD-02) を通じて耕作地へと導かれたものであろう。したがって、SD-02の伸びる方向 (遺構西側) には、水田等の耕作地が存在した可能性が高い。なお、既述のSD-03がSD-02とほぼ平行する関係にあるのは興味深い事実である。両者には約200年の隔たりがあるが、いずれも耕作関係の遺構とすれば、該地近隣には水田等の生産域が展開していた可能性を示す。なお、このことは第V章-3の金原報告と合わせて見ると、より具体的に理解されると思う。

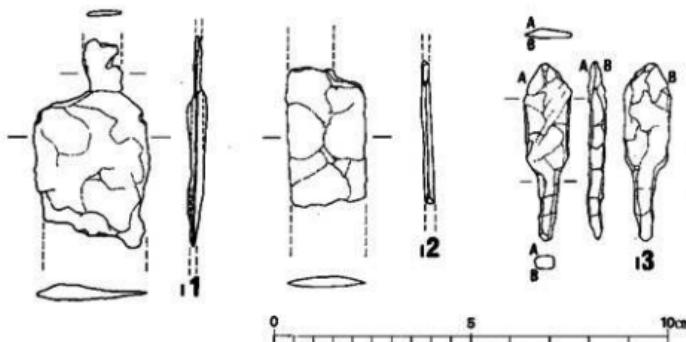


図35 SD-02出土鉄製品実測図 (S : 7/10)

(8) SK-05

A (平面形、図36)

長径110cm、短径95cmの長円形を呈する土坑である。遺構の規模はさして大きくはないが、内部より木製品が多量に出土した。

B (層序、図36)

深さは検出面より約140cmを測る。断面中央部付近で壁を若干オーバーハングしている部分が見られる。

堆積層は4層に分層可能である。上層よりその概要を記す。①層は、褐色を呈するシルト質粘土層である。本遺構出土の土器の約90%は当該層より出土した。②層は、暗灰色を呈する泥状の粘土層である。炭化物を多く含んでいる。また、木製品および種子類(図版25一下)の多くは当該層より出土した。③層は基本的に②層に似るが、緑灰色の粘土ブロックを多く含むのが特徴である。当該層からはM28等の木製品が出土した。④層は、緑灰色を呈するシルト質の粘土層である。遺物はほとんど出土しないが、最下部より二重口縁壺(105)が正立の状態で出土した。なお、②層以下の緑灰色粘土ブロックの混在は、地下水の滲出による遺構側壁崩壊に伴う地山土の混入とみられる。

C (遺物、図36~39)

出土状況 図36では、前項の①~④層ごとに、遺物の出土状況を示している。最上面では土器が多く出土し、中層では木製品が出土している。また、最下面では二重口縁壺が正立の状態で出土した。  
土器 ここに示す土器は、105を除くといずれも①層、すなわち最上層に包含されていたものである。

96・99は、土師器小形器台である。96は、脚~体部に孔を有さないもので、内面にミガキが施されている。99は、孔を有し、脚部には3方向より円形透孔を穿つ。

97・100は、土師器小形丸底鉢である。97は、ごく小さい平底を有し、体部内面にケズリを施す。100は、丸底で、ごく短い口頸部をもつ。ケズリはみられない。

98は、手づくね成形による土師器鉢である。内・外表面共に指頭圧痕を明瞭に残し、形状はきわめていびつである。なお、口唇部に火を受けた痕跡を有する。

101は、土師器底部である。やや上げ底気味に仕上げたものと思われるが、器種等は不明である。

102は、いわゆるS字状の口縁をもつ、土師器壺である。体部外表面は板ナデ(7条/cm)が施されている。東海系の壺であり、赤堀次郎氏分類<sup>⑩</sup>のC3に該当する。

103は、土師器底部である。外面にタタキ(7条/cm)がみられる。

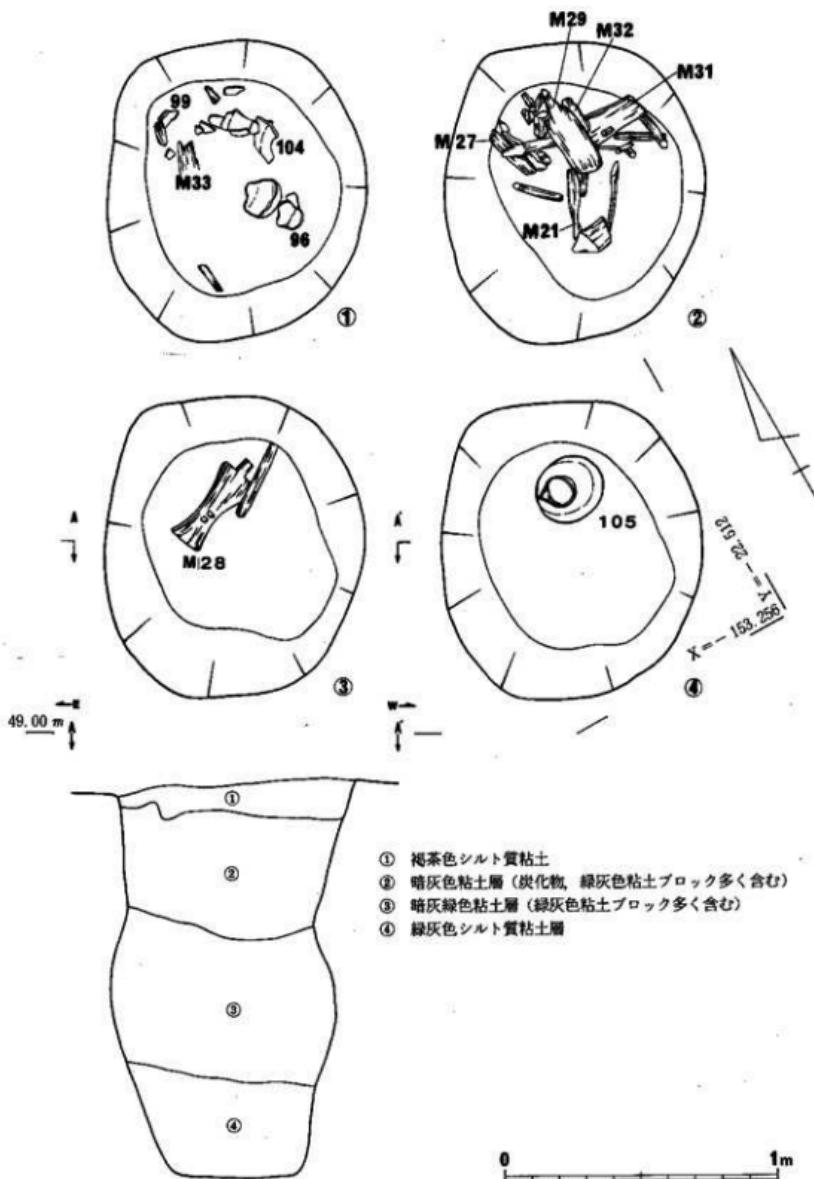
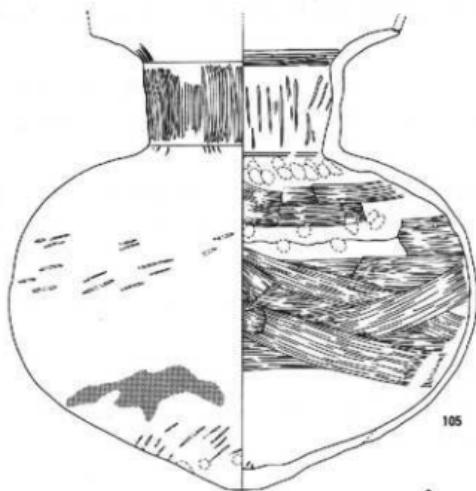
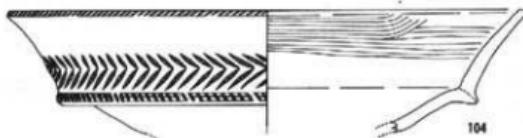
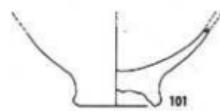
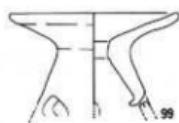
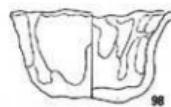
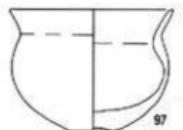
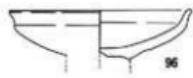


図36 SK-05 遺物出土状況および土層断面図 (S : 1/20)



0 10 cm

図37 SK-05出土器実測図 (S : 1/3)

104は、土師器二重口縁壺の口縁部である。櫛状工具先端の刺突による綾杉文が施されるほか、口唇部および屈曲部にも同じ工具による刺突文（刻目）がみられる。なお、内面には煤の付着をみる。105は、二重口縁壺である。口縁部以上を欠く。頸部外面はヘラミガキが施され、内面も同様にヘラミガキがみられる。体部はタタキの後、ナデで仕上げている。また、同内面は板ナデが施されている。なお、内面全面および外面の一部に煤が付着している。

以上の土器は、庄内式中葉～後葉に位置するものと思われる。なお、近在の例としては纏向跡跡南溝中層出土のもの<sup>④</sup>がこれに近い。

木製品 本遺構では、土器よりも木製品ないしは自然木、半加工木が出土総量としては大きく上回る。ここでは、製品についてのみ報告する。

M 2 1は、二又のナスピ形農具である。縛痕があることより、使用された製品であることがわかる。本遺構ではこれに接合する資料がないので、破損後、何らかの目的でここに入れられたものと推定される。

M 2 2は、男根を形象したと思われる土製品である。基部が一部折損しているが、形象は比較的リアルであり、興味深い資料といえよう。

M 2 3は、柄を作りだした板材であり、何らかの組物の一部と思われるが、両端を焼失しており、全体の形状は不明である。

M 2 4は、舟状に整形された木製品である。用途は不明である。

M 2 5・2 6は、棒状の両端に抉りを施した木製品である。形状より推して織機の経巻具と思われる。<sup>⑤</sup>

M 2 7は、板状の材に、図示した上端部に方形の穿孔をもつ製品であるまた、先述の穿孔右下および下端部分にも穿孔がみられる。図示右下半部を欠失しているため、全体の形状および用途については不明である。

M 2 8は、板状の両側端を弧状に抉り、図示した上端に柄を削りだした製品である。また、中央やや下より2つの柄穴を穿っている。正確な用途は不明であるが、その形態より考えて机もしくは椅子等の構造物の脚とも考えられる。

M 2 9は、板状の材に粗い加工を施したのみの資料で、おそらく農具等の未製品であろうと思われる。

M 3 0は、細長い板状の資料である。用途は不明である。

M 3 1は、板状に長方形の柄穴を穿った資料である。何らかの構造物の部材であろう。

M 3 2・3 3は共に板状の残欠である。

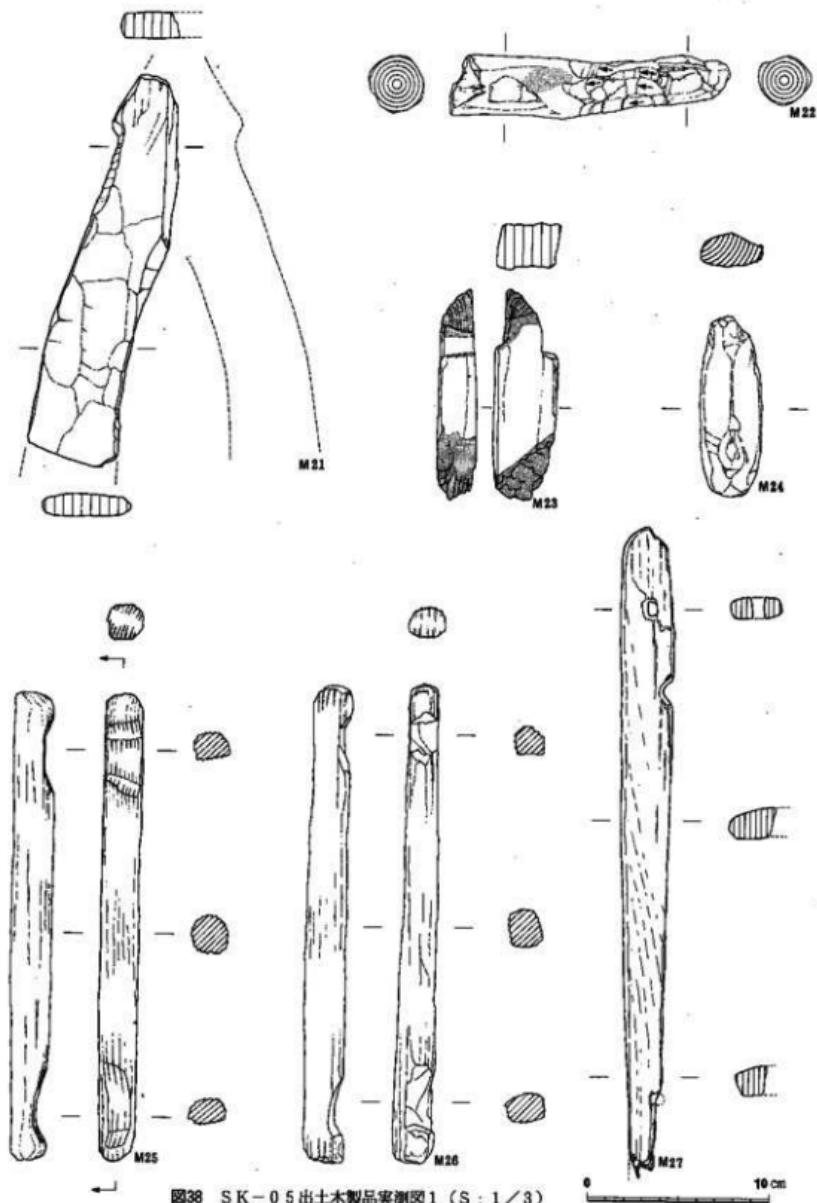


図38 SK-05出土木製品実測図1 (S : 1/3)

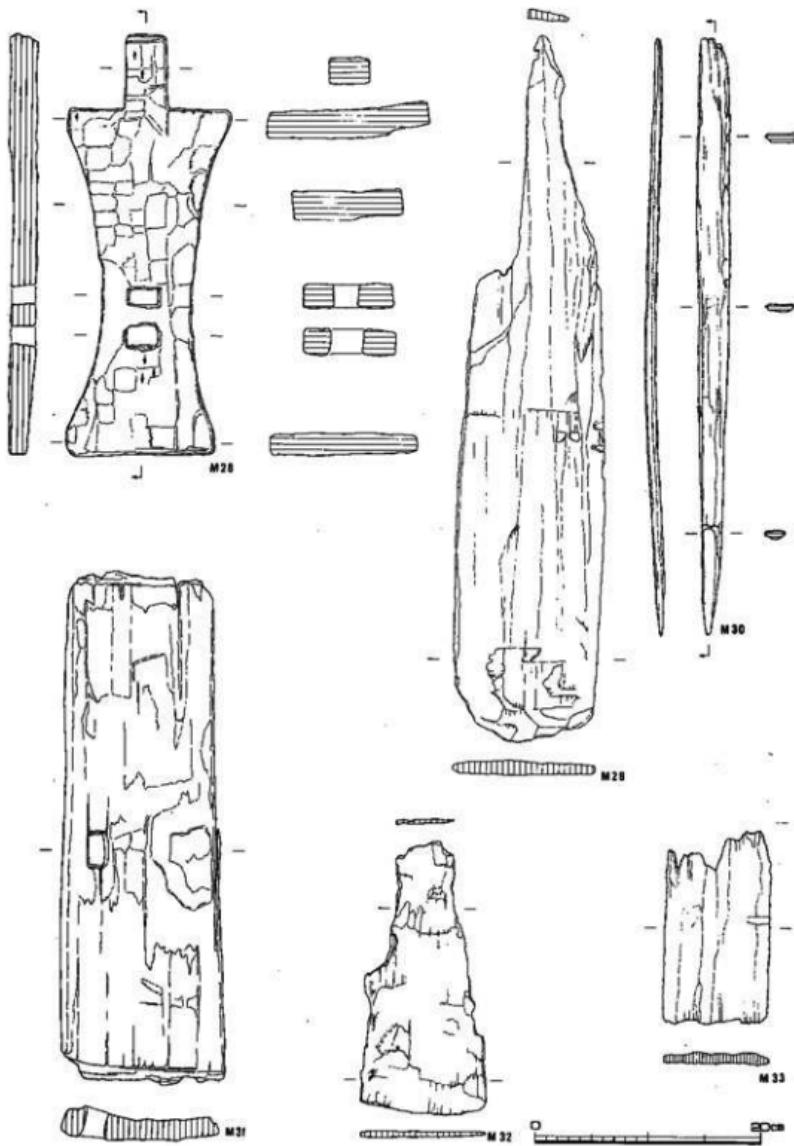


図39 SK-05出土木製品実測図2 (S : 1/5)

## D (総観)

本遺構は、その形状および出土遺物より推して、木製品の貯蔵穴であった可能性が最も高い。他に候補としては井戸が考えられるが、それについては井戸枠あるいは枠を抜き取った痕跡が土層等にみられないこと、および掘削深度が地下水の豊富に湧く層（粗砂層）に達していないことから、ここではその可能性を認められない。

### (9) その他の遺構および出土遺物（図5、40）

SD-04 本遺構は、幅30~40cm、深さ5~10cmの小規模な溝状遺構である。時期は後述の出土遺物より考えて6世紀前葉であるが、同時期のSD-03（前期）に比すと、規模等は貧弱である。なお、性格についても不明である。

106は、須恵器高杯の杯部である。体部外面に櫛描の列点文を施す。

107は、須恵器杯蓋である。口縁端部に面をもつ。106・107ともにTK-10型式に属する資料である。

108は、須恵器器台の破片である。外面にカキメおよびヘラ描きの縦線を施す。方形の透孔を有する。

SD-05 本遺構は、幅20cm~40cm、深さ5~10cmの溝状遺構であるが、周囲の溝状遺構と共に方形の区画を為している点が注目される。その性格については不明であるが、方形周溝墓として考えるには、規模の点で問題があろう。ここでは、農耕に係る何らかの遺構として考えておきたい。

なお、時期は出土した須恵器杯身（109）よりみて、TK-10型式期（6世紀前葉）と考えられる。

P-39 今回の調査においては、とくに調査区の南西部において多くの柱穴状のビットを検出したが、建物としての明確なまとまりは捉えることができなかった。なお、実測可能な土器はP-39より出土した土師器壺（110）1点のみであったが、他のビットからはそれと時期の異なる須恵器小片等も出土している。いずれにせよ個々のビットの正確な時期を捉えることは困難であった。ただし、これらのビットが掘立柱建物の柱穴としても、それはごく小規模なものであったと思われる。

SK-03 本遺構は、SD-02の北に接して存在する、方形のごく浅い（最深部で約5cm）遺構である。遺物には庄内～布留式期にかけての土器片が若干含まれていた。

111は、土師器小形器台である。杯部から胸部への穿孔はない。

112は、土師器壺である。口唇部を内側に肥厚している。

113は、包含層より出土した土師器壺である。外面に粗いタタキ（3条/cm）を有する。

114は、砥石である。断面に示すように、4面において磨痕を認める。

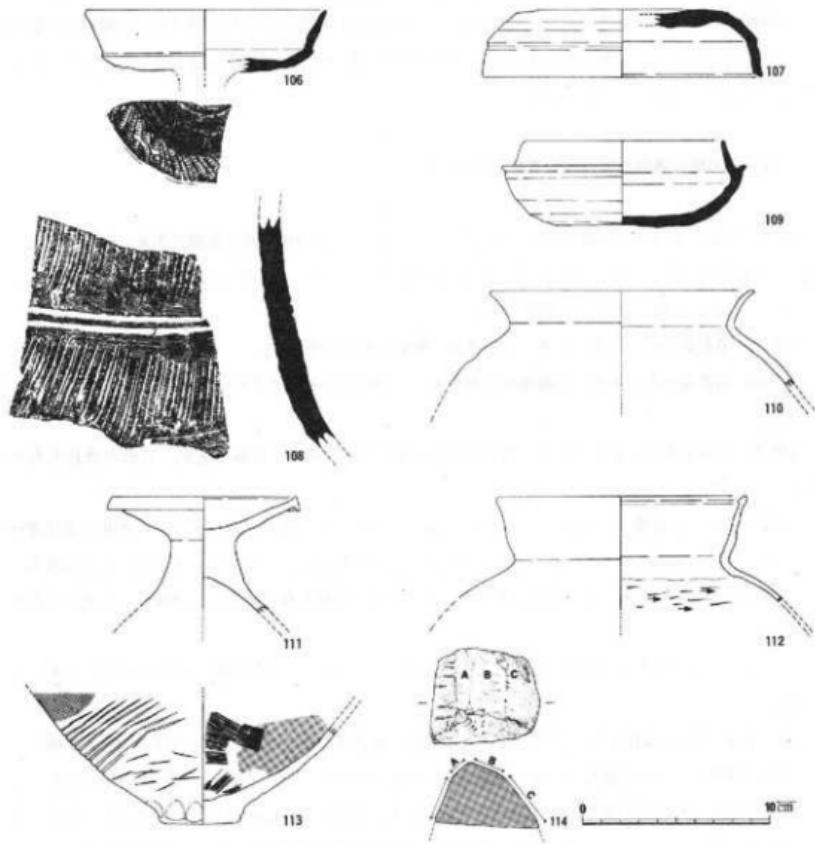


図40 その他の遺構出土土器および石製品実測図

(106~108=SD-04、109=SD-05、110=P39、  
111,112,114=SK-03、111=包含層 S:1/3)

## ⑩ 繩紋土器 (図41)

今回の調査では、SD-01中より若干の繩紋土器と思われる破片を検出したため、同遺構の完掘後、部分的にサブレンチを設け、通常「地山」とされている層をさらに掘り下げる調査を実施した。その結果、下位層（シルト層）中より繩紋土器および若干のサヌカイト製石器および剥片等の出土を確認したので、その出土密度の濃い部分においてグリッドによる掘り下げを実施した。その結果、繩紋時代後期の資料を得ることができたので、ここに報告したい。

J 1～J 3は、波状口縁をもつ深鉢口縁部の破片である。磨滅が著しいため明瞭ではないが渦文はいずれも粘土紐の貼り付け後、棒状原体によりそれを整形することによってあらわされている。なお、J 1では渦文の下に垂下沈線をあらわす。これらの資料は、泉拓良氏編年<sup>9</sup>のうち北白川上層Ⅰ期に含まれる資料である。また、これは他の繩紋土器についても同様である。

J 4は、細かい多条の沈線が施された資料である。深鉢の破片であろう。

J 5・J 6は、無文の深鉢の破片である。体部の屈曲は比較的ゆるやかであり、このことは北白川上層Ⅰ期の特徴にあてはまる。

J 7～J 9は、深鉢の底部である。いずれも平底状を呈する。

J10は、一見スタンプ状の土製品であり、その末端部は水滴状の形態をなす。中心に深さ8.5mm、直径15.2mm刺突があり、沈線一条がそれを囲む。また、端部より18mmの部位に尖帯を貼り付けている。これは、何らかの装飾品と思われ、具体的には装飾土器の橋状把手の一部ともみられる。J11は、J10端部とほぼ同様の土製品である。ただし、平面形は円形であり、刺突の周囲の圈線は完結している点がJ10とは異なる。なお、背面には剥離痕が残る。土器装飾の一部かと思われる資料である。

## ⑪ 石器、石製品、ガラス小玉 (図42～44)

S 1は、有茎式の打製石器である。比較的大型で、調整は粗い。

S 2～S 4・S 5は、凹基式の打製石器である。S 5に関しては、未製品の可能性もある。

S 3は、一方の脚を欠失する。内弯する側部をもち、薄く精巧に仕上げられている。

S 6は、図示した上下両端に鼓打痕をもつ剥片である。クサビとして使用されたものと思われる資料である。

S 7・S 8は、細部調整をもつ剥片である。なかでもS 8は、長さ87mmを計る大型品である。いずれも、刃器としての用途が推定できる。

S 9は、前項で述べた繩紋土器の包含層から出土した資料である。横型の石匙であり、片面に自然面を残すなど、きわめて粗い調整が特徴である。風化が著しく、色調は淡灰色を呈する。

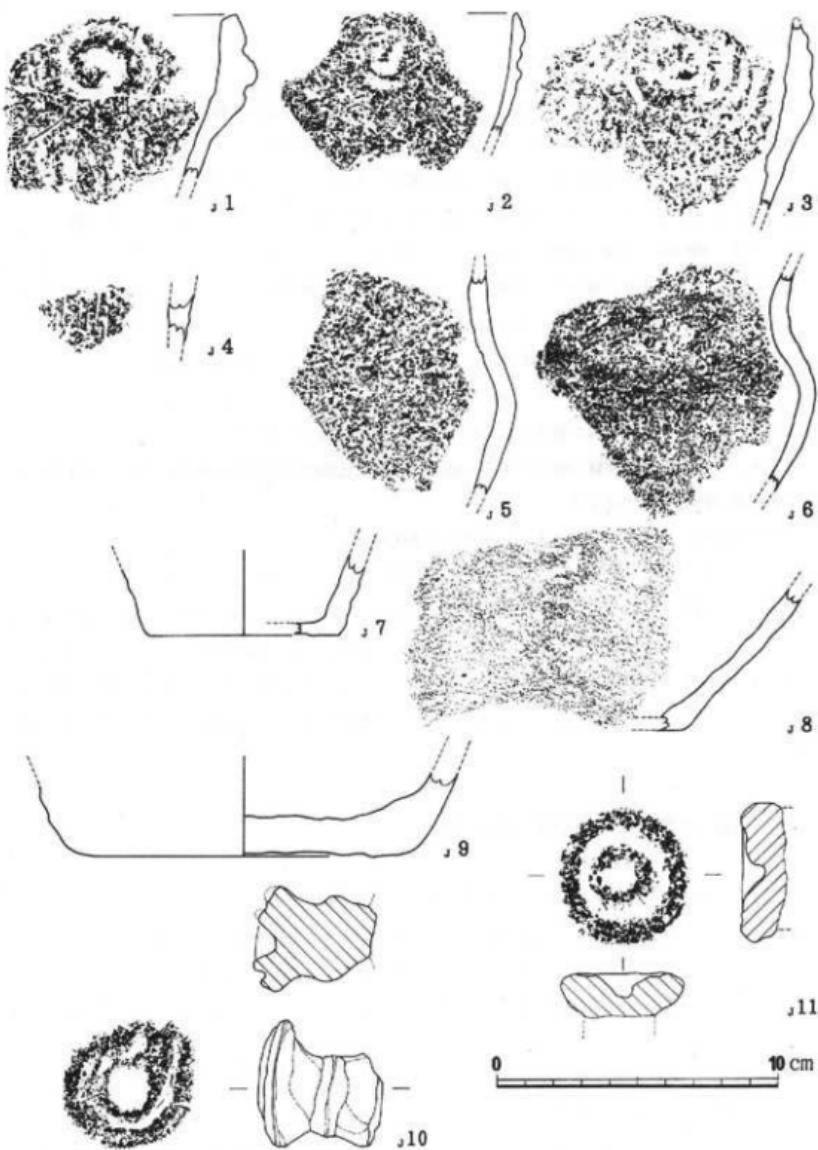


図41 繩紋土器拓影 (S : 1/2)

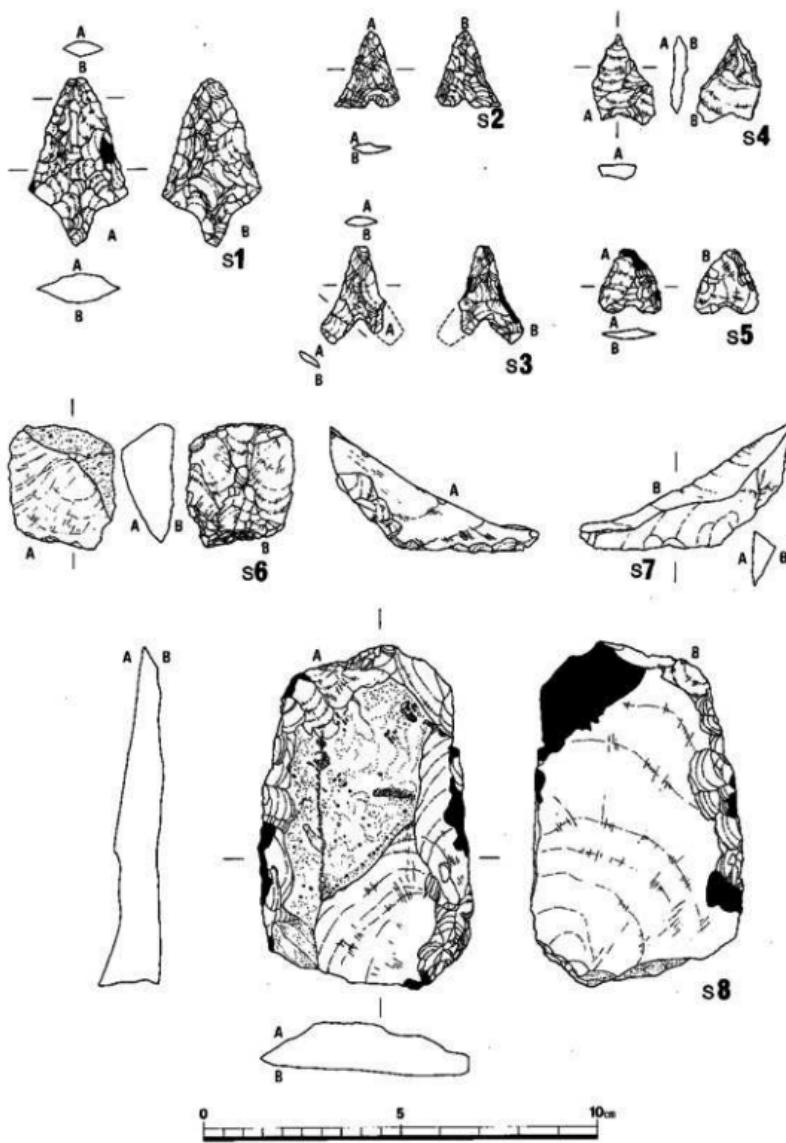


図42 石器実測図1 (S-5, 6, 7, 8=SD-01、S-2, 4=SD-02、S-1, 3=包含層 S: 7/10)

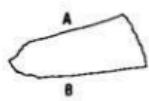
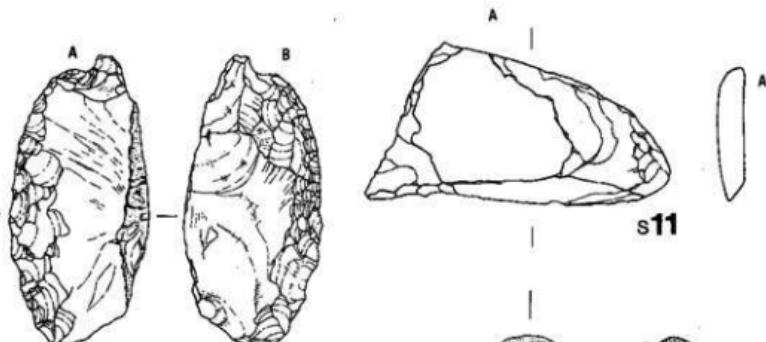
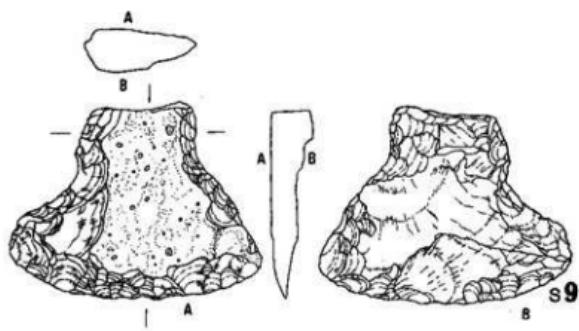


図43 石器実測図2 (SD-01 S: 7/10)

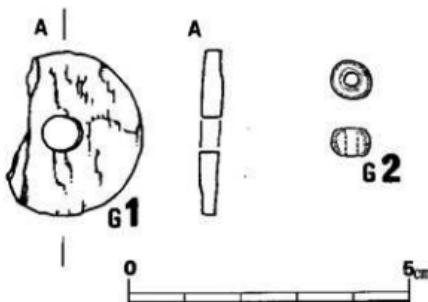


図44 石製紡錘車、ガラス小玉実測図 (S : 1/1)

S 10は、木葉形の素材に丁寧な細部調整を施した製品である。図示した刃部上端付近に抉りがある。なお、刃部の使用痕は比較的明瞭である。

S 11は、磨製石包丁の破片である。紐孔部までは遺存していない。なお、刃は片刃である。

S 12は、磨製石斧の頭部である。断面形状は長卵形を呈する。

G 1は、滑石製の紡錘車である。径 6.0 mm の孔を穿っている。なお、両面ともに石材の特質上剥離が著しいため、原型は不明である。

G 2は、緑色を呈するガラス製の小玉である。径 2.1 mm を計る。なお、器壁に気泡が若干見られる。

#### 〈注〉

①山川均『長塚遺跡発掘調査概要報告』大和郡市教育委員会・1987

②寺沢薰『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊 奈良県立橿原考古学研究所・1986

③藤田三郎「唐古・鍵遺跡第40次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報2 1990年度』 田原本町教育委員会・1991

④寺沢薰「多遺跡 第10次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』1986年度第2分冊 奈良県立橿原考古学研究所・1989

⑤山川均「埋める祭祀考」「考古学論叢」第13集 奈良県立橿原考古学研究所・1988

⑥赤塚次郎『迢間遺跡』徳島県埋蔵文化財センター・1990

⑦石野博信、関川尚功『纏向』桜井市教育委員会・1976

⑧竹内晶子『弥生の布を織る』考古学選書9 東京大学出版会・1989 酒野(旧姓竹内)氏には直接ご教示を得た。

⑨泉拓良「近畿地方の土器」「縄文文化の研究」4 雄山閣・1981 泉氏には直接ご教示を得た。

## IV 原田遺跡の韓式系土器・陶質土器について

### 1. 古墳時代後期の韓式系土器・陶質土器

今回調査した原田遺跡では、複数の溝状遺構より韓式系土器・陶質土器の出土を見ているが、これらの遺構より出土した遺物のうち、SD-01で若干数の古墳時代中期に瀕るものがあるものの、遺物は古墳時代後期後半を主体とし、古墳時代中期に比定される遺物は、韓式系土器の出土量と比較しても明らかに少ない。また、SD-03は深さ約30cmのごく浅い溝であったが、完形品をかなり含む後期の須恵器とともに完形の蓋形土器が出土している。この形態の須恵器は、現在まで中期の遺跡以外にはみられない船載土器、初期須恵器としてとりあつかわれているものである。でありながら、その出土状況から中期のものの混入とすることにはためらいを感じる。そこで古墳時代後期に位置付けられている韓式系土器・陶質土器と原田遺跡出土のものとの比較からこれらの帰属年代を考えてみたい。

韓式系土器・陶質土器は後掲の一覧表を見ていただければわかるように、その共伴遺物から時期決定のできる資料はごく限られている。これは、韓式系土器・陶質土器自体の特殊性、あるいは希少性によるものであるのに加え、出土遺構の多くが溝・自然流路といった存続期間の長いものであることから、時期の特定が非常に難しいのである。

しかし多くの場合、同一遺跡内より初期須恵器が出土することから、概ねその時期を韓式系土器の年代に当てることがなされている。これは須恵器生産体制の確立経緯からみても当然の結果といえる。さらにそのことから派生して、韓式系土器の年代を古墳時代中期に推定することも蓋然性が高いといえよう。むしろ閑川尚功氏が指摘されているように、この時期の土器組成のなかに韓式系土器をも組み入れて考えるべきかもしれない（註1）。

その一方で、後期まで下がる例が若干報告されている。近畿地方の後期に位置付けられている韓式系土器・陶器出土遺跡を府県別に見ると、兵庫1遺跡、大阪7遺跡、奈良9遺跡（原田遺跡を含む）、和歌山7遺跡、京都5遺跡、滋賀3遺跡となり奈良、和歌山、京都に顕著であることがわかる（註2）。

次に遺跡の種類に目を移すと、集落遺跡が全体の約52%で半数となる。これは中期の近畿中央地域で集落遺跡が墳墓を圧倒していたのに比べ、顕著な差といえよう。特に後期の大坂の集落遺跡の減少が著しく反映しているといえる。後期の集落遺跡から中期の特に大阪に見られたようなまとまった数の出土は見られなくなる。これは古墳時代中期後半にピークを迎えた渡来人の流入が後期に至って、著しく減少したことを意味している。また、これらの遺跡が大阪より周辺部に拡散している状況は、河内、和泉での渡来人による開発が一段落し、その周辺部を新たに開拓すべく政治的意図があったのかもしれない。

中期に比べ後期の韓式系陶質土器の大きく異なる点は、初期須恵器のとしてとらえられる土器の極端な減少であるといえる。むろん初期須恵器と呼ばれるものは、後期には存在しないのだから、当然その系譜を追うことはできないのであるが、須恵器が定型化してもなお、依然として朝鮮半島の土器を模倣した土器を生産した窯跡が見つかっているのである。例えば兵庫県の金ヶ崎窯では、角杯が出土している（註3）。このことについて、木下亘氏は須恵器の定型化以降も新来人が半島色の濃い須恵器を生産していたと推定されている（註4）。このような窯の存在は消費遺跡で定型化した須恵器とは異なる須恵器がみつかっていることからもいくらか存在したのだろう。

古墳時代後期の特徴として重要な点は、韓式系の陶質土器と軟質土器に重複することが、かなり少なくなった点だろう。原田遺跡はこの点では後期的ではない例と言えよう。

それぞれについて出土する遺跡を見てみると、陶質土器では奈良の星塚1・2号墳、また7世紀代になるが石光山43号墳、和歌山前山A46号墳、花山6号墳、兵庫笠ヶ塚古墳、滋賀入内湖遺跡等である。これらの土器は容易に故地をもとめうる極めて半島色の強いもので、このことは先程述べた純然たる船載土器の割合の増加が関連している。陶質土器は古墳の副葬に用いられたものが多いと見られるが、入江内湖遺跡のような生活遺跡でも見られ、しかもここでは幾度かの発掘調査にもかかわらず、軟質土器は確認されず、渡来人の生活を裏付けることはできない。また中期から陶質土器を古墳に副葬することの顯著な和歌山県、兵庫県に後期に至ってもこの傾向が見られることが指摘できる。ただし、兵庫県の場合はこの傾向は播磨地域により顯著で、また時期的にもほぼ1世紀の隔たりがある。

次に軟質土器出土の遺跡であるが大阪の郡遺跡、大県遺跡、大県南遺跡、一須賀古墳群、郡川古墳、奈良では原田遺跡、京都の鶴田遺跡などがある。これらの遺跡には製鉄などの工房集落といった特殊生産遺跡に関連しているとみられている。また古墳群については渡来人系氏族の墓域と推定されている（註5）。さらに、田中清美氏も指摘されているように、この時期の韓式系土器は平底の深鉢や瓶に限られている。このような特殊生産遺跡と関係する傾向は、陶質土器や瓦質土器においても壺など実用的なものを出土する遺跡、例えば奈良の前裁遺跡、滋賀の綾戸遺跡などにもあてはまる。なお綾戸遺跡は機織生産遺跡と推定されている（註6）。原田遺跡の場合、軟質土器は格子たたきの壺が3個体、把手が1点出土しており、後期的傾向とは若干異なるが、奈良県では平底の深鉢はほとんど出土しておらず、また先に上げたように前裁遺跡では瓦質土器が出土している点（註7）、大阪の状況とはかなり異なる傾向を見せており、渡来人流入時期やその出身地、あるいは土器の移入経路に若干の差があるようと思われる。

このように古墳時代後期の韓式系土器、陶質土器出土遺跡には若干の例外があるものの中期に比べ、実用と供獻用との明確な区別がその遺跡の性格によりはっきりしていることがわかる。このことについて西谷正氏が、古墳時代後期後半の陶質土器の出土例はわずかであるが、朝鮮半島に出自をもつ「古代家族」が独自に入手したものであるとの見解があるが（註8）、この見解は厳然たる

階層差のなかでより高位のものに該当し得ると思われる。西谷氏の見解を正しいと見ると、陶質土器をもった遺跡は古来の渡来人のうちかなり有力なものとするべきだろうし、軟質土器出土遺跡には少なくとも新來の渡来工人がかかわったと解釈するのが妥当だろう。

さらにここで古墳時代後期の韓式系土器・陶質土器の問題を原田遺跡との比較において掘り下げて考えてみたい。まず軟質土器については後期のなかでも前半に限られ、後半には見られなくなる。これは軟質土器が5世紀段階の渡来人の流入によってもたらされ、暫時日本化していったため、6世紀中頃にはその韓式系土器としての特徴を全く消失してしまっているためである（註9）。つまり後期前半の軟質土器出土の集落遺跡は中期段階の延長としてとらえうるものが多い。先に述べたように、原田遺跡が他の軟質土器出土遺跡と同様に特殊生産遺跡である可能性は高いとしても、原田のものが後期後半のものであるとすると、これを同一傾向とすることには問題があるだろう。ただ唯一6世紀代の遺跡で比較的まとまつた韓式系土器が出土している大県遺跡では、原田遺跡と同じような実用的な軟質土器・陶質土器がみつかっているが、大県遺跡の場合、5世紀よりの継続性がある。（註10）また、このことに関連して興味深い推定がなされている。すなわち墳墓出土の軟質土器・陶質土器のうち、後期後半のものとされる園部丸山古墳のものが伝世品ではないかということである（註11）。土器に伝世の対象となったかどうかについては今後検討せねばならないだろうが、そう考えるなら原田遺跡の蓋形土器も祭器として伝世していた可能性が考えられる。ただ軟質土器のような実用品をも同じようにとらえることにはかなり問題があるようと思え、原田遺跡のように同じ遺構からの出土ではないにしても、同時期の遺構から出土している場合、別の要因を推定すべきだろう。

以上のように古墳時代後期の韓式系土器・陶質土器遺跡の性格を概観しつつ、原田遺跡出土の韓式系土器・陶質土器の解釈を試みたが、傾向としては古墳時代中期的色彩が濃く、後期のものとするとかなり例外的な存在であることがわかる。

## 2. 蓋形陶質土器について

そこでさらに、原田遺跡出土の韓式系土器・陶質土器で最も問題のある遺物である、陶質蓋形土器について検討してみよう。蓋形土器は、とくにつまみ等の形態に特徴があり、朝鮮半島出土例との比較から、その大まかな地域が指摘されており、陶質土器研究には有効な遺物である。

原田遺跡SD-03出土の蓋形土器はつまみの中央部が突出し、そのまわりがややへこむ、また縫が断面三角形に張り出すものである。これと同様に特徴を畿内でも知られる。以下管見に触れたものについて、特に完形のものを中心にして見てみよう。

奈良では原田遺跡のほかに山田道遺跡（註12）、下明寺遺跡（註13）に見られる。1は山田道出土例で、河川跡から複数の韓式系土器と共に出土しており、共伴する遺物には須恵器が含まれておらず、須恵器出現直前の時期に比定されている。形態は、中心がごく僅かに突出する断面が逆台形

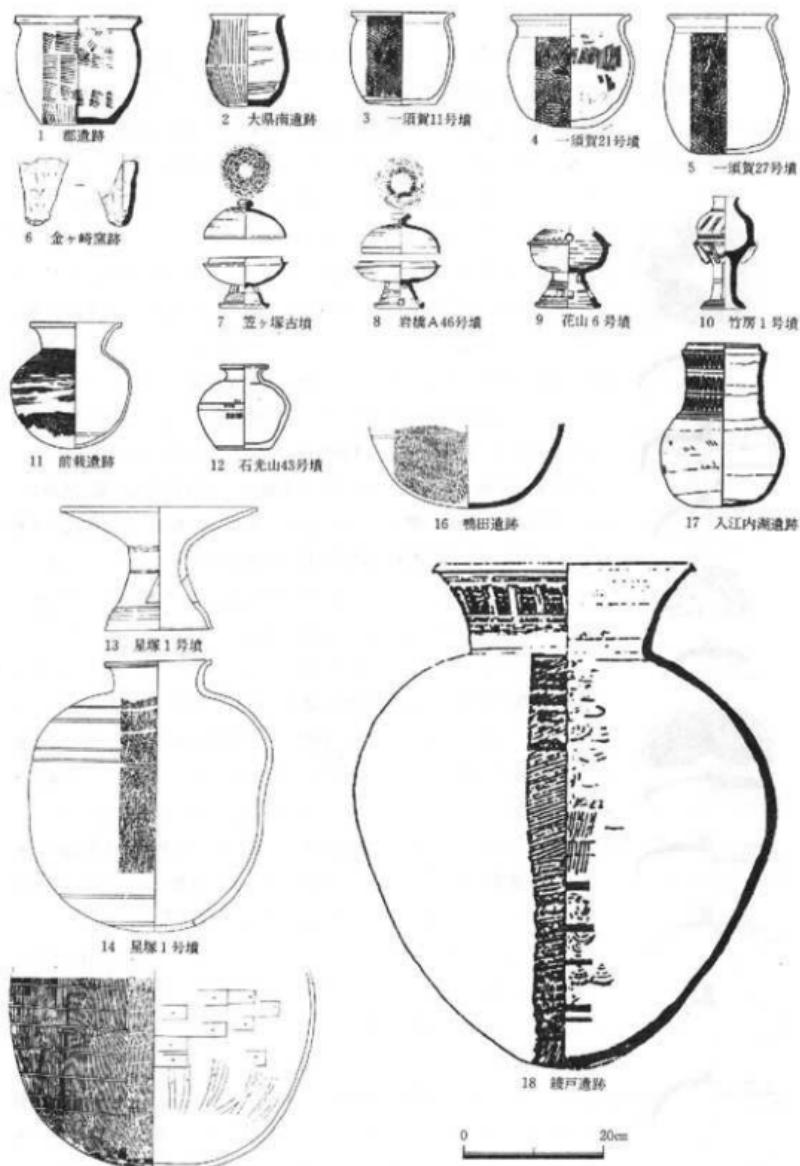


図45 古墳時代後期の神式系土器・陶質土器 ( $S = 1 / 8$ ) (各参考文献より引用)

状となるつまみをもち、天井部に波状文を施す。天井部波状文下には回転ヘラケズリを施す。稜線はやや丸みを帯びた三角形である。直径15cm、器高5cm。2は下明寺遺跡出土例で須恵器と瓦質の壺と共に出土した。形態は中央部のやや突出した偏平なつまみに、平らな天井部、肩部より少し下った部分に低い棱をもち、口縁部はやや開きぎみに立ち上がる。口径14cm、高さ5cmを測る。

大阪では、大庭寺遺跡よりかなりの数が出土しており、1987年度から1989年度調査では完形のもので4点、つまみの部分を欠くものも含むと11点が報告されている(註14)。さらにまた最近の調査では窯跡が検出され、これらの土器が朝鮮半島の土器の特色を色濃く残し、陶邑の中では最古段階に位置付けられるものと評価されている(註15)。3は旧河川から出土したもので報告者がA類に分類するものである。天井部に列点文を施し、静止ヘラケズリのちナデる。口径11.85cm、器高5.1cm。4は溝からの出土で、天井部に3段の刺突文を施す。刺突文間に沈線を巡らせる。口径10.7cm、器高4.2cm。5は包含層より出土し、天井部にカキメを施す。口径15.0cm、器高4.0cm。6から9は窯跡の調査の際、灰原より出土したものである。10は難波宮下層遺跡のもので、大手前高校校舎改築に伴う発掘調査の際に出土した。(註16)数条のカキ目状の直線文により区画された天井部にはクシガキ列点文を施す。口径14.2cm、器高5.8cm。11は玉手山遺跡のもので天井部の丸みが強く、つまみの首がやや長い。(註17)天井部は施文せずヘラケズリのみである。口径13.5cm、器高5.9cm。12は高屋城跡の調査の際、包含量より出土したものである。(註18)大きく突出した稜線が特徴で、天井部にはクシガキ列点文を施す。口径12cm、器高4.3cm。13は城山7号墳周濠(註19)、14は八尾南遺跡より出土したもので、つまみを欠くがTK85号窯出土例に似る(註20)。15は三軒屋遺跡より出土している。口縁部を欠く(註21)。16は豊中・古池遺跡のもので河川状遺構岸部より出土した(註22)。天井部を数条のカキ目状の直線文により区画し、その両側にクシガキ列点文を施す。口径12cm、器高5cm。

和歌山では完形に復元できるものではなく、つまみの部分の欠損したものが8例、つまみ部分のみのものが1例ある。また完形品では、稜線が沈線となり、恐らく壺か台付き瓶の蓋となる器高の高い天井部のドーム状のものが鳴神・音浦遺跡で出土している。17は園部丸山古墳(註23)、18・19は鳴神音浦遺跡(註24)、20は野田地区遺跡出土でつまみを欠く(註25)。21は東家遺跡よりの出土で口縁部を欠く(註26)。なお和歌山の蓋形土器について、武内雅人氏は紀ノ川上流域と下流域所在の遺跡でその形態が異なることを指摘されている(註11)。



図46 蓋形土器 I  
(S : 1 / 6)  
(各参考文献より引用)

京都には現在のところ下鳥羽遺跡で2例確認されているに過ぎない(註27)。稜線の出に差があるものの両者ともほぼ同じプロポーションで出の大きいもののつまみが欠損している。22は出の小さいもので低湿地状遺構より出土している。天井部は丸みをもち、2条の沈線間にクシガキ列点文を施す。稜線は肩部と口縁端部との間に位置し、他のものに比べかなり低い位置にある。口径14cm、器高5.8cm。23は出の大きいものである。

滋賀にはバリエーションに富む蓋形土器が見られ、和歌山とともに近畿では特異な地域である。このタイプの蓋形土器は2例確認されており、またつまみを欠くものも1例見られる。24は服部遺跡で検出された円形周溝状遺構より出土したもので(註28)、施文は見られず、回転ヘラケズリを施したままのものである。口縁部はハ字状に開き、稜線は天井部の丸みの中に含まれ、段状となる。この土器について岩崎直哉氏は共伴した遺物から中村編年1—4段階頃とされ、つまみの形態から消去法的に百済に系譜を求めようとしている(註29)。25は入江内湖遺跡で採集されたもので(註30)、天井部を4本の沈線で区画し沈線間にクシガキ列点文を施す。口縁部に最も近い沈線直下に僅かに隆起線が痕跡のように確認される。つまみは頂部が丸く突き出る。口径14.5cm、器高4.9cm。定森秀夫氏はこの土器を搬入品とされている(註31)。

以上のように、先に上げた諸特徴を有する蓋形土器を見てみたが、つまみや稜線もふくめた形態にかなりの個体差があり、原田のものに酷似したものを見られない。また、数例を除きその他はすべて天井部に施文する点、原田例とは大きな隔たりを感じる。下明寺遺跡例、服部遺跡例、入江内湖遺跡例は若干年代の下がるものと見られているが、他は初期須恵器に先行、あるいは共伴し、また、帰属年代の不明なものもあるが、そうしてみると無文のものは年代の下がるものと考えるのが妥当だろう。しかしここに上げた資料のうち、6世紀前半より下がる遺構より出土したものは園部丸山古墳例以外ではなく、しかもこの土器は伝世されていると推定されるものであること、プロポーションがかなり異なることから系譜としてつながるものではない。また、プロポーションの点から見ると同じ奈良県より出土した下明寺遺跡が比較的似てはいるが、口縁部の開きが異なり、またその年代もはっきりしない。したがって現段階では、原田遺跡のものとの間を埋めるべき資料は見当たらない。

### 3.まとめ

原田遺跡の場合、少なくとも渡米人が、この地で生活していたであろうと考えることは問題ないだろう。ただ6世紀後半という時期でありながら、統一新(各参考文献より引用一部改変)



図47 蓋形土器2  
(S: 1/6)

羅系の陶質土器や百濟系の土器ではなく、むしろ5世紀代の韓式系土器、陶質土器とみられる傾向の土器が出土していることに最大の不整合性が存在する。特に原田の蓋形土器を遺構の年代に帰属させる類例が見いだせないことは、須恵器として、これらの蓋形土器からその系譜を追うことができないということである。従って、その系譜を6世紀代の朝鮮半島の資料に求める必要があるが、筆者の管見の及ぶ範囲でそれに相当するものではなく、この点については今後の課題とせねばならない。

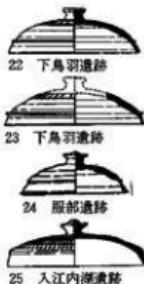


図48 蓋形土器3  
(S: 1/6)

(各参考文献より引用) 世紀、7世紀に至るまで国家的レベルが掌握されていたと見なすことができるのでないだろうか。

以上、まとまりもなく明確な結論も見いだせないままに考察を終えることとなったが、最後にこの考察を書くに当たってご教示戴いた植野浩三氏、木下亘氏、関川尚功氏、竹谷俊夫氏に謝意を表します。

#### <註>

- 註1 関川尚功「奈良県下出土の初期須恵器」『考古学論叢』10 泉屋県立埋蔵考古学研究所 1984年
- 註2 ここでは中期を中心とし、後期まで継続した遺跡は除いた。
- 註3 明石市教育委員会『赤堀川・金ヶ崎窯跡』1990年
- 註4 木下亘「高質土器とその分布」『古墳時代の研究』6 雄山閣 1991年
- 註5 尾谷雅彦「一須賀古墳群出土の韓式系土器」『韓式系土器研究』II 韩式系土器研究所 1989年
- 註6 文献142
- 註7 文献27
- 註8 西谷正「九州出土の朝鮮産陶質土器について」『九州文化史研究所紀要』29 1984年
- 註9 坪之内徹「韓式系土器と7世紀の土器」『韓式系土器研究』II 韩式系土器研究所 1989年
- 註10 北野重「大麻遺跡」「大麻南遺跡」『韓式系土器研究』I 韩式系土器研究所 1987年
- 註11 武内雅人「和歌山県の初期須恵器・陶質土器・韓式系土器」『韓式系土器研究』II 韩式系土器研究所 1989年
- 註12 文献113
- 註13 文献101
- 註14 文献38
- 註15 奥和乃「大阪寺遺跡の初期須恵器窯」『大阪府埋蔵文化財研究会(第25回)資料』1992年
- 註16 文獻54
- 註17 伯原市教育委員会『伯原市埋蔵文化財調査概報』1982年度 1983年
- 註18 文獻119
- 註19 文獻31
- 註20 文獻134-135
- 註21 文獻54
- 註22 文獻90
- 註23 文獻75
- 註24 文獻149
- 註25 文獻150
- 註26 文獻117
- 註27 文獻56
- 註28 文獻87
- 註29 文獻8・9
- 註30 文獻84
- 註31 定森秀夫「日本出土の“高蓋タイプ”系陶質土器(1)」『朱雀』2 1989年

## (奈良県)

遺跡名	所在地	遺構(集落)(古墳)◎		遺物(陶質・瓦質)		遺物(軟質)		古墳時代	文献
		溝土井住柱流高主墳周合	塚戸居穴路込体丘溝高	高蓋瓶	甕	鋸盤	把手		
平城京左京六条三坊	奈良市			○	○				114
原田遺跡	大和郡山市	○	○	○	○	○	○	○	139
布留遺跡	天理市	○	○	○	○	○	○	●	82
和泉・舟木遺跡	天理市					●	●	●	99
岸塚1・2号墳	天理市			○	○	○	○	○	86
小路遺跡	天理市	○		○	○	○	○	●	88
前畠遺跡	天理市	○		●		○	○	○	87
忍坂遺跡	桜井市	不明		不明(陶質・瓦質各1点)				○	104
芝遠跡	桜井市		○	○				○	65
阪本遺跡	桜井市					○	○	●	96
上之宮遺跡	桜井市	○		●				○	71
下明日寺遺跡	橿原市			○	○	○	○	●	101
曾我遺跡	橿原市			●				●	103
大福遺跡	橿原市					○	○	○	97
坪井遺跡	橿原市	○						△	102
新武千塚281号墳	橿原市			○	○	○	○	○	99
南原4号墳	橿原市			○	○	(真形土器)		○	115
藤原京3次	橿原市	不明				○	○	○	106
藤原京33次	橿原市		○	○		○	○	○	109
藤原京37次	橿原市	○		○		○	○	○	110
藤原京37-2次	橿原市					○	○	○	110
藤原京39次	橿原市					○	○	○	111
藤原京44次	橿原市	○		○	○			○	111
藤原京46次	橿原市	○	○	○	○	○	○	○	112
和田堀寺1次	橿原市	○	○	●		○	○	○	125
小畠田遺跡2次	明日香村	○	○			○	○	●	108
夷山山米寺	明日香村			○	○			○	107
石神遺跡2次	明日香村			○	○			○	110
飛鳥守下塚	明日香村	○				○	○	○	111
飛鳥板谷真跡	明日香村					○	○	○	105
山田山2・3次	明日香村	○	○	○	○	○	○	○	113
飛鳥京100次	明日香村	○		○	○	○	○	○	103
石光山43号墳	御所市		○	○	○			○	95
施原遺跡	御所市			○	○	○	○	○	129
巨勢山147号墳	御所市	○		○		○	○	○	○
綾田遺跡	新庄町			○			○	○	102
十六山・聖王寺遺跡	田原本町	○			○			●	125
多遺跡	田原本町	○				○	○	△	104
矢部遺跡	田原本町		○			○	○	○	106
谷遺跡	橿原市	○				○	○	○	104

## (京都府)

遺跡名	所在地	遺構(集落)(古墳)◎		遺物(陶質・瓦質)		遺物(軟質)		古墳時代	文献
		溝土井住柱流高主墳周合	塚戸居穴路込体丘溝高	高蓋瓶	甕	鋸盤	把手		
中堤遺跡	福知山市	残塚				○		○	125
曾我谷遺跡	福知山市			○				○	74
牧野古墳	京都市		採集	○				○	57
和泉式町遺跡	京都市	○				○	○	●	54
唐橋遺跡	京都市	○				○	○	○	54
下鳥羽遺跡	京都市			○	○	○	○	●	56
中西遺跡	向日市	○	○	○	○	○	○	△	128
暢田遺跡	向日市	○	○			○	○	○	129
長岡京左京二条大路	向日市			○	○	○	○	○	130
井ノ内遺跡	長岡京市	○				○	○	○	126
今里王子塚古墳	長岡京市		○			○	○	○	58
陶器町遺跡	長岡京市	○				○	○	○	92
鶴城町内遺跡	長岡京市			○		○	○	○	91
鶴田遺跡	長岡京市	○				○	○	○	125
馬場遺跡	長岡京市					○	○	○	93
弓築・松田遺跡	大山崎町	○	○			○	○	○	125
堀内遺跡	加茂町			○	○	○	○	○	50

※ 1) 出土器種(陶質・瓦質)の○は陶質土器、●は瓦質土器を示す。なお、陶質土器には初期須恵器が含まれているものもある。

2) 時代の欄の○は須恵器出現以前、●は初期須恵器が共存する時期、○は共存しない時期を示す。

3) ○は複数施設、複数個体を示す。

表3 韩式系土器出土遺跡地名表1 (奈良県、京都府)

（大衍数）

卷1) 出土器種(陶質・瓦質)の欄の○は陶質土器、●は瓦質土器を示す。なお、陶質土器には初期須恵器が含まれているものもある。

○は共伴しない時期を示す

3) ○は複数箇所、複数個体を示す。

表4 韩式系土器出土遺跡地名表2（大阪府1）

## (大阪府)

遺跡名	所在地	遺跡(集落)(古墳)包	器種名(陶質・瓦質)			(軟質)	時代	古墳 文献
			溝土井住往流渠主導周合 撲戸居穴路込体頂面層	环 高茎瓶 壺 瓦 盆 平格 鉢 瓶 壺 手子行	瓦質 壺 瓦 盆 手子行			
大県南遺跡	柏原市	○		○	○	○	○	46
國府遺跡	藤井寺市	採集		○	○	○	○	141
船橋遺跡	藤井寺市	採集	○	○	○	○	○	124
土城の里遺跡	藤井寺市	○	○	○	○	○	●	22
はるみ山遺跡	藤井寺市	○	○	○	○	○	○	16
津守跡	藤井寺市	○	○	○	○	○	○	19
野中古墳	藤井寺市	○	○	○	○	●	●	55
野中東山古墳	藤井寺市	○	○	○	○	○	●	86
上田ノ遺跡	松原市	○	○	○	○	○	○	21
高尾山跡	羽曳野市	○	○	○	○	○	○	118
高尾城跡	羽曳野市	○	○	○	○	○	○	119
野々上遺跡	羽曳野市	○	○	○	○	○	○	120
一須賀11号墳	河南町	○	○	○	○	○	○	54
一須賀21号墳	河南町	○	○	○	○	○	○	54
一須賀27号墳	河南町	○	○	○	○	○	○	54
神山遺跡	河南町	○	○	○	○	○	○	27
三日月遺跡	河内長野市	○	○	○	○	○	○	127
堺御器屋尾遺跡	堺市	○	○	○	○	○	○	125
四ノ池遺跡	堺市	○	○	○	○	○	●	65
大和中町遺跡	堺市	○	○	○	○	○	○	128
土師道跡	堺市	○	○	○	○	○	●	125
小坂遺跡	堺市	○	○	○	○	○	●	35
万崎遺跡	堺市	○	○	○	○	○	○	36
新尾山遺跡	堺市	○	○	○	○	○	○	125
伏尾山跡	堺市	○	●	○	○	○	●	37
大寺山遺跡	堺市	○	○	●	○	○	○	38
水源塙遺跡	高石市	○	○	○	○	○	●	80
大瀬遺跡	高石市	○	○	○	○	○	●	15
豊中・古池遺跡	泉大津市	○	○	○	○	○	●	90
七ノ坪遺跡	泉大津市	○	○	○	○	○	○	19
信太山遺跡5号墳	和泉市	灰原					●	39
府中遺跡	和泉市	○	○	○	○	○	○	23
石才遺跡	貝塚市	○	○	○	○	○	○	36
三軒屋遺跡	泉佐野市	○	○	○	○	○	○	54
西小山遺跡	岬町	○	○	○	○	○	●	17
浜詰遺跡	岬町	○	○	○	○	○	○	18

## (兵庫県)

遺跡名	所在地	遺跡(集落)(古墳)包	器種名(陶質・瓦質)			(軟質)	古墳 時代	文献
			溝土井住往流渠主導周合 撲戸居穴路込体丘層	环 高茎瓶 壺 瓦 盆 平格 鉢 瓶 壺 手子行	瓦質 壺 瓦 盆 手子行			
常山遺跡	赤穂市	○						1
越前山古墳	赤穂市	○	○	○	○		●	1
赤穂古墳	相生市	○		○			●	83
川島遺跡	太子町	○				○○	○	11
国分台地遺跡	船崎市	不明		○	○	○	○	125
宮山古墳	船崎市	○○	○	○○○○			●	122
岸遺跡	加古川市	浜集				○	○	7
東神吉遺跡	加古川市	不明		○	○	○	○	125
砂原遺跡	加古川市	○○	○	○○○○			●	43
カシス塚古墳	加古川市	○		○			●	44
印南野2号墳	加古川市	○		○	○		●	42
玉津田中遺跡	猪戸市	○		○	○		○	125
吉田南遺跡	猪戸市	○		○	○		○	63
出合遺跡	猪戸市	○	○	○	○	○○○○	●	48
神龍遺跡	猪戸市	○○○○	○	○○○○	○○○○	○○○○	●	59
森北町遺跡	猪戸市	○○○○	○○○○	○○○○	○○○○	○○○○	○○○○	49-60
豊家遺跡	猪戸市	○					○○○○	61
志仏山古墳	猪戸市	不明	○	○	○	○	○	73
豆ヶ塚古墳	芦屋市	採集	○○○○				○	2

※1)出土器種(陶質・瓦質)の○は陶質土器、●は瓦質土器を示す。なお、陶質土器には初期須恵器が含まれているものもある。

2)時代の○は土器出現以前、●は初期須恵器が共存する時期、○は共存しない時期を示す。

3)○は複数発掘所、複数個体を示す。

表5 韩式系土器出土遺跡地名表3 (大阪府2、兵庫県)

(印制日期)

(總數目)

表11) 出土器類(陶質・瓦質)の図の○は陶質土器、●は瓦質土器を示す。なお、陶質土器には初期須庭器が含まれているものもある。

2) 時代の欄の○は須恵器出現以前、●は初期須恵器が共伴する時期、○は共伴しない時期を示す

3) ○は複数箇所、複数個体を示す。

表6 韩式系土器出土遺跡地名表4（和歌山県、滋賀県）

「韓式系土器出土遺跡 参考文献」

1. 赤穂市史編纂委員会『赤穂市史』第4巻 1984年
2. 芦屋市史編纂委員会『新修芦屋市史』資料編1 1975年
3. 安土町教育委員会『常楽寺山古墳群調査報告』1977年
4. 安曇町教育委員会『南市東遺跡発掘調査概要』1979年
5. 阿部嗣治「東大阪市出土の漢式系土器について」『東大阪市遺跡保護調査会年報1979年度』1980年
6. 次木市教育委員会『次木市東遺跡発掘調査概要』1978年
7. 今里幾次「播磨弥生式土器の動態」『考古学研究』15-4 1969年
8. 岩崎直也「地方窯の上限と系譜を求めて(Ⅰ)」『滋賀考古学論叢』第2集 1965年
9. 岩崎直也「地方窯の上限と系譜を求めて(Ⅱ)」『滋賀考古学論叢』第3集 1966年
10. 岩崎直也「近江出土の韓式系土器の概況」『第5回近畿埋蔵文化財研究会資料』1987年
11. 橋野浩三「韓式系土器についての予察」『奈良大学紀要』12 1983年
12. 大阪府教育委員会『鶴上郡跡発掘調査概要・II』1972年『同・III』1973年
13. 大阪府教育委員会『七ノ坪遺跡発掘調査概要』1974年
14. 大阪府教育委員会『茨田安田遺跡発掘調査概要』1975年
15. 大阪府教育委員会『大間遺跡発掘調査概要III』1976年『同VI』1981年
16. 大阪府教育委員会『挟山遺跡発掘調査概要V』1979年
17. 大阪府教育委員会『淡輪遺跡発掘調査概要III』1981年
18. 大阪府教育委員会『淡輪遺跡発掘調査概要VI』1984年
19. 大阪府教育委員会『大阪府文化財調査概要・1983年度』1984年
20. 大阪府教育委員会『萱振遺跡発掘調査概要II』1984年
21. 大阪府教育委員会『上田町遺跡発掘調査概要』1984年
22. 大阪府教育委員会『土師の里遺跡発掘調査概要・XII』1985年
23. 大阪府教育委員会『府中遺跡発掘調査概要』1985年
24. 大阪府教育委員会『神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査概要・I』1985年
25. 大阪府教育委員会『神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査概要・II』1986年
26. 大阪府教育委員会『福葉遺跡発掘調査概要I』1986年
27. 大阪府教育委員会『神山遺跡発掘調査概要I』1988年『同・II』1989年
28. 効大阪文化財センター『長原』1978年
29. 効大阪文化財センター『友井庄(その1)』1984年
30. 効大阪文化財センター『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書1』1984年
31. 効大阪文化財センター『城山(その1・その2)』1986年
32. 効大阪文化財センター『久宝寺北(その1~3)』1987年
33. 効大阪文化財センター『久宝寺南(その1)』1987年
34. 効大阪文化財センター『龜井北(その1)』1986年
35. 効大阪文化財センター『小阪遺跡(その5)』1988年
36. 効大阪府埋蔵文化財協会『石材南遺跡』1988年
37. 効大阪府埋蔵文化財協会『陶邑・伏木遺跡A地区』1990年
38. 効大阪府埋蔵文化財協会『陶邑・大庭寺遺跡』1989年『同・II』1990年
39. 鮎大阪府埋蔵文化財協会『泉州の遺跡』1986年
40. 鮎大阪市文化財協会『瓜破北遺跡II』1980年
41. 海南市教育委員会『西村遺跡範囲確認調査概要』1980年
42. 加古川市教育委員会『印南野I』1965年
43. 年 加古川市教育委員会『加古川市砂部遺跡』1978年
44. 加古川市教育委員会『加古川市カンヌ原古墳発掘調査概要』1985年
45. 柏原市教育委員会『大東・大県南遺跡』1985年
46. 柏原市教育委員会『大県遺跡』1985年
47. 堅田直一『日下遺跡発掘調査概要』1967年
48. 鐘木義昌・亀田修一『播磨出合遺跡出土の陶質土器』『朝鮮三国系陶質土器初期須恵器』『古文化談叢』第18集 九州古文化研究会 1987年
49. 鐘木義昌・亀田修一『神戸市森北町遺跡出土陶質土器・陶質土器』『古文化談叢』第20集(下)九州古文化研究会 1988年
50. 加茂町教育委員会『加茂町文化財報告』第3集 1986年
51. 河内一浩「和歌山県における古墳時代中期の埴輪生産の様相」『花園史学』第8号 1987年
52. 関西大学考古学研究室『和歌山における古墳文化』1972年
53. 韓式系土器研究会『韓式系土器研究I』1987年
54. 韓式系土器研究会『韓式系土器研究II』1989年
55. 北野耕平『河内野中古墳の研究』大阪大学国史研究室研究報告第2冊 1978年
56. 鮎大阪府埋蔵文化財研究所『下鳥羽遺跡発掘調査概報』1988年
57. 京都府『京都府史讀勝地調査會報告』第2冊 1920年
58. 京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概要(1980-1)』1980年
59. 神戸市教育委員会『昭和59年度 神戸市埋蔵文化財年報』1987年
60. 神戸市教育委員会『昭和60年度 神戸市埋蔵文化財年報』1988年
61. 神戸市教育委員会『昭和61年度 神戸市埋蔵文化財年報』1989年
62. 鶴崎市教育委員会『昭和57年度安富I遺跡発掘調査概報』1983年
63. 神戸市立考古館『地下にねむる神戸の歴史展』1980年
64. 鶴崎市『御坊市史』第3巻 1981年
65. 堺市教育委員会『四ツ池遺跡』堺市文化財調査報告 第16集 1984年
66. 泽置県教育委員会『真宮千石地等農地整備事業関係発掘調査報告書II』1985年
67. 泽置県教育委員会『服部遺跡発掘調査報告VI』1985年
68. 近藤滋『岡山城跡・岡山古墳群』『びわこ埋蔵文化財』効避難総合研究所 1984年
69. 桜井市教育委員会『芝遺跡』1986年
70. 四條畷市教育委員会『正法寺跡発掘調査概要・II』1978年
71. 清水真一『桜井市上之官遺跡出土の瓦質土器について』『古文化談叢』第20集(中)九州古文化研究会 1989年
72. 白井忠雄『高島郡高島町鴨遺跡出土の陶質土器について』『滋賀文化財だより』47 1981年
73. 新修神戸市史編纂委員会『新修神戸市史』歴史編 I 1989年
74. 鶴崎町教育委員会『園部町埋蔵文化財調査報告書』第2集 1977年
75. 国部丸山古墳保存会『國部丸山古墳調査概報』1989年
76. 大東市北新町遺跡調査会『大東市北新町遺跡第1次発掘調査概要報告書』1986年
77. 大東市教育委員会『寺川・北条遺跡発掘調査報告書』1987年

78. 大東市教育委員会『宮谷古墳群調査報告書』1988年
79. 大東市教育委員会『寺川・鍋田山遺跡発掘調査報告書』1991年
80. 高石市水道部『水源地遺跡発掘調査報告書』1985年
81. 高槻市教育委員会『鷺上郡衝跡他関連遺跡発掘調査概要』7巻 1983年
82. 谷口俊夫『布留遺跡出土の初期須恵器と韓式系土器』考古学研究中間報告8 球磨文化財天理教財団 1983年
83. 鹿児島市史編纂委員会『龍野市史』第4巻 1984年
84. 田中勝弘『入江内湖遺跡とその遺物』『滋賀考古学論叢』第3集 1986年
85. 田中清美『東区高麗橋1丁目出土の韓式系土器』『草木』17号 勝東大阪市文化財協会 1988年
86. 田中清美『5世紀における津原・河内の開発と渡来人』『ヒストリア』125 1989年
87. 天理市教育委員会『前駿跡』1977年
88. 天理市教育委員会『星家・小路遺跡の調査』1990年
89. 熊本市史編纂委員会『豊中市史』史料編 1960年登場 中・古池遺跡調査会『豊中・古池遺跡発掘調査概要その三』1976年
90. 長岡京市教育委員会『長岡京市文化財調査報告書』第9集 1982年
91. 勝東岡京市埋蔵文化財センター『長岡京市埋蔵文化財センター年報 昭和58年度』1984年
92. 勝東岡京市埋蔵文化財センター『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第2集 1985年
93. 中村浩『近畿の初期須恵器』『古代窯業史の研究』1985年
94. 奈良県立橿原考古学研究所『墓域・石光山古墳群』史跡名勝天然記念物調査報告31 1976年
95. 奈良県立橿原考古学研究所『佐井外鐵山麓古墳群』史跡名勝天然記念物調査報告34 1978年
96. 奈良県立橿原考古学研究所『大福遺跡』史跡名勝天然記念物調査報告36 1978年
97. 奈良県立橿原考古学研究所『新沢千塚古墳群』史跡名勝天然記念物調査報告39 1980年
98. 奈良県立橿原考古学研究所『和邇・森本遺跡』史跡名勝天然記念物調査報告45 1984年
99. 奈良県立橿原考古学研究所『矢部遺跡』史跡名勝天然記念物調査報告49 1986年
100. 奈良県立橿原考古学研究所『奈良県遺跡調査報告書』第9号 1966年
101. 奈良県立橿原考古学研究所『奈良県遺跡調査概報』1981年度 第1・2分冊 1983年
102. 奈良県立橿原考古学研究所『奈良県遺跡調査概報』1983年度 第1・2分冊 1984年
103. 奈良県立橿原考古学研究所『奈良県遺跡調査概報』1986年度 第1・2分冊 1989年
104. 奈良県立橿原考古学研究所『奈良県遺跡調査概報』1986年度 第1・2分冊 1989年
105. 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告書』1961年
106. 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』Ⅲ 1980年
107. 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』4 1974年
108. 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』5 1975年
109. 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』12 1982年
110. 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』14 1984年
111. 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』15 1985年
112. 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』16 1986年
113. 奈良市立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』21 1991年
114. 奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和59年度』1985年
115. 日本考古学会『日本考古学会年報36』1996年
116. 橋本市教育委員会『陵山古墳発掘調査概要』1974年
117. 橋本市教育委員会『東家遺跡発掘調査概報』1984年
118. 羽曳野市教育委員会『古市遺跡群Ⅲ』1981年 羽曳野市教育委員会『古市遺跡群Ⅵ』1985年
119. 羽曳野市教育委員会『古市遺跡群Ⅴ』1988年
120. 勝東大阪市文化財協会『御東大阪市文化財協会年報』1983年度 1984年
121. 姫路市教育委員会『宮本古墳発掘調査概報』1970年『同第2次発掘調査概報』1973年
122. 柏方市史編纂委員会『柏方市史』第12巻 1986年
123. 平安学園考古学クラブ『船橋II』1962年
124. 埼玉県考古学研究会『弥生・古墳時代の大陵系土器の諸問題』第2分冊 1987年
125. 丸山竜平『近江八幡市郷土資料館の陳列品に見る特異な須恵器について』『滋賀県考古学論叢』第2集 1985年
126. 三日市道路調査会『三日市遺跡発掘調査報告書』I 1988年
127. 向日市教育委員会『向日市埋蔵文化財調査報告書』第13集 1984年
128. 向日市教育委員会『向日市埋蔵文化財調査報告書』第17集 1985年
129. 向日市教育委員会『向日市埋蔵文化財調査報告書』第18集 1986年
130. 守山市教育委員会『守山市埋蔵文化財調査報告書』第18集 1985年
131. 守山市教育委員会『播磨田東遺跡発掘調査報告書』守山市文化財調査報告書第13冊 1983年
132. 守山市教育委員会『昭和59年度国庫補助事業閑谷遺跡発掘調査報告書』1986年
133. 守山市教育委員会『守山市文化財調査報告書』第21冊 1986年
134. 八尾市南遺跡調査会『八尾南遺跡』1983年
135. 勝八尾市文化財調査研究会『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要報告昭和59年度』1985年
136. 勝八尾市文化財調査研究会『昭和59年度事業報告』1985年
137. 西洲町教育委員会『市三宅東遺跡発掘調査報告書』2・3号『同-5』1990年
138. 朝木原木「布留式土器に関する一試考え」『ヒストリア』101号 大阪歴史学会 1983年
139. 大和郡市教育委員会『原田遺跡発掘調査報告書』1992年
140. 吉田宣夫『那賀郡打出町所在竹房古墳群の調査』『和歌山県埋蔵文化財情報』15 1981年
141. 米田文孝『所謂韓系式土器の一例』『阡陵』西大考古学等資料室 1989年
142. 章王町史編纂委員会『章王町史』上巻 1987年和歌山県史編纂委員会『和歌山県史』考古資料 1983年
143. 和歌山県教育委員会『和歌山県文化財学術調査報告』第2冊 1967年
144. 和歌山県教育委員会『和歌山県文化財学術調査報告』第41年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報』1967年
145. 和歌山県教育委員会『昭和41年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報』1967年
146. 和歌山県教育委員会『近畿自動車道と和歌山線埋蔵文化財地区報告』1972年
147. 和歌山県教育委員会『山崎山古墳群緊急発掘調査報告書』1978年
148. 和歌山県教育委員会『鳴滝遺跡発掘調査概要』1983年
149. 和歌山県教育委員会『鳴神地区遺跡発掘調査報告書』1984年
150. 和歌山県教育委員会『野田・麻並地区発掘調査報告書』1985年
151. 和歌山県教育委員会『岩橋千塚』1967年
152. 和歌山県文化財研究所『埋蔵文化財情報』14 1979年

## V 自然科学的検討

### 1. 土器に含まれる砂礫

権原考古学研究所

奥田 尚

原田遺跡から出土した縄文式土器、土師器に含まれる砂礫を肉眼で観察した。観察は土器全体を裸眼で観察し、観察良好な部分を倍率30倍の実体鏡で観察した。観察事項は砂礫の種類とその量、粒形、粒径、色の4項目である。粒形は角、亜角、亜円、円に、粒径はmm単位で目測した。量については非常に多い、多い、中、僅か、ごく僅か、ごくごく僅かに区分した。また、石英、角閃石、輝石については形状から自形と他形の区分もした。花崗岩、流紋岩としたものは岩石の全様がわかれれば他の石種になる可能性もある。

識別できた砂礫種は、岩石片として花崗岩、流紋岩、砂岩、泥岩、チャート、片岩、火山ガラス、鉱物片として石英、長石、黒雲母、角閃石、輝石である。各種類の特徴について述べる。

花崗岩：色は灰白色、粒形が角、粒径が最大5mmである。石英と長石、石英と黒雲母、石英と長石と黒雲母がかみ合った岩片である。

流紋岩：色は灰白色、灰色、褐色で、粒形が角、亜角、粒径が最大6mmである。石英と長石の斑晶が認められるものがあり、石基はガラス質である。

砂岩：色は灰色、粒形が亜円、粒径が最大1mmである。細粒砂からなる。

泥岩：色は灰色、黒色、粒形が亜円、粒径が最大1.5mmである。

チャート：色は灰色、暗灰色、黒色、褐色、茶褐色で、粒形が亜角、亜円、粒径が最大2mmである。

片岩：色は白色、灰白色、灰色で、粒形が亜角、粒径が最大6mmである。絹雲母片岩、石英片岩である。

火山ガラス：黒色透明、無色透明で、粒径が最大1mmである。フジツボ状、貝殻状である。

石英：無色透明、灰白色透明で、粒形が角、粒径が最大4mmである。複六角錐をなすものやその一部が認められるものがある。

長石：白色、灰白色、灰白色透明で、粒形が角、粒径が最大4mmである。

黒雲母：黒色、金色で、粒径が最大1.5mm、粒状、板状である。

角閃石：黒色で、粒形が角、粒径が最大3mmである。粒状、柱状で、結晶面が認められる場合、結晶面に囲まれている場合がある。

輝石：黒色透明、粒形が角、粒径が最大0.3mmである。柱状をなし、結晶面で囲まれている。

砂礫種の構成から後背地の原岩を推定するような方法で類型区分をした。原岩推定方法としては、

複六角錐あるいはその一部が認められる石英が含まれる岩石は斑岩や流紋岩質があげられることから、流紋岩質岩起源の岩石とし、他形の石英で角ばっているものは花崗岩のように深成岩や片麻岩起源のものとした。自形の角閃石や輝石は安山岩に含まれることが多いことから安山岩質岩起源とした。

砂礫種構成から I ~ VI の 6 類型に区分した。亜類型として、角閃石が含まれるものと a、チャートが含まれるものと b、角閃石とチャートが含まれるものと c、チャートと片岩が含まれるものと d、チャートと碎屑岩と片岩が含まれるものと e とした。

I 類型：花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とする。

II 類型：花崗岩質岩起源、閃緑岩質岩起源と推定される砂礫を主とする。

III 類型：花崗岩質岩起源、閃緑岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、流紋岩質岩起源と推定される砂礫が含まれる。

IV 類型：花崗岩質岩起源、流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とする。

V 類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とする。

VI 類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、安山岩質岩起源と推定される砂礫が含まれる。

器種と類型の関係は表 7 に示すようである。

原田遺跡が位置する付近は、東に富雄川、南に大和川が流れ、北西の矢田丘陵を源とする小河川がある。地質的には矢田丘陵には基盤をなす片麻状花崗岩が分布し、山麓部には下部大阪層群が分布し、海拔60m以下では後期更新統（洪積層）が表層を覆っている。矢田丘陵から流出する河川の砂礫は花崗岩質岩起源の砂礫を主とし、チャートや角閃石が僅かである。

当遺跡を中心として近距離で遺跡付近の砂礫と同じような砂礫を示すのは I 類型に属する砂礫である。II 類型・III 類型の砂礫は花崗岩・閃緑岩質岩起源と推定される砂礫を主とすることから花崗岩質岩、閃緑岩質岩が広く分布するような地の砂礫であると推定される。閃緑岩質岩は奈良盆地の北部を除く周辺部には岩体として多く分布することから場所は限定しがたい。IV 類型と V 類型の砂礫は流紋岩質岩起源と推定される砂礫を含むことから流紋岩質岩が分布する地の砂礫であると推定される。流紋岩質岩起源と推定される砂礫に量的な変化があり、この量比の差は原岩の分布状況によるものか、場所の差によるもののかのいずれかであろう。例えば、宇陀郡棟原町上井足付近の芳野川の砂礫は僅かに流紋岩質岩や自形の石英が含まれるが、伊那佐山近くの流紋岩質岩が分布する山麓に近くなれば、流紋岩質岩や自形の石英の量が増加する。このような条件は宇陀郡一帯に多く認められる。また、奈良市春日奥山や西ノ京丘陵にも同じような条件の地がある。VI 類型の砂礫には流紋岩質岩起源の砂礫と自形の角閃石・輝石を含むような安山岩質岩起源と推定される砂礫が僅かに含まれる。このような砂礫構成の砂礫は、山陰から北陸にかけての地に見られる。特に、碎屑岩や片岩が含まれるものは因幡付近、千代川流域の砂礫に酷似する。II・III 類型の砂礫は新第三紀層

や第四紀層が分布しない奈良盆地周辺のいづこかでも採取できる砂疊であるが、V・VI類型の砂疊は奈良盆地及びその周辺では採取でき得ない砂疊である。

砂疊の採取地が土器の製作地であるとすれば、I類型に属する土器が在地で作られた土器であると推定され、他の類型に属する土器は距離の遠近はあるであろうが、搬入されたものであると推定される。

		縄文式	土 師 器						合 計
			鉢	甕	壺	高坏	器台	鉢	
I	a	1			1	2			4
	b				1				1
	c	2							2
II	a	2	1						3
III	a	2							2
IV	a	1	1						2
	c	1	2				2	1	6
	d					1			1
V	a	1					1		2
VI	c	1			1		1		3
	e			1					1
区分不能					2			1	3
合 計		11	4	3	5	1	4	2	30

表7 器種と類型

試料番号	種類	岩			石			鉱物			土質	
		花崗岩	片麻岩	砂岩	板岩	灰岩	粘土 + 片岩	火山ガラス	英長石	石英	角閃石	
複合土器No.1	鉢	[L-端内]	[L-端外]									Ⅳ a
複合土器No.2	鉢			[L-端内]	[L-端外]							Ⅴ a
複合土器No.3	鉢	[L-端外]	[L-端内]									Ⅳ a
複合土器No.4	鉢	[L-端内]	[L-端外]									Ⅳ c
複合土器No.5	鉢			[L-端内]	[L-端外]							Ⅵ c
複合土器No.6	鉢	[L-端内]	[L-端外]									Ⅳ a
複文土器No.7	鉢	[L-端内]	[L-端外]									Ⅳ a
複文土器No.8	鉢	[L-端外]	[L-端内]									Ⅳ c
複文土器No.9	鉢	[L-端内]	[L-端外]									Ⅳ a
複文土器No.10	鉢	[L-端内]	[L-端外]									Ⅳ a
複文土器No.11	鉢	[L-端外]	[L-端内]									Ⅳ c
SD-01 11	壺	[L-端内]	[L-端外]									Ⅳ a
SD-01 12	壺	[L-端外]	[L-端内]									Ⅳ b
SD-01 15	壺	[L-端外]	[L-端内]									Ⅳ c
SD-01 17	高杯	[L-端内]	[L-端外]									Ⅳ a
SD-01 18	高杯	[L-端外]	[L-端内]									Ⅳ a

0.90倍 = 実体重の倍率が90% 減体積による影響：L=粒径 1mm以上 M=粒径 1~0.5mm以上 S=粒径 0.5~0.2mm以上 W=表面面積が含まれる 物=板状 良=球状 東=束状 フ=ラジオ状 E=直角あるいは斜角状である。W=直角面がある以下の筋道がある。

表8 やく類の種類

## 2. 石器の石種について

榎原考古学研究所

奥田 尚

原田遺跡から出土した石器の石種を肉眼で観察した。石種は輝石安山岩、輝緑岩、泥岩、片麻状ザクロ石黒雲母花崗岩、緑色片岩である。石種の特徴について述べる。

輝石安山岩：色は黒色～暗灰色で、理流が認められるものもある。稀に粒径1～0.5mmの石英の捕獲晶がある。斑晶鉱物は長石、輝石である。長石は無色透明～灰白色透明、短柱状～粒状、粒径が0.1～1mm、量が中～多いである。輝色は黒色透明、短柱状で、粒径が0.1～0.2mm、量がごく僅か～ごく僅かである。石基は黑色透明、ガラス質である。

長石斑晶の粒径により0.1mm大をA、0.1～0.3mmをB、0.2～1mmをCに細区分した。

輝石安山岩A：石鎚（図S4、図S5、図S6、図S8、図S10）

輝石安山岩B：石鎚（図S1、図S2、図S3、図S7）

輝石安山岩C：石鎚（図S9）

輝緑岩：石斧（図S12）。色は灰緑色で、粒径が0.5～1mmの緑色の斑点が散在する。斑晶鉱物は長石、角閃石である。長石は灰白色針状で、粒径が0.2～0.3mm、量が非常に多い。角閃石は黒色柱状の自形で、粒形が0.2～0.3mm、量は僅かである。石基は淡緑色、ガラス質である。

泥岩：砥石（図I14）。色は灰色で、弱い劈開がある。粒径が0.5mmの鱗のような化石がごく僅かに認められる。また、砂粒として粒径が0.1mm大の石英がごく僅かに認められる。

片麻状ザクロ石黒雲母花崗岩：敲石（図76）。色は暗灰色で、礫形が亜角である。片麻状構造が顕著で、長石が多い部分が白いレンズ状をなす。鉱物はザクロ石と細粒の石英、長石、黒雲母である。ザクロ石は赤褐色で、偏菱二十四面体をなし、粒径が0.5～1mm、量がごく僅かである。石英は無色透明、粒径が0.2～0.3mm、量が非常に多い。長石は無色透明、粒径が0.2mm大、量が僅かである。黒雲母は黒色板状、粒径が0.2mm大、量が中である。

緑色片岩：石包丁（図S11）。色は緑色で片理がある。部分的に片理方向に石英脈が含まれる。長石は無色透明、短柱状で、粒径が0.1～0.2mm、量が僅かである。基質はガラス質である。

以上の石種と酷似する岩相を示す岩石が分布する地を近距離で求める。

輝石安山岩の加工片には自然の風化面が一部に認められるものがあることから、原石が礫であると推定される。岩相はややガラス質であり、サヌキトイドに属する岩石である。サヌキトイドの礫が分布する地としては二上層群原川累層やその付近の大坂層群中である。二上山西方のドンヅルボー北方に分布する原川累層分布地が礫の採取地と推定される。

輝緑岩は変成を受けていない秩父帯に分布する輝緑岩の岩相に似る。吉野郡川上村北部には広く分布する岩石であり、吉野川の川原石にも認められる。下市付近から上市にかけての川原で採取さ

れたものであろうか。

片麻状ザクロ石黒雲母花崗岩は矢田山付近にも同質のものがみられるが、縞形が円いことから、大和川のような川原石であると推定される。近距離では大和川の川原でも同様の石が採取でき得る。

緑色片岩は弱い片理があり、点紋が認められないことから吉野川流域の四万十帯の片岩質部、吉野山帶に分布する緑色片岩の岩相に似る。採取地としては五条から吉野町にかけての吉野川の川原が推定される。

泥岩については推定しがたい。

遺跡から出土した石器の石材は、遺跡付近はもとより、関屋付近、吉野川の川原付近に至る範囲から運ばれていると言える。

### 3. 原田遺跡 木製品の樹種と花粉分析

天理大学付属天理参考館

金原正明

#### 1. 木製品の樹種

##### a. 試料と方法

原田遺跡 SD-01・SK-06・SK-05より出土の木製品33点について樹種同定を行った。同定は、試料となる木製品からカミソリによって横断面・放射断面・接線断面の切片を作り、光学顕微鏡によって観察し同定した。試料は木製品であるため、必要最小限の切片の採取にとどめた。また、試料によっては採取できない断面もあった。

##### b. 結果

材試料の多くは、材構造の保存が良く、分野壁孔まで明瞭に観察できるもの多かった。同定の結果、8の分類群が認められ、これらは各同定分類レベルにおいて種名・属名・亜属名によって表した。また、それぞれの分類群の顕微鏡写真を示した。以下に結果と同定根拠となる特徴を示す。表に構成ごとに一覧する。

##### モミ属 M-23

春材から夏材への移行が急で、仮道管と放射柔細胞のみから構成される。放射柔細胞の接線膜は著しく結節状を示す。モミ *Abies firma* Sieb. et Zucc.以外は、亜高山帯に分布するため、モミとみられる。

##### カヤ M-5

春材から夏材への移行はゆるやかで、仮道管と放射柔細胞からなる針葉樹材で、仮道管に2本対の螺旋肥厚がある。

##### スギ M-25・26・30

仮道管・樹脂細胞・放射柔細胞からなり、分野壁孔が典型的スギ型で通常1分野2個存在する。

##### ヒノキ M-2・3・4・27・31・33

春材から夏材への移行がゆるやかで、仮道管・樹脂細胞・放射柔細胞からなり、分野壁孔が典型的ヒノキ型で通常1分野2個存在する。分野壁孔の型の確認できないもので、仮道管・樹脂細胞・放射柔細胞からなり、春材から夏材への移行がゆるやかで、分野壁孔が通常1分野2個存在することが確認できた試料もヒノキとした。

##### コナラ属アカガシ亜属 M-1・6・7・21・28・29・32

中型から大型の道管が単独であるが帶状に放射方向に配列する。放射組織は、同性で単列放射組織と広放射組織の複合型である。

##### サカキ M-24

小型の道管がほぼ均等に散在する散孔材。道管の穿孔は、階段状で微細な bar が狭い間隔で多く、ときには100を越えることがある。放射組織は異性で主に1列である。

ヤツツバキ M-20

小型の道管が均等に散在し、単独のものが多い。道管が年輪界で少し大きめのものが2列程度配列する部分もある。道管の穿孔は幅の広い階段状を示し、部分的に網状を呈するものもある。bar は10~15程である。放射組織は1~4列の細胞幅で2列が多く、高さはあまり高くなく、異性である。放射組織の細胞には円形に著しく膨れているものが認められる。

エゴノキ属 M-8~19

道管は散在するが、道管配列に明かな差があり、秋材部で直径が減少する。単独のものと放射方向に複合するものがある。穿孔は階段状で10前後である。放射組織は異性でやや高く、1~4細胞幅である。現生標本より細胞壁が薄い。

散孔材 M-22

放射組織が2列異性となる散孔材であるが、道管の穿孔が観察できなかった。

分類群		試料(遺構ごと)		
学名	和名	SD-01	SK-06	SK-05
Abies	モミ属			1
Torreya nucifera Sieb. et Zucc.	カヤ		1	
Cryptomeria japonica D.Don	スギ		3	
Chamaecyparis obtusa Endl.	ヒノキ		3	3
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	アカガシ亞属	1	2	4
Cleyera japonica Thunb.	サカキ			1
Styrax	エゴノキ属		12	
Camellia	ツバキ属		1	
Diffuse-porous wood	散孔材			1

表9 出土樹種一覧

## 2. 花粉分析

### a. 試料と方法

溝SD-01を含む南断面で試料採取を行った。試料は断面より切りとり、小ブロックにして採取した。試料となる堆積物は、最下部が庄内式期の堆積物である溝SD-01からその上位の古墳時代後期の堆積物にまたがる。溝SD-01内の堆積物は明かな葉理やレンズ状堆積は認められず、穏やかな水域か湿地での堆積であろう。上位の古墳時代後期の堆積物は、淘汰がやや悪く、土壤生成作用を受けつつ堆積したものとみられる。溝SD-01の最下層は庄内式土器を含み最上位試料の層準では、TK-209型式の須恵器が含まれる。

試料は、ブロック状のものは内部の新鮮な部分を用いた。花粉・胞子の分離抽出は、5%水酸化カリウム、沈澱法による砂粒の除去、25%フッ化水素酸、アセトトリス処理の各処理を施し行った。石炭酸フクシンで染色し、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作成した後、直ちに検鏡した。計数は、花粉粒が300個以上に達するまで行った。

### b. 結果

結果は、花粉総数を基本数とする百分率を算出し、花粉組成図（図49）に示した。分類群は以下のとおりである。

#### 木本花粉 Arboreal pollen

イヌマキ属Podocarpus、モミ属Abies、ツガ属Tsuga、マツ属復総管束亞属（ニヨウマツ類）Pinus subgen. Diploxyylon、コウヤマキ Sciadopitys、スギ Cryptomeria、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科 Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae、クルミ属—サワグルミ属 Juglans-Pterocarya、ハンノキ属Alnus、カバノキ属Betula、クマシテ属—アサダ属 Carpinus-Ostrya、ハシバミ属Corylus、ブナ属Fagus、クリ属—シ属 Castanea—Castanopsis、コナラ属コナラ亞属（ナラ類）Quercus subgen. Lepidobalanus、コナラ属アカガシ亞属（カシ類）Quercus subgen. Cyclobalanopsis、ニレ属—ケヤキ属Ulmus-Zelkova、エノキ属—ムクノキ属 Celtis-Aphananthe、モチノキ属Ilex、ツツジ科Ericaceae、モクセイ科Oleaceae、ハイノキ属Symplocos、ガマズミ属—ニワトコ属 Viburnum-Sambucus

#### 木本+草本花粉

クワ科—イラクサ科 Moraceae-Ulticaceae、マメ科 Leguminosae

#### 草本花粉 Nonarboreal pollen

ガマ属—ミクリ属 Typha-Sparganium、オモガタ属 Sagittaria、サジオモダカ属 Alisma、イネ科 Gramineae、カヤツリグサ科 Cyperaceae、ミズアオイ属 Monochoria、ホシクサ属 Eriocaulen、イボクサ Aneilema、タデ属 サナエタデ節 Polygonum sect. persicaria、タデ属 Polygonum、ギシギシ属 Rumex、ナデシコ科 Caryophyllaceae、アカザ科—ヒユ科 Chenopodiaceae-Amaranthaceae、コウホネ属 Nuphar、ミズユキノシタ属 Ludwigia、アブラナ科 Cruciferae、ユウガオ属 Lagenaria、オミナエシ科 Valerianaceae、ヨモギ属 Artemisia、キク亞属 Asteroideae、タンポポ亞科 Lactucoideae

## シダ植物胞子Fern Spore

単条溝胞子Monolate type spore、三条溝胞子Trilate type spore

主要花粉遺体群集の層位変化は、下位より4区分（I・II a・II b・III a・III b）の変遷を示す。

I：試料10・9では、樹木花粉がやや多く、コナラ属アカガシ亜属（カシ類）が優占する。イネ属型を含むイネ科もやや多い。コナラ属アカガシ亜属は増加傾向を示す。

II a：試料8・7では、コナラ属コナラ亜属（ナラ類）が急増し、反してカシ類が減少する。上位に向かって、ナラ類は減少傾向を、カシ類は増加傾向を示す。

II b：試料6～4では、カシ類・ナラ類とも減少し、イネ属型を含むイネ科が増加する。

III a：試料3・2では、カシ類が再び増加し、上位に向かっては減少する。草本では、ヨモギ属が増加、カヤツリグサ科が減少する。

III b：カシ類は減少し、イネ科が増加する。草本では、ヨモギ属に加えて、アカザ科ヒュウ科・ナデシコ科が増加する。

### c. 植生・環境の変化

花粉分析によってえられた花粉の5区分と堆積層の区分とがよく一致する。これは、植生の変化と堆積物に影響をおよぼす環境の変化が同時に同一の変化であったことを示している。

また、変動の著しいカシ類・ナラ類の樹木、イネ科の草本は、堆積域か比較的近い周囲に生育していたとみられる。そして、スギなど各試料から出現する様々な樹木は周辺の森林における普遍的な構成要素であり、草本類も同様であろう。

以下、花粉遺体の区分に沿って植生・環境の変遷を推定する。

I：周囲は、比較的森林の多い環境で、カシ類を主とする照葉樹林が分布していた。イネ属型を含むイネ科の出現からみても、ある程度の水田が営まれていたとみなされよう。カシ類が上位に向かって増加するのは、溝SD-01の掘削を含む土地改変後のカシ林の若干の復元であろう。

II a：カシ林が減少し、ナラ林が増加する。森林に対して伐採等の人為干渉がなされ、その後に二次林的性格のナラ林が増加したとみられる。上位に向かって、I同様カシ林が復元する。

II b：水田が増加し、森林が減少する。

III a b：ナラ林は減少しつづけ、カシ林は増加した後減少する。イネ属型は減少するものの、イネ科が増加し、ヨモギ属の増加、III bにおけるアカザ科ヒュウ科・ナデシコ科の増加は、畑作の増加を示唆すると考えられる。

以上の変遷にみられるように、基本的には森林が上位に向かって減少し、耕地が増加していく様子が示されている。しかし、それにはいくつかの波があることも示されている。ナラ類の増加はたとえば集落内に二次林的性格の樹木が生育していたのか、二次林の生育可能な放棄地が周囲に増加したのか問題を残す。また、庄内式期段階では、周辺にカシ類を主とする森林がかなり多かったことが示され注目される。そして、6・7世紀に畑作が拡大した可能性が示されている。奈良盆地において当遺跡と対比する好資料はなく、今後の資料の増加が期待されよう。

柱状図

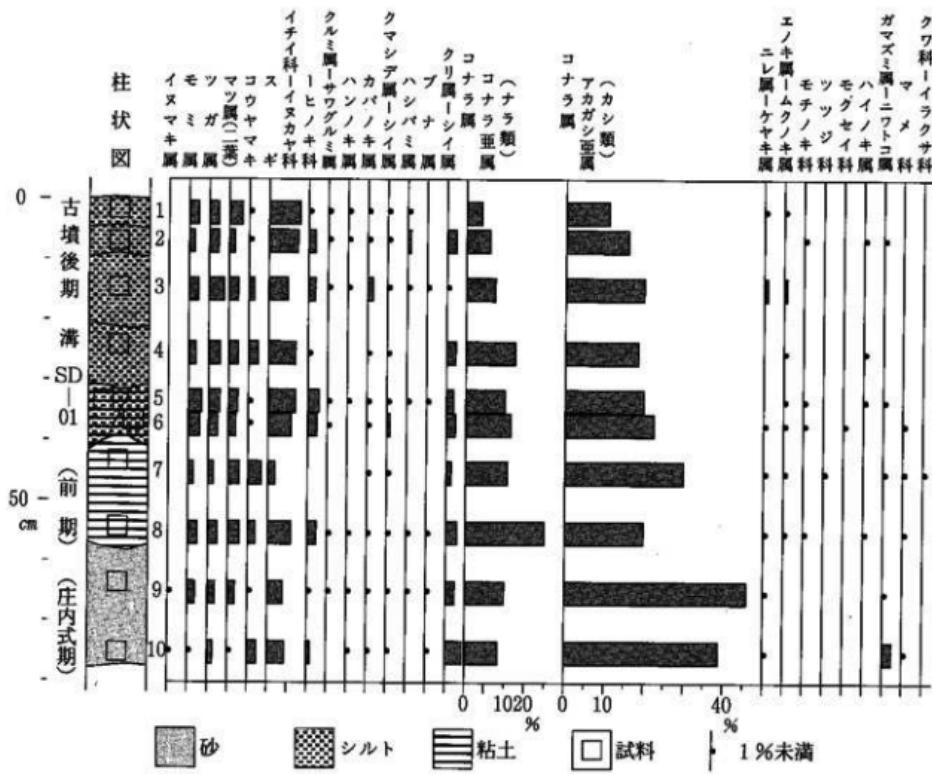
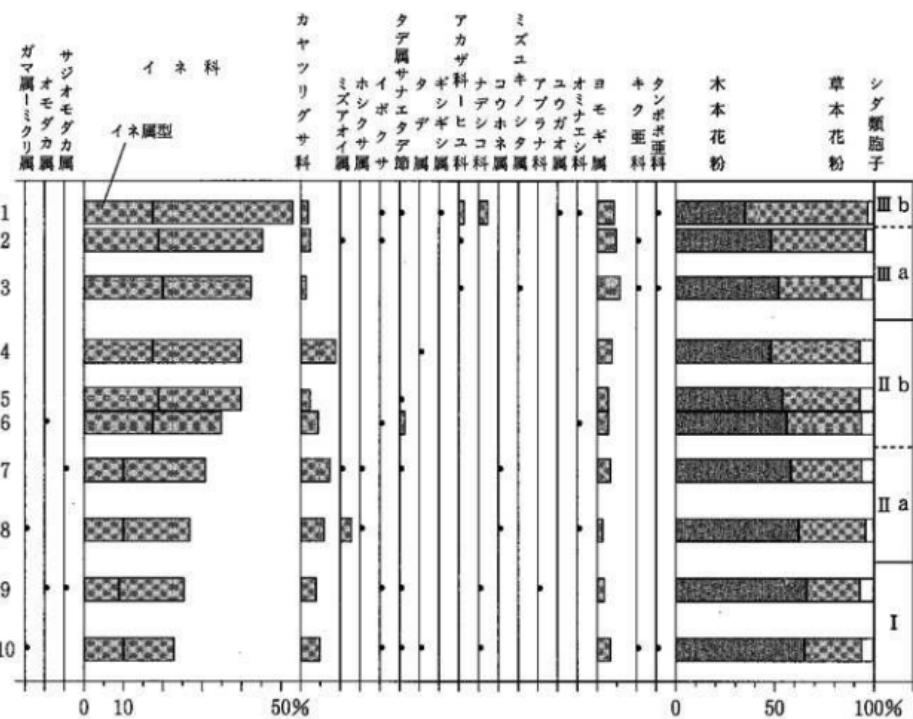
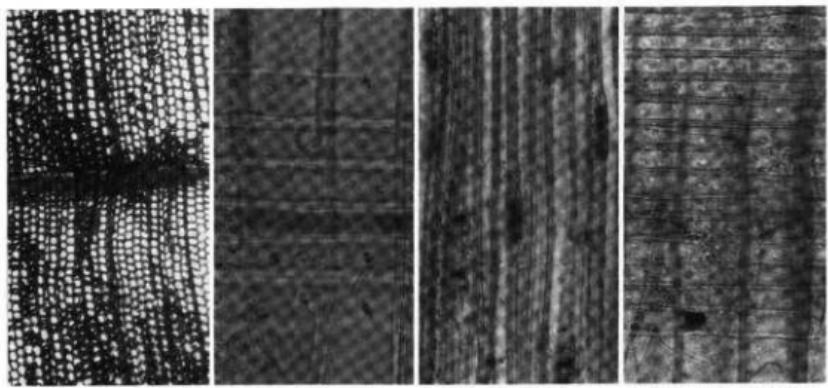
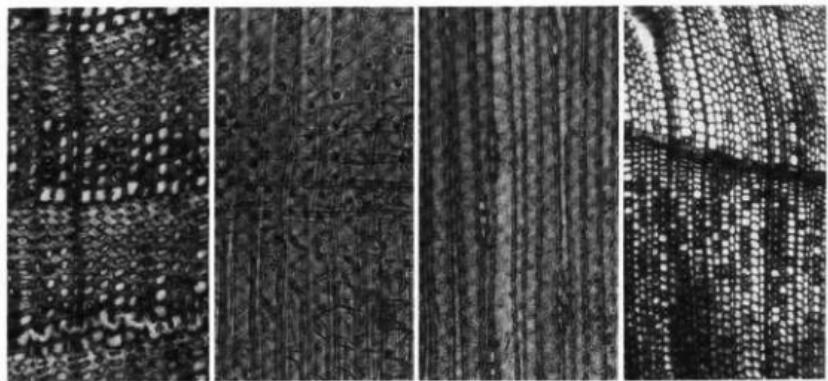


図49 原田遺跡 花粉組成図

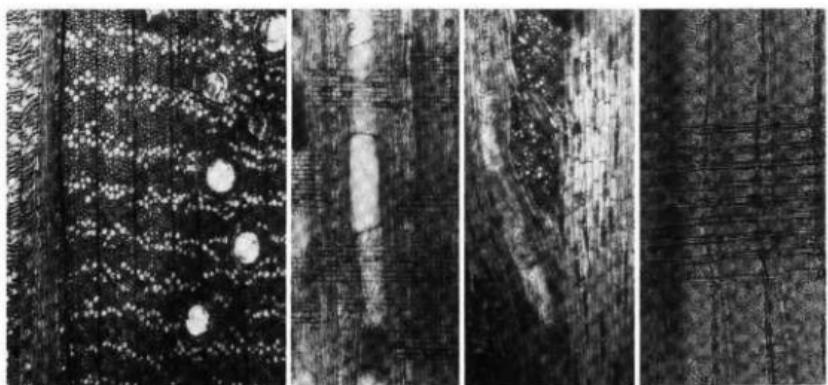




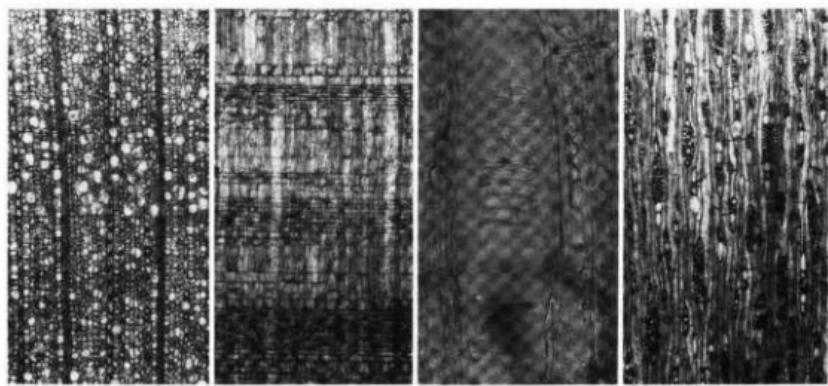
1. M-1 ヒノキ 木口( $\times 24$ ) 2. 同左 横目( $\times 240$ ) 3. 同左 板目( $\times 60$ ) 4. M-23 モミ 横目( $\times 120$ )



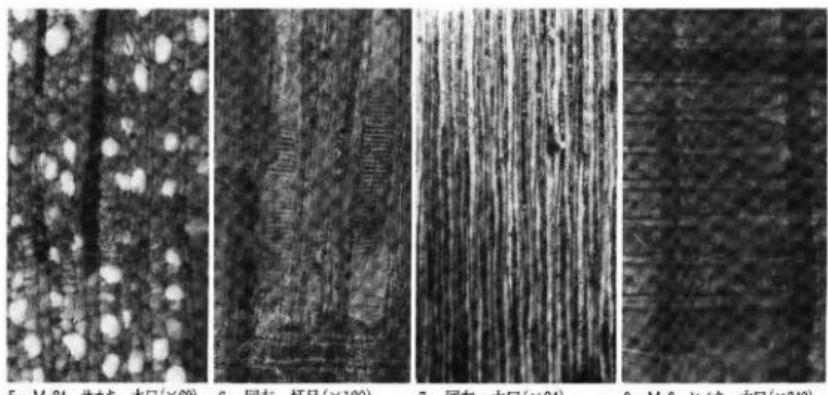
5. M-5 カヤ 木口( $\times 60$ ) 6. 同左 横目( $\times 120$ ) 7. 同左 板目( $\times 60$ ) 8. M-27 ヒノキ 木口( $\times 60$ )



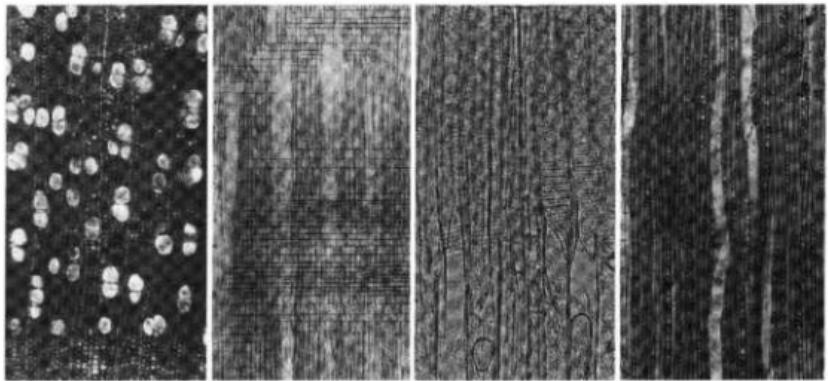
9. M-6 アカガシ亜属 木口( $\times 24$ ) 10. 同左 横目( $\times 24$ ) 11. 同左 板目( $\times 24$ ) 12. M-25 スギ 横目( $\times 240$ )



1. M-20 ヤブツノキ 木口( $\times 24$ ) 2. 同左 横目( $\times 24$ ) 3. 同左 横目( $\times 240$ ) 4. 同左 板目( $\times 24$ )



5. M-24 サカキ 木口( $\times 60$ ) 6. 同左 横目( $\times 120$ ) 7. 同左 木口( $\times 24$ ) 8. M-2 ヒノキ 木口( $\times 240$ )



9. M-18 エゴノキ属 木口( $\times 24$ ) 10. 同左 横目( $\times 24$ ) 11. 同左 横目( $\times 120$ ) 12. 同左 板目( $\times 240$ )

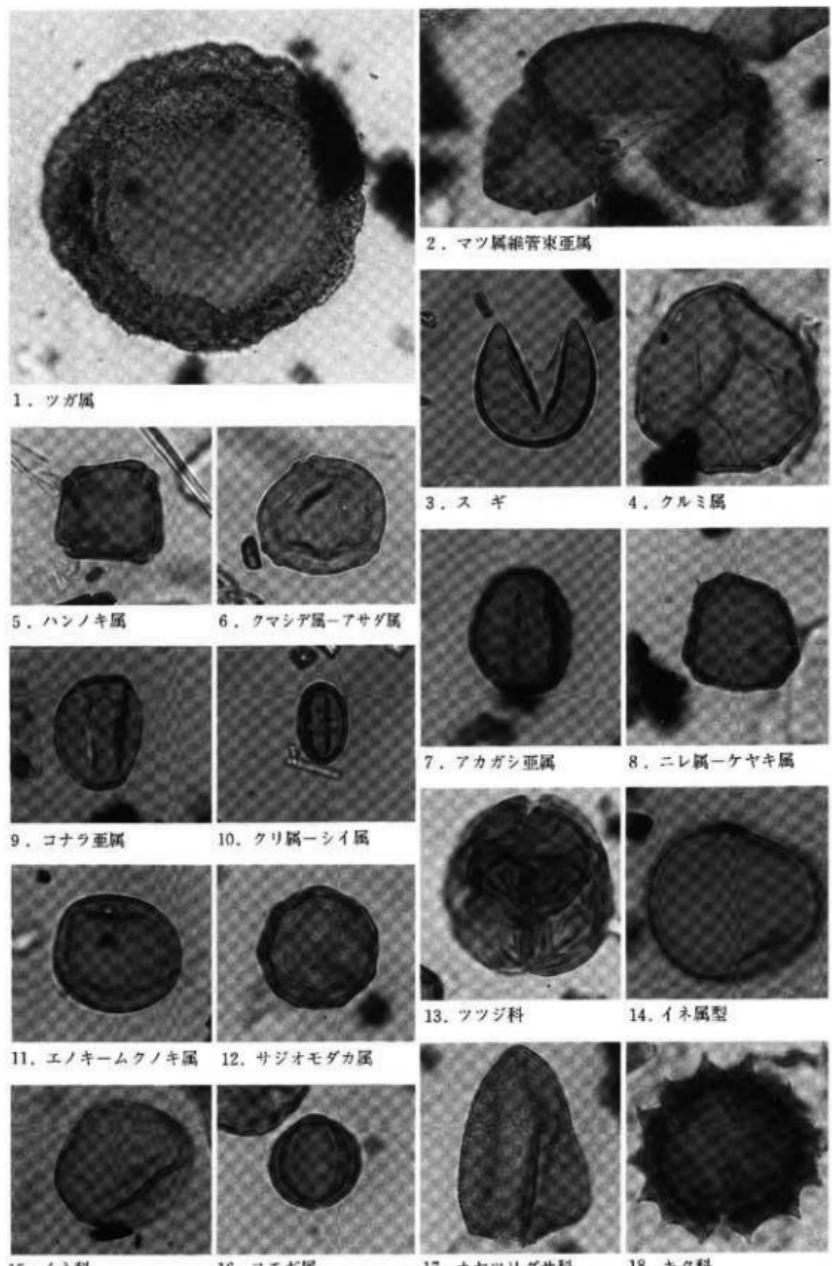


写真7 花粉顕微鏡写真 ( $\times 700$ )

#### 4. 原田遺跡出土の韓式系土器および須恵器の蛍光X線分析

奈良教育大学  
三辻利一

##### 1. はじめに

新羅の望星里窯群、上辛里窯群、洛東江上流地域の内容洞窯群、礎渓堤窯群、大邱市の新塘洞窯群、百濟の三龍里窯群、雲谷里窯群の陶質土器の化学的性質は明らかにされており、日本各地の遺跡から出土する陶質土器が眞に陶質土器であるのか、それとも朝鮮半島から渡來した工人が大阪陶邑で作った外見上、陶質土器と類似する須恵器であるのかを判断することができるようになった。これらのデータを基礎にして、原田遺跡から出土した韓式系土器および須恵器の蛍光X線分析の結果について報告する。

##### 2. 分析方法

土器片はすべて、表面を研磨してのち、100メッシュ以下に粉碎された。粉碎することの意味は試料をできるだけ均質化するためと、形状一定の蛍光X線分析用試料を作成するためである。粉末試料は塩化ビニール製リング枠の内に入れて、約15トンの圧力を加えてプレスし、内径20mm、厚さ3～5mmのコイン状の鉛剤試料を作成した。このようにすることによって、相対測定上の必要条件である試料に対する入射X線、検出器の幾何学的条件を一定にそろえることができる。

蛍光X線の測定には2次ターゲット方式のエネルギー分散型蛍光X線分析装置が使用された。Tiを2次ターゲットにして、真空中でK、Caを、また、Moを2次ターゲットにして空気中でFe、Rb、Srを測定した。定量分析のための標準試料には岩石標準試料JG-1を使用したが、同時に、分析値の表示にはJG-1による標準化値を使用した。

##### 3. 分析結果

はじめに、朝鮮半島産陶質土器と大阪陶邑群産須恵器との相互識別について説明する。前者は後者に対して一般に、K、Ca、Rb、Sr量が多いことがわかっている。とりわけ、Ca、Sr量が多く、両者の相互識別には有効であった。前者の中でも百濟の三龍里窯群や雲谷里窯群の陶質土器にはK、Rb量も多く、K、Ca、Rb、Srの4因子で大阪陶邑群とは容易に相互識別される。また、洛東江上流地域の内容洞窯群の陶質土器にも、K、Rb量が少し多いが、大阪陶邑群の領域とは一部重複するところがあり、放射化分析によるLa因子を入れない限り、完全には分離しなかった。礎渓堤群の陶質土器にはCa、Sr量がかなり多く、4因子だけでも大阪陶邑群とは完全に分離した。朝鮮半島産陶質土器の中で、4因子からみて大阪陶邑群にもっとも近いのは新羅の望星里群と大邱市の新塘洞群である。そこで、大阪陶邑群と望星里群との相互識別を試みた結果を図50に示す。Dm、Dmはそれぞれ、大阪陶邑群、望星里群の重心からのマハラノビスの汎距離である。本来、両群が完全に分離するとすれば、大阪陶邑群のサンプルはDm≤10、Dm>10の領域に、また、

望星里群のサンプルは  $D_b \leq 10$ 、 $D_b > 10$  の領域に分布するはずである。しかし、図50からわかるように、大阪陶邑群のサンプルの半数が大阪陶邑領域に分布するだけで、残りの半数は重複領域に分布し、さらに、望星里群のサンプルのはほとんども重複領域に分布し、相互識別は不完全であることを示している。とはいものの、重複領域では両群のサンプルは完全に混交して分布している訳でもない。中央に引かれた斜線を境に偏在していることがわかる。この斜線は両群の重心から等距離にある点の軌跡であり、両母集団が統計学的にみて等価である場合の境界線になる。図50より、境界線より上方（望星里領域側）に望星里群のサンプルは偏在し、逆に下方に大阪陶邑群のサンプルが偏在することがわかる。この境界線を板に、両群の相互識別に使ったとしても、大阪陶邑群の81点のサンプル中の13点が望星里側に、望星里群の29点のサンプル中の6点が大阪陶邑側に分布する。すなわち、大阪陶邑群のサンプルの16%が望星里群と誤判別され、また、望星里群のサンプルの20%が大阪陶邑群と誤判別された訳である。大阪陶邑群と新塘洞群も同様に完全には相互識別されない。しかし、上辛里群とはより相互識別し易い。したがって、日本の遺跡から出土する陶質土器の産地を推定する場合に、大阪陶邑産か、それとも、望星里群産か、新塘洞産かを判断する上に注意を要する。

このような背景をもって、原田遺跡出土の硬質土器の産地を推定した結果について次に説明する。分析値は表10に示す。

図51には図50と同じ分布図上に原田遺跡から出土した69点のサンプルをプロットした結果を示す。ほとんどのサンプルは境界線より大阪側に分布し、望星里側に分布するのは数点に過ぎないことは注目に値する。そして、不明領域 [ $D_b > 10$ 、 $D_b > 10$ ] に分布するサンプルのうち、 $D_b = 10$  のラインから大きく離れているNo.41、29、45、62、63の5点は両群には対応せず、別産地の製品とみられる。

このように、原田遺跡の陶質土器は胎土からみてほとんどが大阪陶邑産の可能性があることがわかったが、念のために、各母集団からのマハラノビスの汎距離の二乗値を計算した。その結果が表11にまとめられている。産地を推定する際に採用された各母集団への帰属条件は  $D^2 \leq 10$  である。この帰属条件は各母集団のサンプルがもつ所属条件であり、筆者によって全日本の窯跡出土須恵器の分析データに基づいて提案された経験的帰属条件である。そうすると、表11より、約半数は単独で大阪陶邑産と推定されているが、残りの半数は大阪陶邑産であると同時に、陶質土器である可能性もあることがわかる。例えば、No.1では  $D^2$  の値が小さい順に大阪、望星里、上辛里群が産地の候補として上げられる。

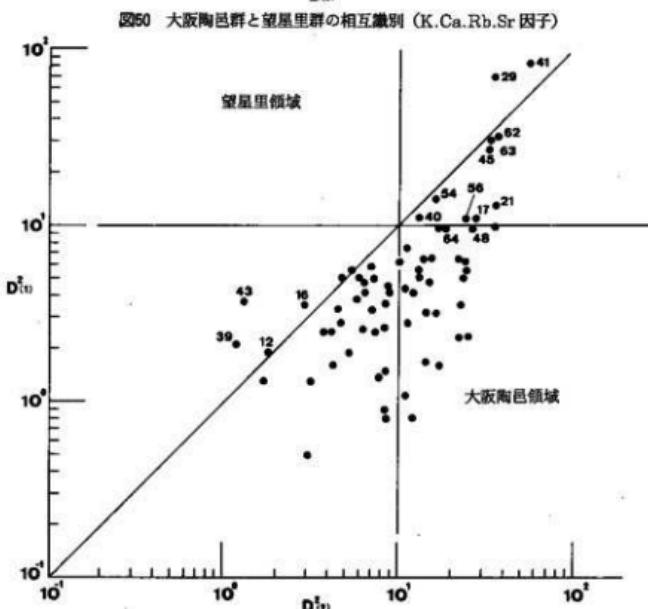
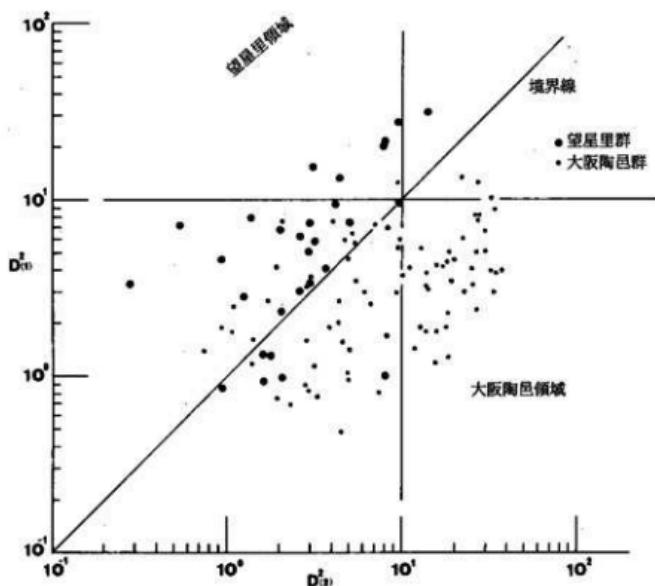
表11の計算結果を確かめる上には  $R_b - S_r$  分布図が使える。この分布図は各地の須恵器や陶質土器の地域差を有効に表示することで知られている。原田遺跡の陶質土器の  $R_b - S_r$  分布図を図52、53に示す。両図には大阪陶邑領域の外に、望星里領域と上辛里領域を示してある。新塘洞領域は望星里領域にほとんど重複する。表11で百濟地域の三龍里群、雲谷里群、それに、洛東江上流地

域の礎石堤群に対応するものがなかったので、これらの分布領域は省略した。各母集団の領域はいずれも窯群出土の須恵器、陶質土器をほとんど包含するようにして描いたものである。勿論、定性的な意味しかもないが、表11の計算結果と比較しつつ、産地を考える上には役に立つ。

まず、図52からみてみよう。大阪領域にのみ分布するNo.2、7、8、20、23、24、25、28、30、31の10点は大阪陶邑産と推定され、表11の結果と一致する。No.17、29は対応する母集団はなく、産地は不明となる。他のサンプルは大阪陶邑産と同時に、陶質土器である可能性も残されている。

次に、図53をみてみよう。上辛里領域や望星里領域をぞれ、大阪陶邑領域に分布するものが多い点が注目される。重複領域には分布せず、大阪陶邑領域に分布するNo.35、36、42、47、48、50、51、52、53、55、57、58、59、60、61、66の16点は大阪陶邑産の可能性が高い。逆に、陶質土器である可能性が高いのはNo.40、64の2点にしか過ぎない。残りの多くは両方の可能性をもつ。なお、どの領域にも対応しないNo.41、45、62、63の4点は産地不明である。なお、当初、非破壊分析を予定していたが、灰釉が付いていて測定できなかったので、ごく少片をとって粉碎し分析したNo.3とNo.74のうち、No.3は陶質土器の可能性があり、逆にNo.74は大阪陶邑産の可能性が高いと判断された。

以上の結果をまとめると、71点の分析試料のうち、No.2、7、8、20、23、24、25、28、30、31、35、36、42、47、48、50、51、52、53、55、57、58、59、60、61、66、74の27点は大阪陶邑産の可能性が高いと判断された。逆に、陶質土器の可能性が高いと判断されたのは、No.40、64、3の3点にしかすぎなかった。産地不明はNo.29、41、45、54、62、63の6点である。残りの35点は大阪陶邑産の可能性はもっているものの、陶質土器の可能性も若干残されているので、ここでは無理をして産地を推定せず、保留しておいた。放射化分析によるLa因子の分析結果を待って結論が下される。



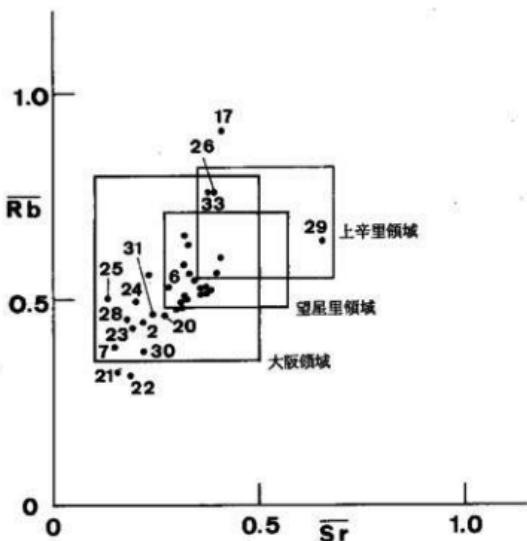


図52 Rb-Sr分布図1

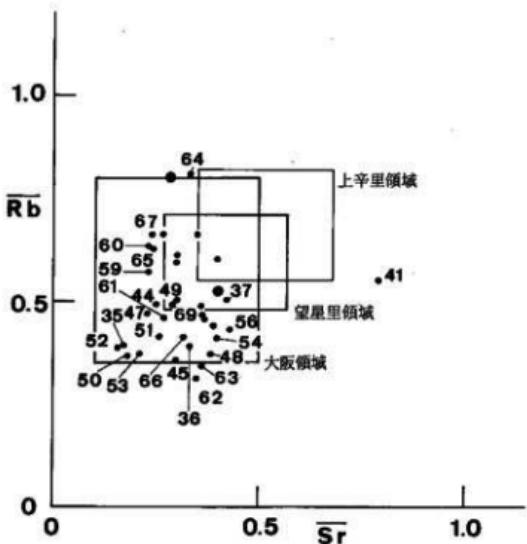


図53 Rb-Sr分布図2

No.	器種	K	Ca	Fe	Rb	Sr
1	台付き壺	0.492	0.124	2.91	0.560	0.323
2	壺	0.329	0.068	2.27	0.444	0.223
3	壺	0.451	0.175	3.13	0.545	0.339
4	壺	0.502	0.156	1.92	0.627	0.332
5	坏蓋	0.421	0.091	2.21	0.572	0.298
6	壺	0.361	0.093	2.01	0.531	0.277
7	高坏	0.303	0.050	2.86	0.381	0.150
8	壺	0.356	0.087	1.95	0.489	0.310
9	壺	0.444	0.202	2.12	0.527	0.370
10	壺	0.398	0.155	2.92	0.480	0.313
11	壺	0.430	0.143	1.80	0.579	0.316
12	壺	0.527	0.110	2.10	0.646	0.322
13	壺	0.427	0.152	1.92	0.559	0.395
14	坏身	0.466	0.108	2.65	0.508	0.319
15	坏身	0.430	0.133	2.40	0.527	0.366
16	高坏	0.471	0.167	2.29	0.597	0.407
17	壺	0.604	0.167	2.10	0.906	0.409
18	壺	0.449	0.113	2.70	0.500	0.324
19	壺	0.451	0.182	2.34	0.522	0.375
20	瓶	0.373	0.110	2.56	0.463	0.270
21	高坏	0.233	0.056	2.57	0.319	0.155
22	壺	0.263	0.057	2.13	0.310	0.185
23	器台	0.349	0.069	2.14	0.428	0.193
24	器台	0.354	0.080	2.24	0.493	0.204
25	器台	0.350	0.037	2.48	0.498	0.129
26	器台	0.552	0.148	1.88	0.757	0.392
27	坏身	0.433	0.121	2.99	0.562	0.326
28	坏蓋	0.437	0.057	3.24	0.454	0.182
29	壺	0.408	0.438	2.11	0.638	0.649
30	器台	0.346	0.088	2.31	0.374	0.217
31	壺	0.401	0.103	2.16	0.463	0.236
32	壺	0.464	0.178	3.05	0.516	0.375
33	壺	0.573	0.172	2.47	0.762	0.377
34	器台	0.461	0.146	2.14	0.520	0.372
35	坏身	0.299	0.051	2.32	0.389	0.172
36	壺	0.429	0.116	2.47	0.390	0.332

表10 分析値

No	器種	K	Ca	Fe	Rb	Sr
37	甕	0.463	0.193	2.03	0.502	0.421
38	甕	0.406	0.110	2.51	0.609	0.304
39	甕	0.513	0.169	1.87	0.603	0.397
40	甕	0.340	0.152	1.76	0.467	0.365
41	甕	0.348	0.343	1.72	0.546	0.786
42	坏身	0.436	0.163	2.80	0.444	0.392
43	甕	0.581	0.134	2.21	0.658	0.351
44	坏身	0.412	0.110	2.73	0.488	0.249
45	甕	0.359	0.294	3.18	0.338	0.354
46	甕	0.463	0.141	2.27	0.594	0.303
47	甕	0.331	0.068	1.56	0.472	0.225
48	坏身	0.402	0.147	2.71	0.374	0.377
49	壺	0.452	0.178	2.12	0.499	0.299
50	提瓶	0.407	0.063	2.32	0.365	0.179
51	甕	0.422	0.090	2.01	0.412	0.255
52	坏身	0.379	0.052	2.42	0.385	0.164
53	甕	0.279	0.092	2.20	0.368	0.210
54	壺	0.410	0.250	3.32	0.408	0.404
55	坏身	0.378	0.129	2.93	0.360	0.297
56	坏蓋	0.476	0.158	2.69	0.426	0.430
57	坏身	0.437	0.168	1.90	0.456	0.372
58	坏身	0.513	0.159	2.45	0.488	0.356
59	高坏	0.425	0.125	3.00	0.572	0.229
60	高坏	0.412	0.101	2.32	0.633	0.233
61	甕	0.436	0.101	2.36	0.455	0.274
62	甕	0.333	0.294	3.01	0.313	0.350
63	甕	0.351	0.299	2.93	0.340	0.362
64	甕	0.557	0.165	1.81	0.812	0.334
65	甕	0.571	0.118	1.64	0.625	0.240
66	器台	0.469	0.186	2.57	0.414	0.315
67	甕	0.543	0.156	2.33	0.660	0.242
68	甕	0.551	0.144	2.42	0.662	0.265
69	甕	0.454	0.101	2.71	0.491	0.291
※3		0.586	0.134	2.47	0.798	0.284
※74		0.551	0.197	2.97	0.524	0.396

\*3はP21, \*74はP40に掲載の実測図番号と対応する。  
他のものは写真8~16の各遺物番号と対応する。

No.	大阪离邑	望星里	上辛里	内谷洞	新塘洞	礎溪提	三龍里	備考
1	0.5	3.0	8.3	9.6	16	16	18	大阪、望星里、上辛里
2	4.8	15	24	32	11	27	60	大阪
3	2.5	3.7	7.2	11	5.8	14	12	大阪、望星里、新塘洞
4	1.3	1.7	4.8	5.1	5.6	15	14	大阪、望星里、上辛里、内谷洞
5	1.9	5.2	10	14	15	17	31	大阪、望星里
6	4.6	8.7	16	21	6.4	21	44	大阪、新塘洞、望星里
7	6.1	24	36	47	26	37	81	大阪
8	5.7	13	16	24	15	21	41	大阪
9	5.0	4.8	7.0	13	8.6	13	11	望星里、大阪、上辛里
10	3.6	8.4	13	20	9.1	17	24	大阪、望星里
11	2.5	4.1	8.5	11	1.7	16	21	新塘洞、大阪、望星里
12	1.9	1.8	6.7	6.2	25	16	26	望星里、大阪、内谷洞、上辛里
13	5.0	5.9	6.4	12	7.9	12	14	大阪、望星里、上辛里、新塘洞
14	1.4	7.8	11	15	21	20	20	大阪、望星里
15	3.3	7.0	8.0	13	10	14	16	大阪、望星里
16	3.5	2.9	3.6	7.1	6.7	9.7	6.9	望星里、大阪、上辛里
17	11	27	12	16	56	32	29	大阪(?)
18	1.5	8.2	11	15	17	18	19	大阪、望星里
19	3.4	4.4	6.5	11	5.1	12	10	大阪、望星里、新塘洞
20	2.8	11	17	25	9.1	21	37	大阪
21	13	35	48	64	30	45	106	大阪(?)
22	9.8	35	42	59	29	42	87	大阪
23	3.1	16	26	34	19	29	59	大阪
24	4.2	12	22	27	9.0	27	57	大阪
25	6.5	15	28	32	17	34	85	大阪
26	4.2	6.4	4.5	6.1	31	15	16	大阪、上辛里、内谷洞、望星里
27	1.6	4.2	8.1	12	7.7	15	21	大阪、望星里、新塘洞
28	1.7	14	25	29	40	32	54	大阪
29	70	35	30	38	116	30	116	不明
30	3.5	22	28	41	28	31	51	大阪
31	1.1	11	18	25	18	24	37	大阪
32	2.8	4.6	6.7	11	7.2	13	8.7	大阪、望星里、上辛里
33	5.0	7.1	4.0	2.9	15	20	17	内谷洞、上辛里、大阪
34	2.6	6.2	7.5	12	10	14	11	大阪、望星里、上辛里
35	6.4	23	34	45	20	35	79	大阪
36	5.7	24	21	29	30	31	21	大阪

表11 母集団からのマハラノビスの汎距離の二乗値

No	大阪陶邑	望星里	上辛里	内谷洞	新塘洞	礎漢堤	三龍里	備考
37	5.9	7.0	6.1	12	6.8	12	8.2	大阪、上辛里、新塘洞、望星里
38	3.8	5.8	11	14	7.9	18	32	大阪、望星里
39	2.1	1.2	3.4	4.8	8.3	11	5.6	望星里、大阪、上辛里、内谷洞
40	11	13	16	25	5.7	19	41	新塘洞
41	84	55	37	44	111	37	172	不明
42	6.4	14	11	19	13	18	14	大阪
43	3.7	1.3	8.1	4.3	29	19	26	望星里、大阪、内谷洞
44	0.9	8.5	16	21	14	22	33	大阪、望星里
45	27	32	31	60	158	28	59	不明
46	1.3	3.1	7.4	8.9	4.6	17	20	大阪、望星里、新塘洞
47	5.1	13	23	30	8.8	26	61	大阪
48	9.6	26	18	30	22	27	23	大阪
49	2.5	7.3	12	18	25	20	16	大阪、望星里
50	2.3	25	34	44	55	40	52	大阪
51	1.6	17	22	30	32	29	33	大阪
52	2.3	22	32	42	42	36	61	大阪
53	9.7	25	35	48	22	34	75	大阪
54	14	16	14	29	46	15	28	不明
55	5.0	23	23	36	29	28	32	大阪
56	11	24	16	20	28	28	12	大阪(?)
57	4.4	11	11	18	12	16	14	大阪
58	2.6	8.1	13	14	25	22	11	大阪、望星里
59	4.2	8.9	15	16	10	26	37	大阪、望星里
60	6.2	10	15	14	4.9	27	47	新塘洞、大阪
61	0.8	12	17	22	23	24	28	大阪
62	32	37	36	67	170	30	72	不明
63	30	33	31	60	157	28	64	不明
64	9.6	18	8.0	6.1	16	32	27	内谷洞
65	5.6	5.4	15	8.7	37	32	50	望星里、大阪
66	3.2	14	19	28	52	26	16	大阪
67	7.4	11	11	6.9	26	35	37	内谷洞、大阪
68	4.8	6.3	9.2	5.0	20	28	35	大阪、内谷洞、望星里
69	0.8	8.6	14	17	21	21	25	大阪、望星里
※3	10	16	9.2	4.8	24	34	50	上辛里、大阪
※74	4.0	4.6	10	9.8	23	19	8.4	大阪、望星里

\*3はP.21に、\*74はP.40に掲載の実測図番号と対応する。他のものは写真8~16の各遺物番号と対応する。

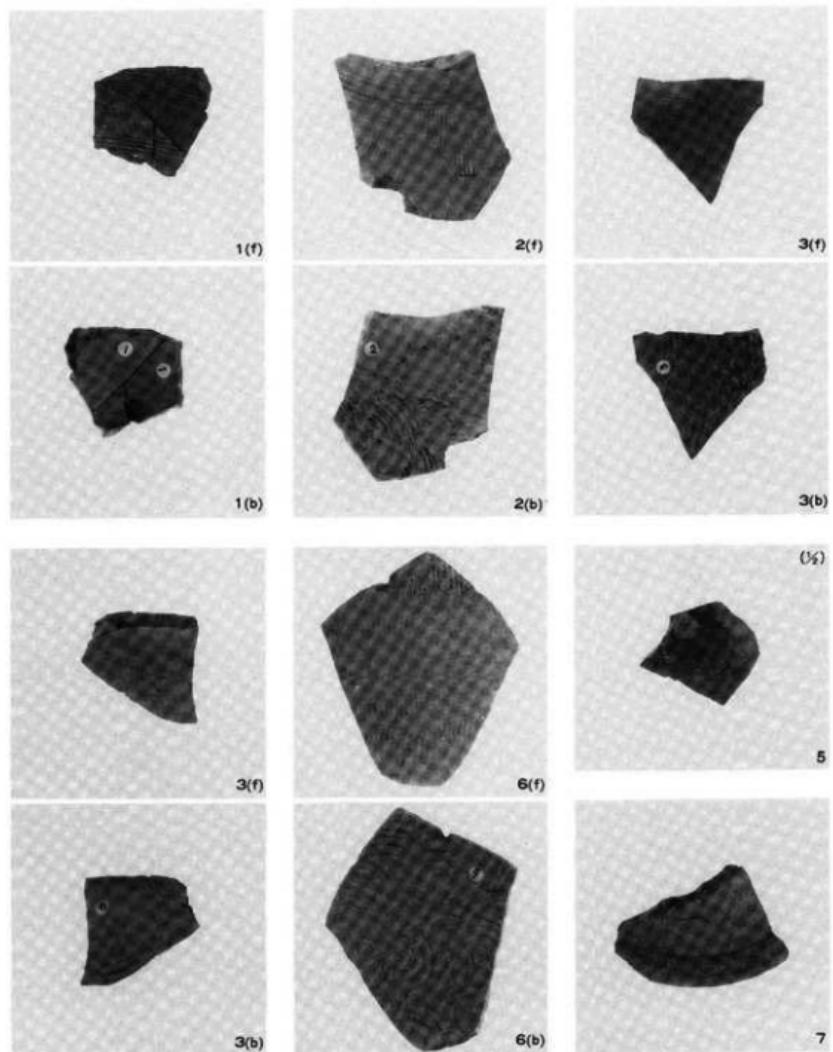


写真8 蛍光X線分析試料写真1

写真8 蛍光X線分析試料写真1

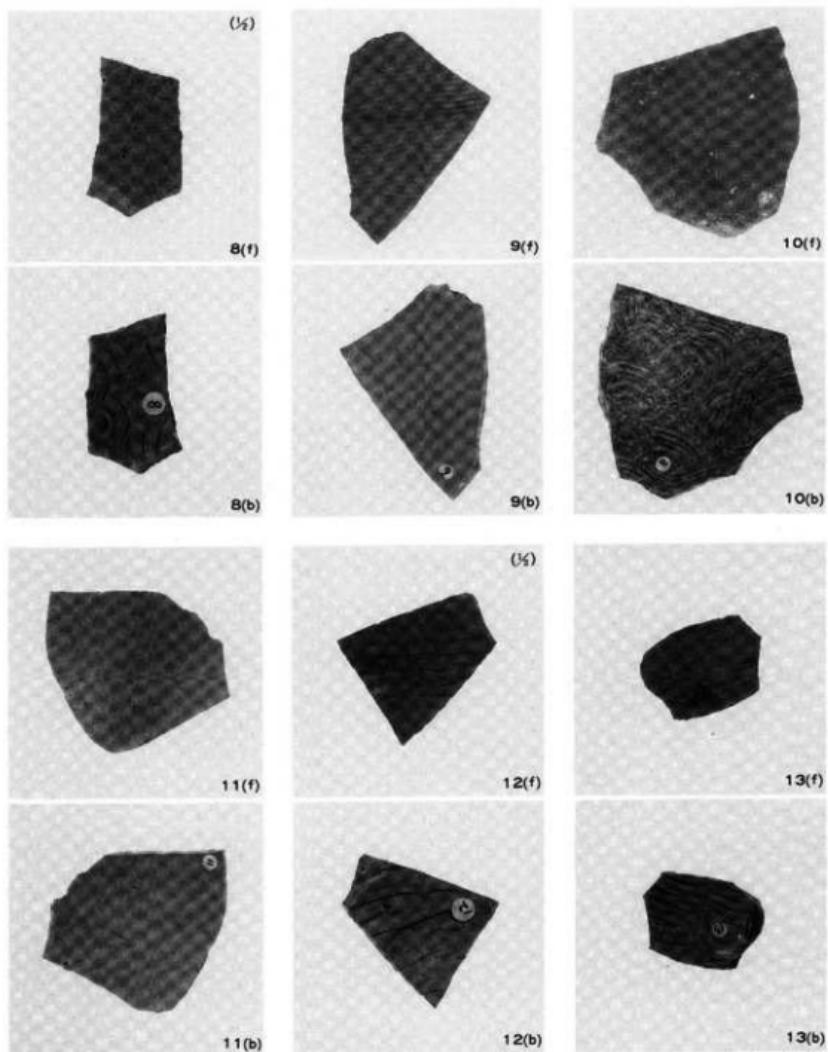


写真9 蛍光X線分析試料写真2

撮影倍率: 3 $\times$  (f)

写真9 萤光X線分析試料写真2

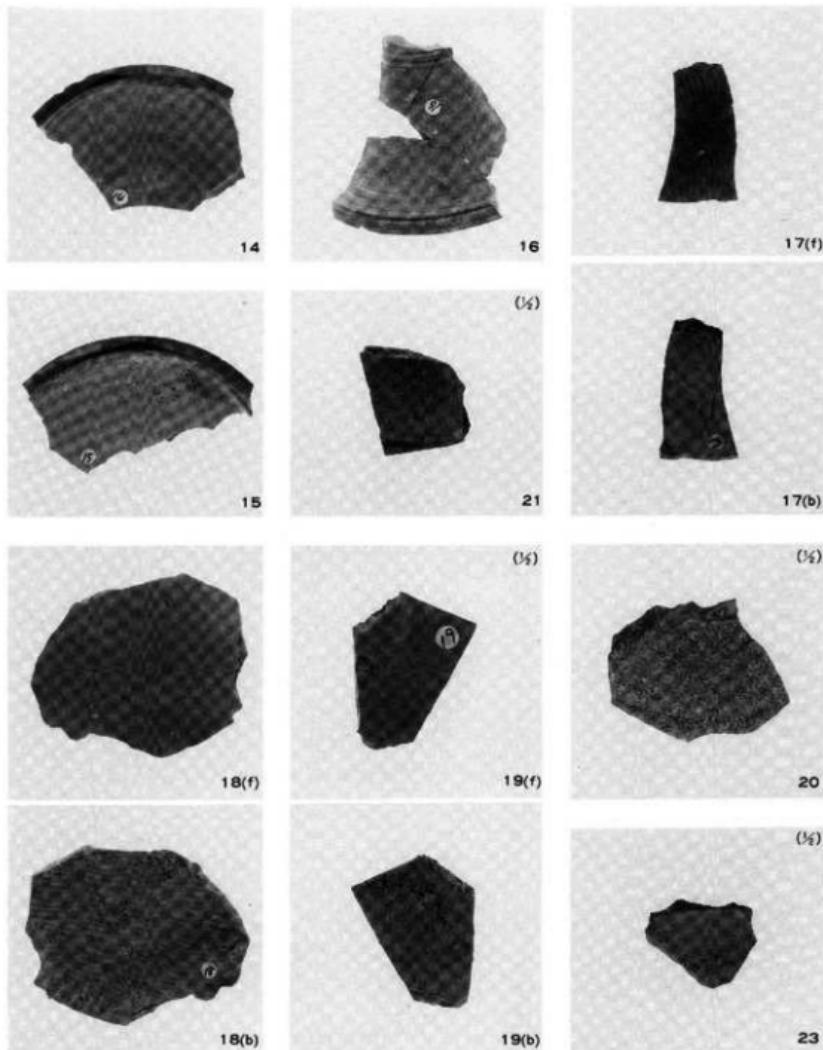


写真10 荧光X線分析試料写真3

撮影倍率：25倍（3分）

写真10 荧光X線分析試料写真3

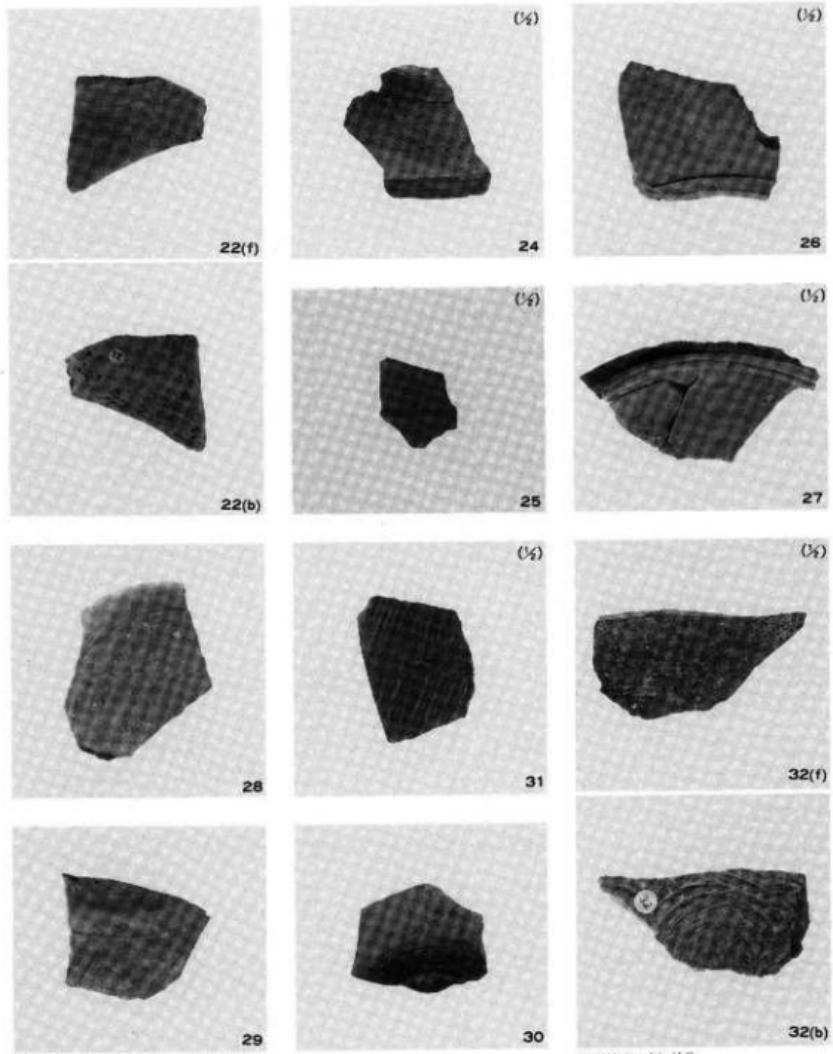


写真11 蛍光X線分析試料写真4

撮影倍率：35（35）

写真11 蛍光X線分析試料写真4

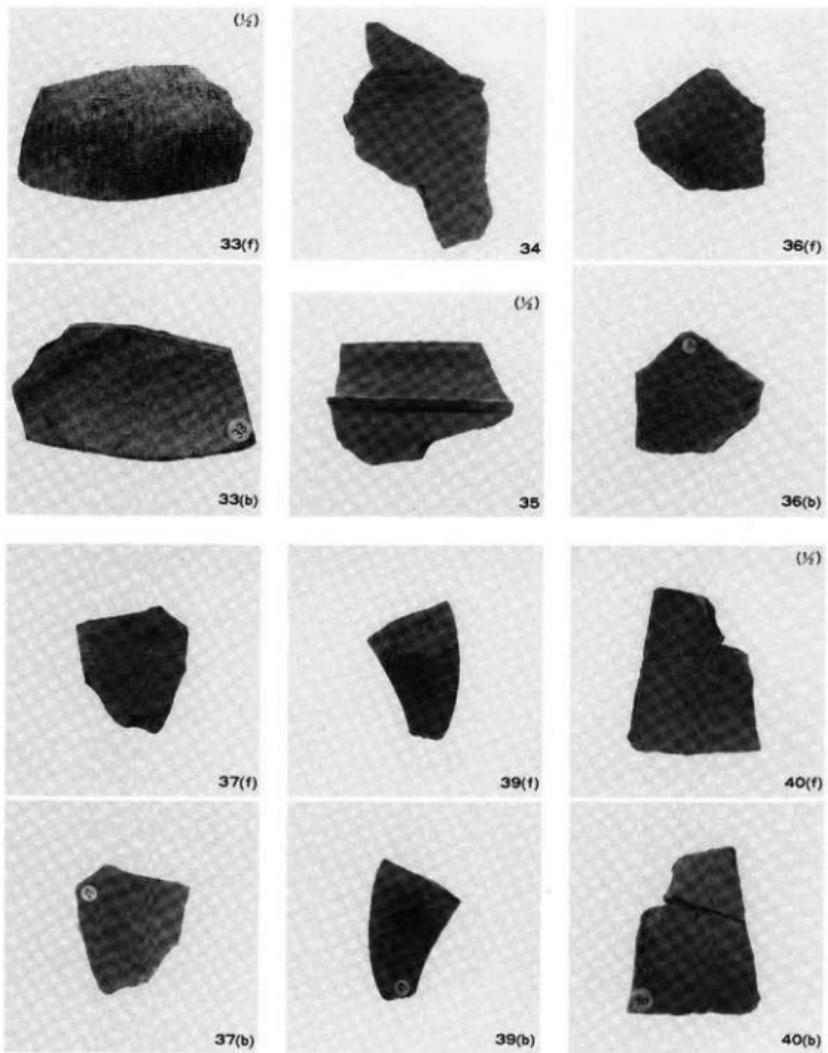


写真12 蛍光X線分析試料写真5

撮影倍率: 3倍 (34)

写真12 萤光X線分析試料写真5

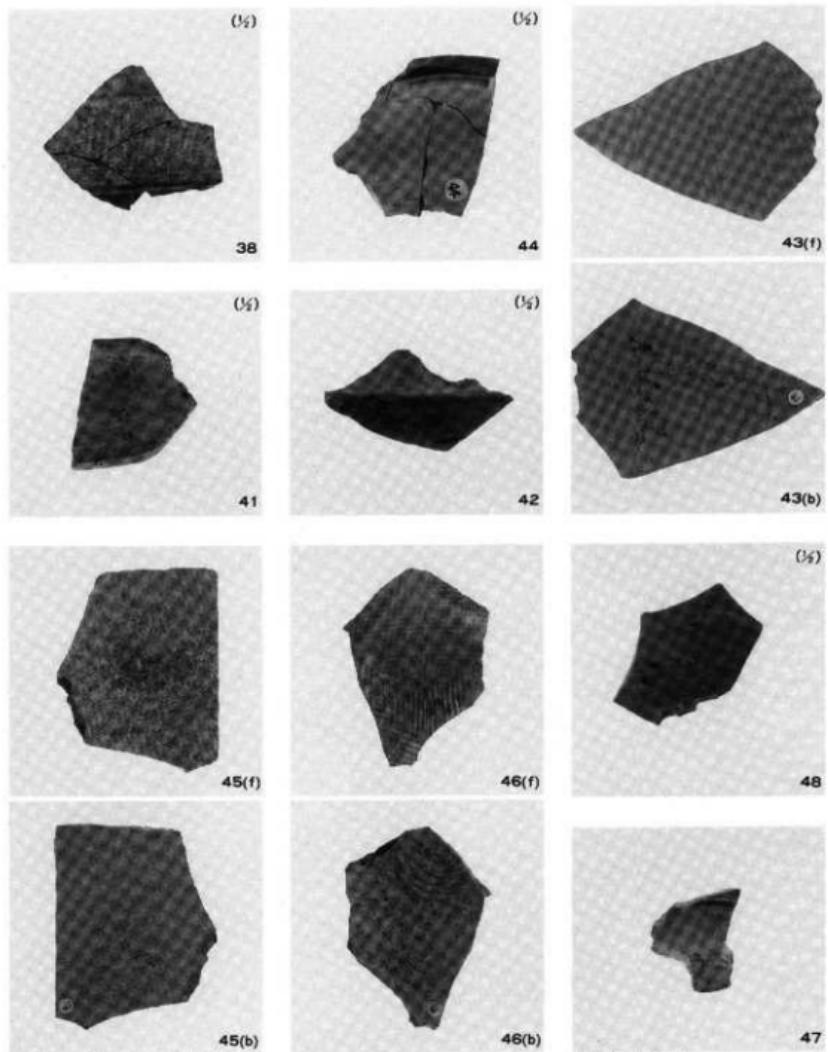


写真13 蛍光X線分析試料写真 6

撮影倍率： $\times 4$  (42)

写真13 蛍光X線分析試料写真 6

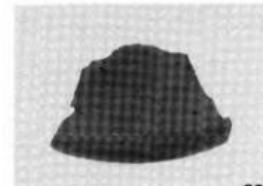
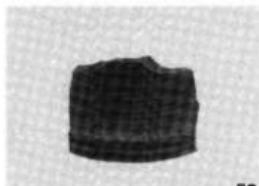
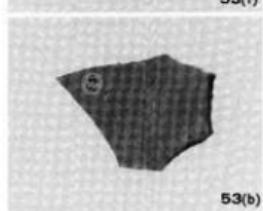
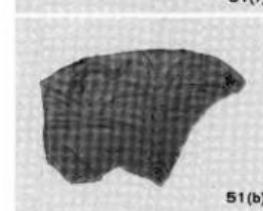
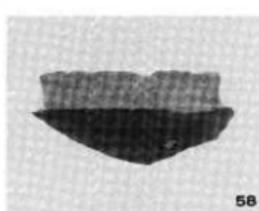
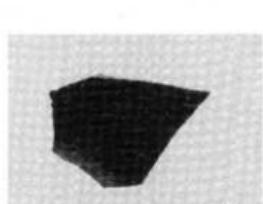
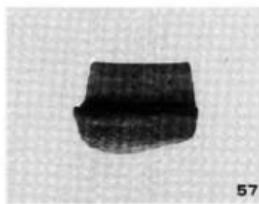
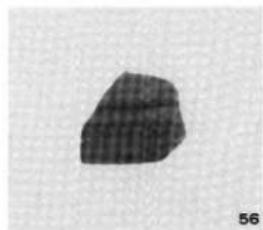
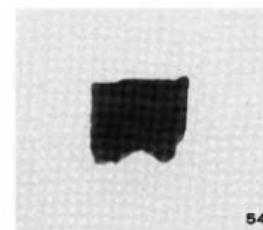
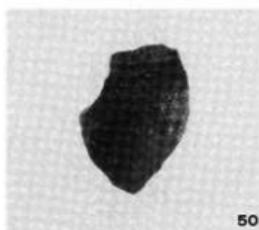
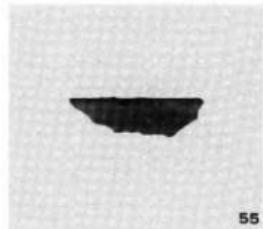
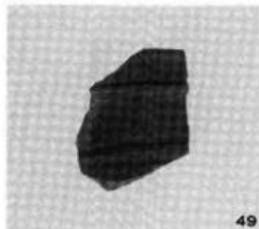


写真14 蛍光X線分析試料写真7

撮影倍率 34 (3分)

写真14 萤光X線分析試料写真7

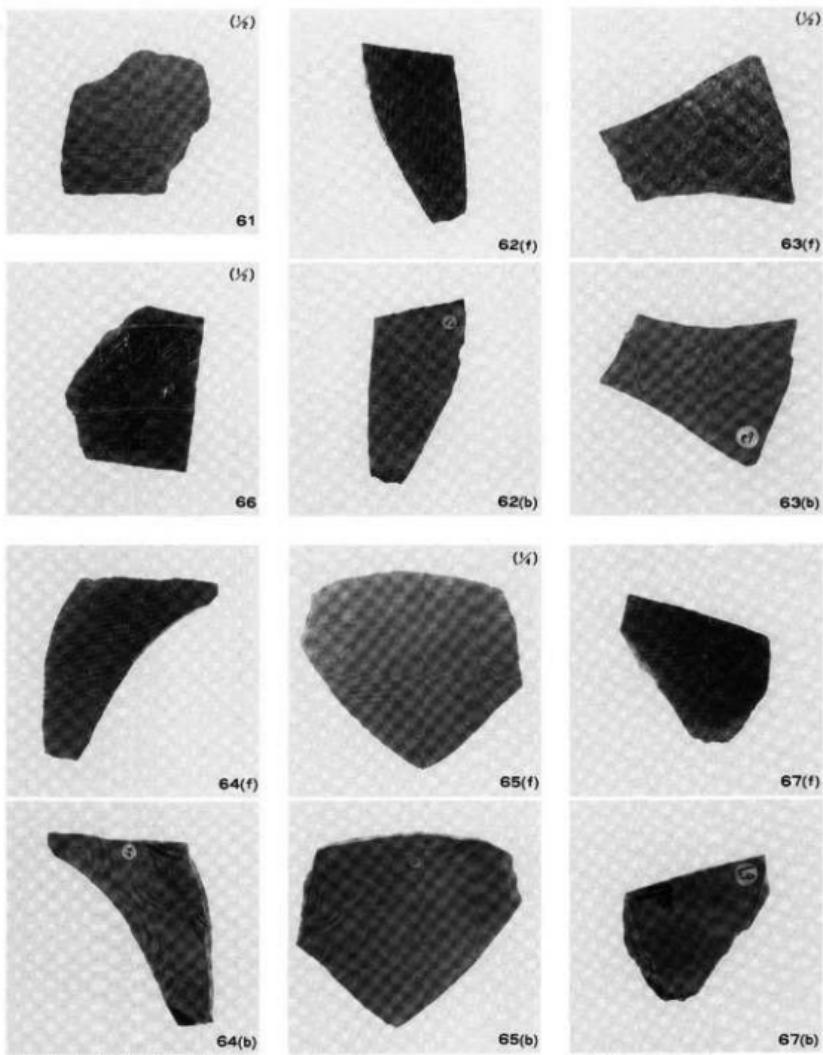
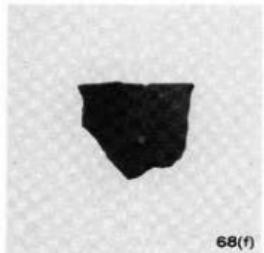


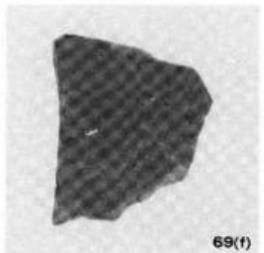
写真15 蛍光X線分析試料写真8

撮影倍率： $\times 5$  (f),  $\times 4$  (b)

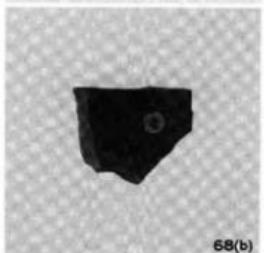
写真15 萤光X線分析試料写真8



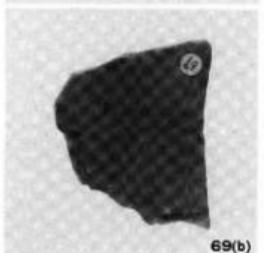
68(f)



69(f)



68(b)



69(b)

写真16 蛍光X線分析試料写真9

撮影倍率： $\times 2$

## VI 総括

今回の調査では、韓式系土器をはじめ、木製武具（刀）、多量のツチノコ、鉄滓、フイゴ羽口、さらに、それより時期的にさかのぼるものとして、織機の部材など、きわめてバラエティに富む遺物が出土した。しかし反面、遺構に関してはそれほど密には検出されておらず、とくに建物関係の遺構については、小規模な柱穴が検出されているにすぎない。今回はそれらの柱穴を掘立柱建物としてグルーピングすることはできなかったが、いずれにせよ建物としてはごく小規模なものしか存在しなかったものと思われる。遺物の多彩さに比して、遺構が貧弱すぎるというこのアンバランスは、今回の調査地の近在に大規模な遺構群（遺跡の中心）の存在を前提としてのみ説明が可能である。そして、それはいうまでもなく昭和57年、権原考古学研究所が検出した遺構群のことを指す（以下「第1次調査」とする）。そのおりの調査は、今回の市教委の調査（以下「第3次調査」とする）に比してはるかに大規模な調査であり、しかも後記するように、きわめて重要な遺構を検出している。したがってここに第3次調査の成果を総括するにあたっては、第1次調査についてはぜひとも触れねばならない問題といえる。なお、第1次調査の成果については、現在のところ『奈良県観光』第318号に若干の報告をみるに止まる<sup>⑩</sup>。したがって、調査担当者の見解も当時とは相当

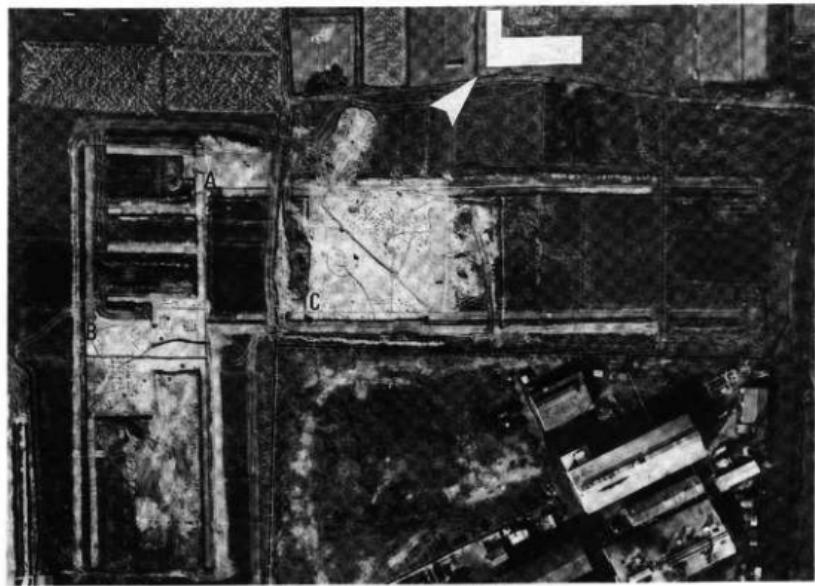


写真17 原田遺跡第1次調査航空写真  
(昭57年11月27日撮影、権原考古学研究所提供の写真を部分的に複写 白抜き矢印が今回の調査地)

異なっているものと思われるが、今回はとりあえず上記報文を参考とする。また、検討に際しては、第3次調査によって得られたデーターを積極的に活用したい。

以下、やや煩瑣となるが、第1次調査についての調査者（以下単に「調査者」と記す際は、第1次調査担当者を指す）の見解等について記す。まず、調査者がSD 8と名付けた遺構について引用する。「…庄内式～布留式頃とみられる溝状遺構（SD 8）が屈折しながらB地区を東西に横切っている。」

ついで、SD 7について引用する。「若干、時期が下って、東西方向に一直線にB地区を横切る溝（SD 7）がある。」調査者はこのSD 7の時期を、そこに包含していた須恵器より5世紀後半としている。また、このSD 7は「掘立柱建物を伴う。」としている。また、このSD 7の北側に並ぶ縦柱構造の建物群のことであろう。しかしながら、これらの建物の時期については、「手がかりが皆無にひどい」という。ただし、さきの「伴う」という表現にもみられるように、調査者はSD 7と上述の建物群との間に有機的な関連を考えており、続けて次のように述べる。「溝（SD 7のこと）の方位と建物の方位が一致することから、（両者は）同時期の遺構と認めうる。」

続いてSD 17について引用する（調査者はここでSD 19という名称も並んで用いているが、具体的にどれがどの遺構を指すのかは不明なので、本稿ではSD 17という名称に統一して述べる）。「この溝（SD 17）は端で直角に折れ曲がり、平面的にはコ字形を呈し、あたかも北半分（C調査区の北半分のこと）をとり囲むような状況にある。」そして、その囲繞の内部には「無数といつてよいほどのピット群が検出され、四棟（SB 7、SB 9など）掘立柱建物が認められた。」なお、ここの建物については「B地区的SB 2、SB 3建物（前出）と同様のもので、倉庫群とそれをとりまく溝といった状況が復元できる。」としている。また、このSD 17の外側については、「『小屋』程度の小規模な建物しか存在しなかった」という。なお、ここでは建物もしくは溝の時期に関する記載がみあたらぬが、全体を通して判断すれば、調査者はそれをおおむね古墳時代前期と考えているようだ。

以上が、第1次調査における調査者の所見である。以下においては、それらの見解について、私（第3次調査担当者。以下、「報告者」）自身の批判的見解を記す。（むろんそれは、調査者そのものに対しての批判ではなく、あくまでも昭和58年当時に執筆された報文についてのcriticismである）。

まず、SD 8（屈曲する溝状遺構）についての報告者の見解を記す。なお、このSD 8については、第2次調査におけるSD-01のデーターが参考になるであろう。調査者はこのSD 8の時期を庄内～布留式期のものとしているが、今回のSD-01については、上～中層に庄内～布留期前葉の土器を包含しており、下層ではそれに弥生土器（IV～V様式）を混在していた。また、同層中からは石鎧やフレイク、あるいは石包丁等の出土もみている。SD 8の調査者による見解は、遺物未整理段階のものなので、同遺構中に弥生土器が含まれるか否かは判然としないが、仮にSD 8と

SD-01を同時期かつ同種の遺構と解すれば、以下のような状況が復元可能である（図54参照）。

当時においては、おそらく弥生時代中期後葉には2ヶ所において環濠（一重）に囲まれた集落が存在していた。そして、その外側には生産域（農地）があった（傍証として第3次調査におけるSK-02, SD-02〔溜め井状遺構〕があげられる。この2つの環濠については、庄内期後葉～布留期前葉にかけて埋没する〔それは数次の洪水による自然埋没である〕）。

ついで、SD17についての見解を記す。これについては、前記したように時期的なデーターは呈示されておらず、想像によるしかないが、第3次調査の出土遺物で考えるならば、それはTK-47型式期よりさかのぼることは難しいようと思われる。まず、SD17内部の建物（調査者のいう「倉庫群」）状況であるが、航空写真を見る限りでは4間×4間の東西棟の大型建物が1棟確認できる。なお、これについては北側に庇が付くものとなる可能性が高いように見受けられる。つまり、決して「小規模な建物」とはいえないよう思われる。また、大型建物の周辺にも同方位を主軸とする建物群が存在するようだが、航空写真では判然としない。なお、第1次調査では溝（SD17）の延長部の調査は実施されているようだが、溝の内側（大型建物の存在する地域）は未調査のようであり、残念である。

以上を結論すれば、ここC地区には6世紀ごろ方形に区画された溝（濠）と、それに囲まれた大型建物群、すなわち居館が存在した可能性が高い。ただし、上記のように居館の主体部は調査されていないようである。したがってその具体的な構造については不明である。なお、第3次調査で出土した韓式系土器、木製武具、多量のツチノコ、鉄滓、フイゴ羽口等の特殊な遺物（いずれも6世紀）は、この「居館（?）」に伴うものと解すればよいと思われる。

ついで、SD7について記す。この遺構を調査者は「5世紀後葉」としている。しかしながらこの溝は条里制に基づくものであって、具体的には添下郡京南七条七里七坪・十二坪の坪界溝である。したがって、これを5世紀後葉とするにはやや無理があろう。また、関連してSD7に近在する総柱建物を、方向の同一性より「ほぼ同時期」としている。すなわちそれは5世紀後葉ということになろう。しかしながら、それは上記したように認め難い。ただ、これら建物が坪界溝と同方向ということは、とりもなおさずそれらが正方向を指向していたことを意味する。また、直接この建物群の時期を知る手がかりが「皆無にひときし」ということは、柱穴もしくは掘り方内より土器などが出土しなかったという意味であろうが、調査者はこれらの建物が正方位を指向している点に留意すべきであったようにも思われる。つまり、これらの建物は後述の理由により、とくにその時期を徹底的に調査する必要があったと思われるからである。

原田遺跡の2km東方に所在する高月遺跡では、7世紀中葉の掘立柱建物（うち5棟は総柱構造）が検出されている<sup>20</sup>。また、それらは多少のばらつき（N0°30'WよりN21°30'まで）はあるにせよ、ほぼ正方位を指向していた。そして、同遺跡の報告者はこれらの建物群を、そのすぐ南側を通っていたと推定される「北の横大路」と関連するものとして考えている。これら横大路などの官道整備

の時期については、文献史学のうえからも7世紀を前後するものと考えられており<sup>①</sup>、この高月遺跡がそれと有機的に関連するということを仮に認めるならば、その時期（7世紀中葉）はやはり重要な意味をもつこととなる。

このように「北の横大路」を念頭におくなれば、この原田遺跡における「正方位の建物」もまた、それと深く関連する遺構としても充分に説得力がある。なぜならば、原田遺跡も、また、高月遺跡と同様に「北の横大路」に接する遺跡だからである。それで、ここではやや強引ながら、これら建物を7世紀のものと仮定してみたい（むろん、溝も含めてこれらを5世紀後葉とすれば、それはそれでセンセーショナルではあるが…）。

以上が、報告者による第1次調査の検出遺構に対する見解である。それでは以下に、本項の要約を記し、報告のまとめとしたい。

- (1) 原田遺跡では、弥生時代中期後葉には環濠（一重）に囲繞された集落が2ヶ所存在している。なお、環濠自体は布留期前葉に埋没している。
- (2) 6世紀においては、方形に区画された溝の内部に居館的施設が存在していた。そのくわしい構造については不明だが、北面する庇付きの東西棟大型建物の存在が認められる。
- (3) 7世紀（？）においては、正方位の建物群（倉庫群）が存在した。これについては、その南を通る北の横大路との関連が注目される。

今回は、原田遺跡のアウトラインを以上のように把握しておく。ただし、第1次調査については、遺構実測図ならびに出土遺物を実見していないので、精確なことは不明である。このことについては、後日そうした機会をもち、場合によっては若干の整理、報告にも協力させて頂きたいと考えている。なお、ここに記した第1次調査の私の見解については、調査者の同意は全く得ていない。このことも含め、調査者に非礼の点が多くあることに対しては、よろしく御寛怒の程をお願いしたい。

#### 〈注〉

- ①伊藤勇輔「法起寺南遺跡」『奈良県観光』No.318 奈良県観光新聞社・1983
- ②山川均『高月遺跡発掘調査報告書』大和郡市教育委員会・1991
- ③岸俊男「大和の古道」『日本文化論叢』奈良県立橿原考古学研究所・1970

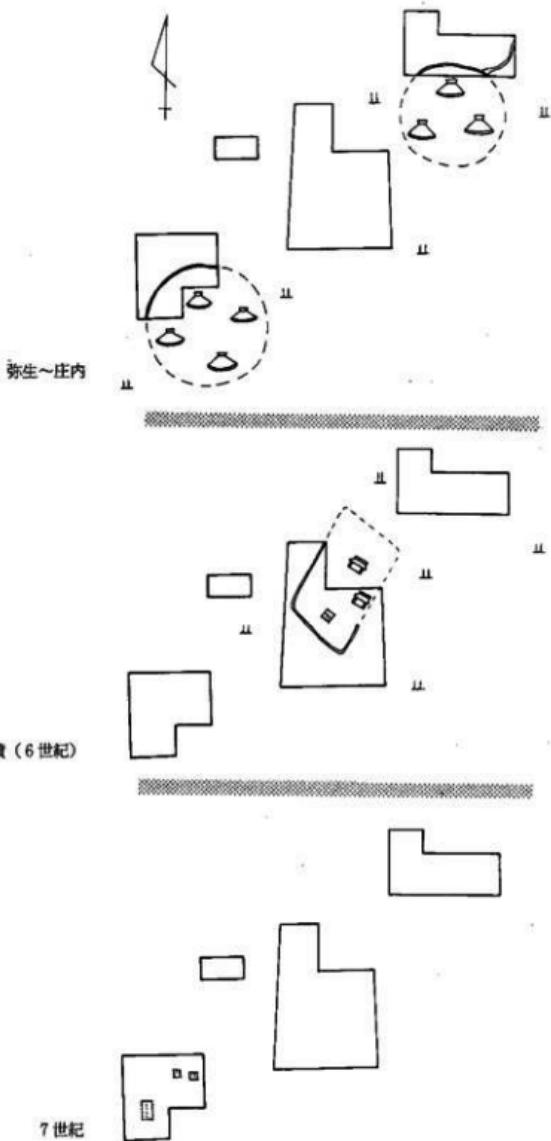


図54 各期における原田遺跡の変遷概念図

## あとがき

今回の調査は、VI章にも記した通り、遺跡のいわば縁辺部の発掘だったので、調査の成果自体はさほど大きいものとはいえないかもしれない。しかしながら、出土遺物は比較的多彩なので、各々の研究上、何らかの形での活用を期待したい。また、報告自体に関しても不備等多々見受けられることと思うが、それに関しては多くのご指導を賜りたい。

なお、本文中でもたびたび触れた第1次調査に関しては、調査担当者の許可を得たうえで、近日中に何らかの形で再整理を試みてみたいとも考えている（今回は、当時の調査担当者が、現在行政上の激務についておられるため遠慮させて頂いた）。そうした意味では、遺跡自体の本格的な検討は、本書の発刊によってようやく緒に付いたというべきだろうか。

本報告書作成にあたり、下記の各々より貴重なご教示を得ました。末尾となり恐縮ですが、記して感謝いたします（順不同、敬称略）。

奈良県立橿原考古学研究所	寺 沢 薫
同	関 川 尚 功
同	木 下 巨
田原本町教育委員会	藤 田 三 郎
東大阪市立郷土博物館	酒 野 晶 子
奈 良 大 学	酒 井 龍 一
同	泉 拓 良

## SD-01 最上層出土土器觀察表 (4) 土器の型式分類については寺沢(1986)による。以下同様。

No.	器種	計測値 (cm)	備考	地質 石炭チル片岩	地質 也	地質 岩
1	盆	□:18.6 (底) □:16.1 (口) 高:4.8	○口縁クロロナフ天:ヘタケガリ (1)シロナフ ○口縁クロロナフ底:ロクヨウナフ (1)ロクヨウナフ ○口縁クロロナフ底:ロクヨウナフ (1)ロクヨウナフ	明灰岩	30	(1)ミンシブ灰
2	瓶	口:1.8 (口) 高:4.3 大:14.3	○口縁クロロナフ底:ロクヨウナフ (1)ロクヨウナフ	明灰岩	70	(1)ミンシブ灰
3	瓶	口:1.0 (口) 高:4.5 大:12.0 (底)	○口縁クロロナフ底:ロクヨウナフ (1)ロクヨウナフ	明灰岩	70	(1)ミンシブ灰
4	瓶	口:1.0 (口) 高:5.0 大:15.9 (底)	○口縁クロロナフ底:ロクヨウナフ (1)ロクヨウナフ	明灰岩	40	(1)ミンシブ灰
5	瓶	口:1.9 (口) 高:4.5 大:14.0 (底)	○口縁クロロナフ底:ロクヨウナフ (1)ロクヨウナフ ○口縁クロロナフ底:ロクヨウナフ (1)ロクヨウナフ	明灰岩	30	(1)ミンシブ灰
6	瓶	口:1.5 (口) 高:5.6 大:14.0 (底)	○口縁クロロナフ底:ロクヨウナフ (1)ロクヨウナフ ○口縁クロロナフ底:ロクヨウナフ (1)ロクヨウナフ	明灰岩	40	(1)ミンシブ灰
7	瓶	口:1.3 (口) 高:5.0 大:16.6 (底)	○口縁クロロナフ底:ロクヨウナフ (1)ロクヨウナフ ○口縁クロロナフ底:ロクヨウナフ (1)ロクヨウナフ	明灰岩	70	(1)ミンシブ灰
8	瓶	大:6.6	○口縁クロロナフ底:ロクヨウナフ (1)ロクヨウナフ	明灰岩	70	(1)ミンシブ灰
9	罐	□:19.0 (底)	○口縁クロロナフ底:ロクヨウナフ (1)ロクヨウナフ	明灰岩	70	(1)ミンシブ灰
10	罐	口:1.8 (口) 高:15.6 (底)	○口縁クロロナフ底:ロクヨウナフ (1)ロクヨウナフ	明灰岩	70	(1)ミンシブ灰
11	土器	二重口縁B-A □:14.7 (底)	○口縁クロロナフ底:ロクヨウナフ (1)ロクヨウナフ	明灰岩	70	(1)ミンシブ灰
12	土器	二重口縁B-C-c □:14.7 (底)	○口縁クロロナフ底:ロクヨウナフ (1)ロクヨウナフ	明灰岩	70	(1)ミンシブ灰
13	土器	底:4.0	○口縁クロロナフ底:ロクヨウナフ (1)ロクヨウナフ	明灰岩	70	(1)ミンシブ灰
14	土器	底:4.8	○口縁クロロナフ底:ロクヨウナフ (1)ロクヨウナフ	明灰岩	70	(1)ミンシブ灰
15	土器	底:3.6	○口縁クロロナフ底:ロクヨウナフ (1)ロクヨウナフ	明灰岩	70	(1)ミンシブ灰
16	土器	底:4.7	○口縁クロロナフ底:ロクヨウナフ (1)ロクヨウナフ	明灰岩	70	(1)ミンシブ灰
17	土器	底:4.7	○口縁クロロナフ底:ロクヨウナフ (1)ロクヨウナフ	明灰岩	70	(1)ミンシブ灰
18	土器	底:3.8	○口縁クロロナフ底:ロクヨウナフ (1)ロクヨウナフ	明灰岩	70	(1)ミンシブ灰
19	土器	底:3.4	○口縁クロロナフ底:ロクヨウナフ (1)ロクヨウナフ	明灰岩	70	(1)ミンシブ灰
20	土器	底:3.6	○口縁クロロナフ底:ロクヨウナフ (1)ロクヨウナフ	明灰岩	70	(1)ミンシブ灰
21	土器	底:3.4	○口縁クロロナフ底:ロクヨウナフ (1)ロクヨウナフ	明灰岩	70	(1)ミンシブ灰
22	土器	底:3.3	○口縁クロロナフ底:ロクヨウナフ (1)ロクヨウナフ	明灰岩	70	(1)ミンシブ灰

## SD-01 上・中・下層出土土器觀察表

No.	器種	計測値 (cm)	備考	地質 岩	地質 也	地質 灰
23	土器	口:15.6 (底) B5-1-3 □:24.4 (底)	○口縁ナフ (1)ナフ	明灰岩	70	(1)ミンシブ灰
24	土器	口:15.6 (底) B5-1-B-c □:14.6 (底)	○口縁ナフ (1)ナフ	明灰岩	70	(1)ミンシブ灰
25	土器	底:3.3	○口縁ナフ (1)ナフ	明灰岩	70	(1)ミンシブ灰
26	土器	底:3.3	○口縁ナフ (1)ナフ	明灰岩	70	(1)ミンシブ灰
27	土器	底:3.4	○口縁ナフ (1)ナフ	明灰岩	70	(1)ミンシブ灰
28	土器	底:4.0	○口縁ナフ (1)ナフ	明灰岩	70	(1)ミンシブ灰
29	土器	底:3.4 (底)	○口縁ナフ (1)ナフ	明灰岩	70	(1)ミンシブ灰
30	土器	底:4.0	○口縁ナフ (1)ナフ	明灰岩	70	(1)ミンシブ灰
31	土器	底:3.6	○口縁ナフ (1)ナフ	明灰岩	70	(1)ミンシブ灰
32	土器	底:3.6	○口縁ナフ (1)ナフ	明灰岩	70	(1)ミンシブ灰
33	土器	底:3.6	○口縁ナフ (1)ナフ	明灰岩	70	(1)ミンシブ灰
34	土器	底:3.6	○口縁ナフ (1)ナフ	明灰岩	70	(1)ミンシブ灰
35	土器	底:4.9	○口縁ナフ (1)ナフ	明灰岩	70	(1)ミンシブ灰
36	土器	底:3.3	○口縁ナフ (1)ナフ	明灰岩	70	(1)ミンシブ灰
37	土器	底:5.9	○口縁ナフ (1)ナフ	明灰岩	70	(1)ミンシブ灰

○多く含まれる ○含まれる × 一例のみでは無限でない

石(石英) 長(長石) チ(チャート) 細(赤玉岩) 角(角閃石) 露(露岩)

## SD-01 上・中・下層出土器觀察表

No.	器種	計測値 (cm)	備註	地質	土系	鉄物質	色調	種類	参考
38+	漆器 3-A-5	径:32	(0)テラ (1.7cm)	○口×(1.7cm) 頂打掛 (1.7cm) (10.0cm)	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	赤褐色	漆器	
39+	漆器 1-B-b	径:45	(0)テラ (1.7cm)	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	赤褐色	漆器	
40+	漆器 3-C-b	径:44	(0)テラ (1.7cm)	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	赤褐色	漆器	
SD-03 出土上器觀察表									
41	竹箆	口:138 高:4.3	○口~体 (0)テラ (1.7cm) (1.7cm) 天:ナダ	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	明灰	100	織式 (織目) 天手持ちヘラヘスリ
42	漆 箕	口:15.0 高:4.1	○口~体 (0)テラ (1.7cm) (1.7cm) 天:ナダ	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	明灰	50	
43	漆 箕	口:13.2 高:4.9 大:15.0	○口~体 (0)テラ (1.7cm) (1.7cm) 天:ナダ	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	明灰	70	
44	漆 箕	口:13.2 高:4.9 大:15.0	○口~体 (0)テラ (1.7cm) (1.7cm) 天:ナダ	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	明灰	100	
45	漆 箕	口:14.7 高:4.1	○口~体 (0)テラ (1.7cm) (1.7cm) 天:ナダ	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	明灰	100	
46	漆 箕	口:14.4 高:4.4	○口~体 (0)テラ (1.7cm) (1.7cm) 天:ナダ	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	明灰	100	
47	漆 箕	口:16.4 (高) 高:4.2	○口~体 (0)テラ (1.7cm) (1.7cm) 天:ナダ	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	明灰	40	16灰:→記号有 目録解説
48	漆 箕	口:12.4 (高) 高:4.0 大:14.6 (高)	○口~体 (0)テラ (1.7cm) (1.7cm) 天:ナダ	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	明灰	30	
49	漆 箕	口:12.2 高:4.1 大:14.6	○口~体 (0)テラ (1.7cm) (1.7cm) 天:ナダ	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	明灰	100	
50	漆 箕 (漆片)	口:14.2 (高) 高:3.8 大:16.4 (高)	○口~体 (0)テラ (1.7cm) (1.7cm) 天:ナダ	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	明灰	30	輪台型 波状文 方形通孔 有
51	漆 箕	口:13.7 高:4.0	○口~体 (0)テラ (1.7cm) (1.7cm) 天:ナダ	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	明灰	100	万形 1面通孔 3方角
52	土 箕 (漆器) 匙	口:13.2 (高) 高:4.0 大:13.5 (高)	○口~体 (0)テラ (1.7cm) (1.7cm) 天:ナダ	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	明灰	100	
53	土 箕 (漆器) 匙 I	口:12.6 (高)	○口~体 (0)テラ (1.7cm) (1.7cm) 天:ナダ	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	明灰	100	
54	土 箕 (漆器) 匙 I-A	高:3.8	○口~体 (0)テラ (1.7cm) (1.7cm) 天:ナダ	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	明灰	100	
55	土 箕	口:13.0 高:4.0	○口~体 (0)テラ (1.7cm) (1.7cm) 天:ナダ	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	明灰	100	
56	高环 (6mm) B6--b	口:22.2	○口~体 (0)テラ (1.7cm) (1.7cm) 天:ナダ	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	明灰	100	
57	土 高环 (6mm) I-A-b	高:16.8 (高)	○口~体 (0)テラ (1.7cm) (1.7cm) 天:ナダ	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	明灰	100	
58	土 高环	口:3-A-b	○口~体 (0)テラ (1.7cm) (1.7cm) 天:ナダ	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	明灰	100	
59	土 针	口:16.0	○口~体 (0)テラ (1.7cm) (1.7cm) 天:ナダ	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	明灰	100	
60	土 二面刀削 N-A-2-	口:14.0 (高)	○口~体 (0)テラ (1.7cm) (1.7cm) 天:ナダ	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	明灰	100	
61	土 口接管 H-D-a	口:14.0 (高)	○口~体 (0)テラ (1.7cm) (1.7cm) 天:ナダ	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	明灰	100	

## SK-06 出土土器觀察表

No.	器種	計測値 (cm)	備註	地質	土系	鉄物質	色調	種類	参考
66	漆 箕	口:13.1 高:3.7	○口~体 (0)テラ (1.7cm) (1.7cm) 天:ナダ	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	明灰	96	
67	漆 箕	口:12.2 高:4.1 大:14.6	○口~体 (0)テラ (1.7cm) (1.7cm) 天:ナダ	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	明灰	100	
68	漆 箕	口:13.0 高:5.0 大:14.6	○口~体 (0)テラ (1.7cm) (1.7cm) 天:ナダ	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	明灰	100	
69	漆 箕	口:10.5 高:10.0 大:9.4	○口~体 (0)テラ (1.7cm) (1.7cm) 天:ナダ	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	明灰	96	織式 (織目)
70	漆 箕 A	口:10.0	○口~体 (0)テラ (1.7cm) (1.7cm) 天:ナダ	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	明灰	100	
71	漆 箕 A	口:10.2 高:9.1 大:5.2	○口~体 (0)テラ (1.7cm) (1.7cm) 天:ナダ	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	明灰	100	
72	漆 箕	口:10.8 高:13.2 大:12.1	○口~体 (0)テラ (1.7cm) (1.7cm) 天:ナダ	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	明灰	20	
73	漆 箕	口:14.0 (高)	○口~体 (0)テラ (1.7cm) (1.7cm) 天:ナダ	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	灰青	20	
74	漆 箕	口:12.0 (高) 大:14.2 (高)	○口~体 (0)テラ (1.7cm) (1.7cm) 天:ナダ	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	灰青	20	
75	漆 箕	口:21.5 (高)	○口~体 (0)テラ (1.7cm) (1.7cm) 天:ナダ	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	灰青	20	
76	漆 手付器	口:23.0 高:24.4 大:36.5 (把手)	○口~体 (0)テラ (1.7cm) (1.7cm) 天:ナダ	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	灰青	80	把手:黑色有

表13 出土遺物觀察表2

## SK-08 出土土器觀察表

No.	器種	計測値 (cm)	測量	備考
77 漆 長筒瓶	大: 16.0	0.5×1.0×1.0 (cm)	11ロコロナダ 体: ロコロナダ 底: ロコロナダ (11ロコロナダ)	輪台付 (10体) 異点文有
78 漆 杯盤	口: 10.6 高: 4.3 大: 12.3	0.5×1.0×1.0 (cm)	11ロコロナダ 体: ロコロナダ 底: 頂盤壁 (11ロコロナダ)	70 [10]一部壊れ有
79 土 茶付碗	口: 5.3 高: 9.2	0.5×1.0×1.0 (cm)	11ロコロナダ	90

## SX-01 出土土器觀察表

No.	器種	計測値 (cm)	測量	備考
80 土 杯盤	口: 13.5 高: 3.5	0.5×1.0×1.0 (cm)	11ロコロナダ 体: ロコロナダ 底: ロコロナダ (11ロコロナダ)	輪台付
81 土 杯身	口: 13.5 (底) 高: 4.9	0.5×1.0×1.0 (cm)	11ロコロナダ 体: ロコロナダ 底: ロコロナダ (11ロコロナダ)	輪台付
82 土 杯身	口: 13.5 (底) 高: 4.9	0.5×1.0×1.0 (cm)	11ロコロナダ 体: ロコロナダ 底: ロコロナダ (11ロコロナダ)	輪台付
83 土 杯身	口: 13.5 (底) 高: 4.9	0.5×1.0×1.0 (cm)	11ロコロナダ 体: ロコロナダ 底: ロコロナダ (11ロコロナダ)	輪台付

## SX-02 出土土器觀察表

No.	器種	計測値 (cm)	測量	備考
84 土 杯身	口: 13.0 高: 4.9 大: 16.5	0.5×1.0×1.0 (cm)	11ロコロナダ 体: ロコロナダ 底: ロコロナダ (11ロコロナダ)	輪台付
85 土 杯身	口: 13.5 高: 4.5 大: 14.6	0.5×1.0×1.0 (cm)	11ロコロナダ 体: ロコロナダ 底: ロコロナダ (11ロコロナダ)	輪台付
86 土 杯身	口: 13.7 (底) 高: 9.3 壁: 9.0 (底)	0.5×1.0×1.0 (cm)	11ロコロナダ 体: ロコロナダ 底: ロコロナダ (11ロコロナダ)	輪台付 方形孔 3方向
87 土 杯身	口: 13.5 (底) 高: 9.5 壁: 7.2 (底)	0.5×1.0×1.0 (cm)	11ロコロナダ 体: ロコロナダ 底: ロコロナダ (11ロコロナダ)	輪台付 方形孔 3方向
88 土 杯身	口: 13.6 高: 9.5 壁: 7.2 (底)	0.5×1.0×1.0 (cm)	11ロコロナダ 体: ロコロナダ 底: ロコロナダ (11ロコロナダ)	輪台付 方形孔 3方向
89 土 杯身 (外底)	口: 14.6	0.5×1.0×1.0 (cm)	11ロコロナダ 体: ロコロナダ 底: ロコロナダ (11ロコロナダ)	輪台付

## SD-02 (SK-02) 出土土器觀察表

No.	器種	計測値 (cm)	測量	備考
90 土 瓦SY?	口: 12.5 (底)	0.5×1.0×1.0 (cm)	11ロコロナダ 体: ロコロナダ 底: ロコロナダ (11ロコロナダ)	輪台付
91 土 仄口壺	口: 9.5 (底)	0.5×1.0×1.0 (cm)	11ロコロナダ 体: ロコロナダ 底: ロコロナダ (11ロコロナダ)	輪台付
92 土 有孔杯	口: 3.4	0.5×1.0×1.0 (cm)	11ロコロナダ 体: ロコロナダ 底: ロコロナダ (11ロコロナダ)	穿孔 3方向
93 土 二重口壺身	口: 0.2	0.5×1.0×1.0 (cm)	11ロコロナダ 体: ロコロナダ 底: ロコロナダ (11ロコロナダ)	穿孔 3方向
94 土 小形丸底身	口: 1.0 (底)	0.5×1.0×1.0 (cm)	11ロコロナダ 体: ロコロナダ 底: ロコロナダ (11ロコロナダ)	穿孔 3方向
95 土 小形丸底身	口: 1.0 (底)	0.5×1.0×1.0 (cm)	11ロコロナダ 体: ロコロナダ 底: ロコロナダ (11ロコロナダ)	穿孔 3方向

## SK-05 出土土器觀察表

No.	器種	計測値 (cm)	測量	備考
96 土 小形丸底身	口: C-3-C	0.5×1.0×1.0 (cm)	11ロコロナダ 体: ロコロナダ 底: ロコロナダ (11ロコロナダ)	輪台付
97 土 小形丸底身	A-3-a	0.5×1.0×1.0 (cm)	11ロコロナダ 体: ロコロナダ 底: ロコロナダ (11ロコロナダ)	輪台付
98 土 茶	口: 8.6 (底)	0.5×1.0×1.0 (cm)	11ロコロナダ 体: ロコロナダ 底: ロコロナダ (11ロコロナダ)	輪台付
99 土 小形丸底身	C-2-b	0.5×1.0×1.0 (cm)	11ロコロナダ 体: ロコロナダ 底: ロコロナダ (11ロコロナダ)	輪台付
100 土 小形丸底身	A-1-a	0.5×1.0 (底)	11ロコロナダ 体: ロコロナダ 底: ロコロナダ (11ロコロナダ)	輪台付
101 土 仄底身	1-b	0.5×1.0 (底)	11ロコロナダ 体: ロコロナダ 底: ロコロナダ (11ロコロナダ)	輪台付
102 土 仄底身	...-b	0.5×1.0 (底)	11ロコロナダ 体: ロコロナダ 底: ロコロナダ (11ロコロナダ)	輪台付
103 土 仄底身	N-A-b	0.5×1.0 (底)	11ロコロナダ 体: ロコロナダ 底: ロコロナダ (11ロコロナダ)	輪台付
104 土 二重口壺身	N-E-	0.5×1.0 (底)	11ロコロナダ 体: ロコロナダ 底: ロコロナダ (11ロコロナダ)	輪台付
105 土 二重口壺身	E-	0.5×1.0 (底)	11ロコロナダ 体: ロコロナダ 底: ロコロナダ (11ロコロナダ)	輪台付

表14 出土遺物觀察表3

その他の遺構出土土器観察表

No.	器種	計測値 (cm)	火	焼	粘土質	色	模様	参考
106 頭杯(手取)	口:3.0(底)	(0)~(1) 深さ:1.5(底)	(1)クロコテ	(0)~(1) 深さ:1.5(底)	明灰	白灰	火痕無	SD-04
107 頭杯	口:3.5(底)	(0)~(1) 深さ:1.5(底)	(1)クロコテ	(0)~(1) 深さ:1.5(底)	明灰	白灰	火痕無	SD-04
108 頭 簋合(縁片)	口:4.0(底)	(0)~(1) 深さ:1.5(底)	(1)クロコテ	(0)~(1) 深さ:1.5(底)	明灰	白灰	火痕無	SD-05
109 頭 瓢子	口:4.5(底)	(0)~(1) 深さ:1.5(底)	(1)クロコテ	(0)~(1) 深さ:1.5(底)	明灰	白灰	火痕無	SD-05
110 土 壺	口:4.0(底)	(0)~(1) 深さ:1.5(底)	(1)クロコテ	(0)~(1) 深さ:1.5(底)	明灰	白灰	火痕無	P-19
111 土 壺	口:4.0(底)	(0)~(1) 深さ:1.5(底)	(1)クロコテ	(0)~(1) 深さ:1.5(底)	明灰	白灰	火痕無	SK-03
112 土 壺	口:3.5(底)	(0)~(1) 深さ:1.5(底)	(1)クロコテ	(0)~(1) 深さ:1.5(底)	明灰	白灰	火痕無	SK-03
113 土 茶碗	口:4.3(底)	(0)~(1) 深さ:1.5(底)	(1)クロコテ	(0)~(1) 深さ:1.5(底)	明灰	白灰	火痕無	SD-07

繩紋土器観察表

1 浅鉢	1:6.3 W:6.5	口輪稍文、以下垂下端	○○×○○○○○○	斜面
2 浅鉢	1:5.7 W:6.9	口垂下端	○○○○○○○○○○	斜面
3 浅鉢	1:5.5 W:6.9	口垂下端、以下垂下端	○○○○○○○○○○	斜面
4 不明	1:3.1 W:2.5	多条立縫	○○○○○○○○○○	斜面
5 浅G鉢	1:8.3 W:6.5	無	○○○○○○○○○○	斜面
6 浅G鉢	1:8.6 W:6.5	無	○○○○○○○○○○	斜面
7 不明	底:7.0(底)	無	○○○○○○○○○○	斜面
8 不明	1:6.5 W:5.0	無	○○○○○○○○○○	斜面
9 不明	底:12.0	無	○○○○○○○○○○	斜面
10 不明	1:4.4 W:3.6 深:4.3	無	○○○○○○○○○○	斜面
11 不明	1:4.4 W:4.3	無	○○○○○○○○○○	斜面

木製品計測表

番号	出土地	地	幅	厚	長 (cm)	幅 (cm)	厚	長 (cm)	参考
M-1	SD-01 第4区 下層	圓筒(ラビド型)	長:37.6 幅:15.9 厚:(上)1.6 (下)1.0	コナラ	コナラ	カガシ	厚	30	コナラ
M-2	SK-06 4層	用達木棒	長:16.8 幅:2.3 厚:0.3	ヒノキ	ヒノキ	ヒノキ	厚	30	ヒノキ
M-3	SK-06 4層	用達木棒	長:20.4 幅:2.3 厚:0.3	ヒノキ	ヒノキ	ヒノキ	厚	30	ヒノキ
M-4	SK-06 3層	用達木棒	長:27.0 幅:2.0 厚:0.3	ヒノキ	ヒノキ	ヒノキ	厚	30	ヒノキ
M-5	SK-06	用達木棒	長:35.3 幅:2.3 厚:0.3	ヒノキ	ヒノキ	ヒノキ	厚	30	ヒノキ
M-6	SI-06 3層	-	木刀	コナラ	コナラ	カガシ	厚	30	コナラ
M-7	SK-06 3層	-	長:33.1 幅:6.5 厚:7.1	コナラ	コナラ	カガシ	厚	30	コナラ
M-8	SK-06 4層	ソチノコ	長:19.2 幅:(上)4.7 (中)2.4 (下)5.3	エゾノキ	エゾノキ	木	厚	30	エゾノキ
M-9	SK-06 4層	ソチノコ	長:18.2 幅:(上)5.0 (中)2.5 (下)4.8	エゾノキ	エゾノキ	木	厚	30	エゾノキ
M-10	SK-06 4層	ソチノコ	長:16.7 幅:(上)5.3 (中)2.4 (下)4.9	エゾノキ	エゾノキ	木	厚	30	エゾノキ
M-11	SK-06 4層	ソチノコ	長:17.1 幅:(上)4.7 (中)2.3 (下)4.8	エゾノキ	エゾノキ	木	厚	30	エゾノキ
M-12	SK-06 4層	ソチノコ	長:16.6 幅:(上)5.1 (中)2.5 (下)5.1	エゾノキ	エゾノキ	木	厚	30	エゾノキ
M-13	SK-06 4層	ソチノコ	長:17.0 幅:(上)5.8 (中)2.3 (下)4.7	エゾノキ	エゾノキ	木	厚	30	エゾノキ
M-14	SK-06 4層	ソチノコ	長:16.6 幅:(上)5.8 (中)2.4 (下)4.6	エゾノキ	エゾノキ	木	厚	30	エゾノキ
M-15	SK-06 4層	ソチノコ	長:16.5 幅:(上)5.2 (中)2.0 (下)4.5	エゾノキ	エゾノキ	木	厚	30	エゾノキ
M-16	SI-06 4層	ソチノコ	長:17.2 幅:(上)5.0 (中)1.9 (下)4.8	エゾノキ	エゾノキ	木	厚	30	エゾノキ
M-17	SK-06 3層	ソチノコ	長:16.8 幅:(上)5.4 (中)2.5 (下)4.6	エゾノキ	エゾノキ	木	厚	30	エゾノキ

## 木製品計測表

番号	出 土 地	種 類	寸 寸 寸	長:(mm)	幅:(mm)	厚:(mm)	材 質	備 考
M-18	SK-06 4層	ツチノコ	ツチノコ	長:18.1 幅:(上)7.7 (中)2.6 (下)4.8			エゾクイノコ	
M-19	SK-06 4層	ツチノコ	ツチノコ	長:17.1 幅:(上)7.7 (中)2.3 (下)4.5			エゾクイノコ	
M-20	SK-06 3層 4層	ツチノコ	ツチノコ	長:16.5 幅:(上)7.2 (中)2.6 (下)7.9			ツチノコ	
M-21	SK-05	鳥貝(ツバキ)	鳥貝(ツバキ)	長:21.5(底) 幅:7.7 厚:(上)1.4 (下)1.3			コナラアカガシ雲斑	
M-22	SK-05 2層	鳥貝(木製)	鳥貝(木製)	長:16.0 幅:3.4 厚:1.2			松乳材	
M-23	SK-05 2層	用通小頭柄	用通小頭柄	長:11.5(底) 幅:3.5 厚:2.5			モミ	一面炭化
M-24	SK-05	用通小頭柄	用通小頭柄	長:13.9(底) 幅:3.4 厚:1.9			サカナ	
M-25	SK-05 2層	鍛錠頭	鍛錠頭	長:25.6 幅:2.2 厚:2.0			スギ	
M-26	SK-05 2層	鍛錠頭	鍛錠頭	長:26.2 幅:2.2 厚:1.8			スギ	
M-27	SK-05	用途不明柄	用途不明柄	長:35.6(底) 幅:2.8 厚:1.7			ヒノキ	3つ孔有
M-28	SK-05	用途不明柄	用途不明柄	長:37.0(底) 幅:3.6(上)3.4(中)1.45(下)1.45(底)1.7 厚:(上)2.3 (中)1.8 (下)2.0			ヒノキ	2つ孔有
M-29	SK-05	道具	道具	長:45.2 幅:1.7 厚:1.2			コナラアカガシ雲斑	
M-30	SK-05	用途不明柄	用途不明柄	長:45.6 幅:3.0 厚:0.75			コナラアカガシ雲斑	
M-31	SK-05	用途不明柄	用途不明柄	長:45.2 幅:1.43 厚:2.1			ヒノキ	1つ孔有
M-32	SK-05	用途不明柄	用途不明柄	長:45.9 幅:1.52 (下)1.11 厚:0.56			ヒノキ	
M-33	SK-05	用途不明柄	用途不明柄	長:47.0(底) 幅:3.3(底) 厚:1.0			ヒノキ	

## 石器計測表

番号	出 土 地	地	形 式	石 材	長 (mm)	幅 (mm)	高 度 (mm)	備 考
S-1	21裏御陵区	包合層	凸形有茎式石斧	鷹石安山岩	42.8	25.1	7.2	
S-2	SD-02 2層		凹基無茎式石斧	鷹石安山岩	19.8	16.3		
S-3	IT 包合層		凹基式石斧	鷹石安山岩	25.0	16.7		
S-4	SD-02 2層		石刀	鷹石安山岩	23.0	16.4		未成品
S-5	H-8 S-T		凹基無茎式石斧	鷹石安山岩	16.3	16.0		
S-6	17裏御陵区 SD-01南側述面層		柳葉式石斧	鷹石安山岩	29.7	26.0	11.8	
S-7	SD-01 4.5区向アゼ		柳葉式石斧	鷹石安山岩	32.8	53.0	9.4	細部調整をもつ
S-8	SD-01 9区中層		柳葉式石斧	鷹石安山岩	86.9	53.5	11.7	細部調整をもつ
S-9	SD-01 9区下層		柳葉式石斧	鷹石安山岩	60.0	64.2	11.1	
S-10	SD-01 9区上層		抉入式石器	鷹石安山岩	73.3	34.0	12.2	
S-11	6区 3区(中層)		鋸切片状	鷹石片岩	78.0	41.0	7.0	
S-12	SD-01 7区上層		磨擦石斧	鷹石片岩	36.0(底)	33.0(底)	20.0(底)	

## 石製品計測表(単位:mm)

番号	出 土 地	地	形 式	材 料	長 (mm)	幅 (mm)	高 度 (mm)	備 考
C-1	8区	包合層(4層)	小玉	滑石 ガラス	3.5	1.7	1.7	
C-2	3T 包合層(4層)				1.7	6.1		

## 土製品計測表(単位:mm)

番号	出 土 地	地	形 式	材 料	長 (mm)	幅 (mm)	高 度 (mm)	備 考
T-1	SD-01 8-1		7.43		149	5.7	1.7	
T-2	SD-01 8-1		7.43		171	6.1		
T-3	SD-01 3区才子1		7.43		35	3.6		
T-4	SD-01 9区最上層		不規		49	3.0	0.6	

土製品計測表 (単位mm)

番号	出	土	地	層	電	財	質	長	幅	厚	備	考
7-5	SD=01	9区上層			不明							

鐵製品計測表 (単位mm)

I-1	SD=02	2層		不明				長: 83.7	幅: 29.2	厚: 5.0		
I-2	SD=02	2層		不明				長: 30.0	幅: 20.2	厚: 3.0		
I-3	SD=02	2層		新霞光長鏡				長: 144.3	幅: 11.8	厚: 5.5	厚: 3.5	

<参考文>

「尖頭鑿」

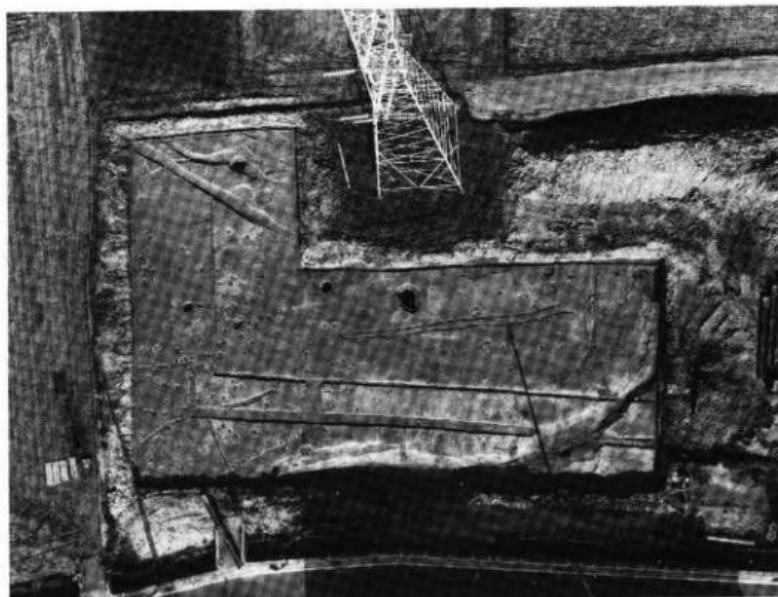
年代：漢

表17 出土遺物觀察表 6

# 図版



1. 原田遺跡と周辺の地形（南上空より。矢印は今回の調査地）



2. 造構完掘状況（真上空より。上が北）



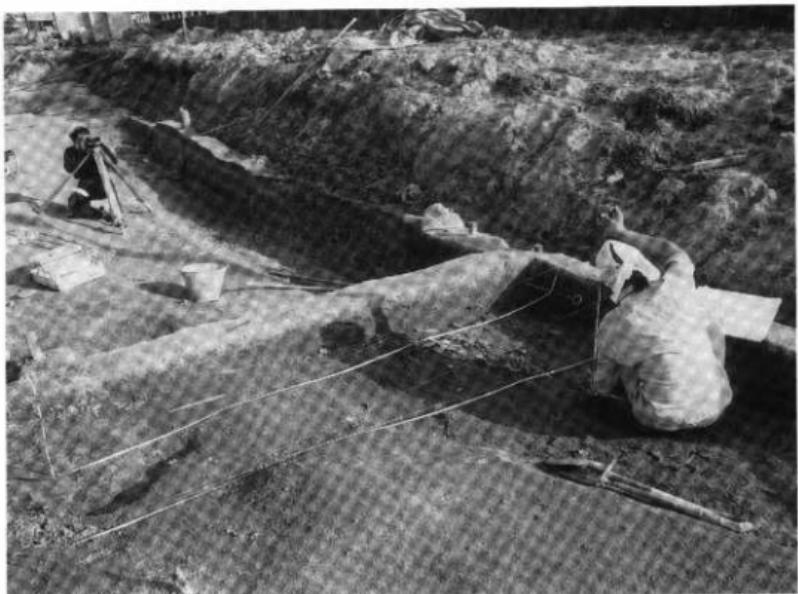
1. 造構完掘状況（北西より。手前は SD-02、SD-03）



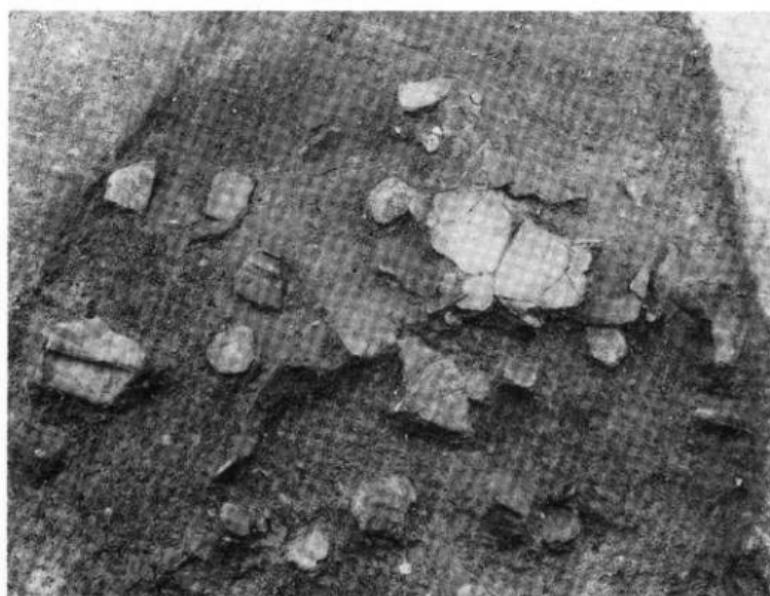
2. 同上（東より。手前は SD-01）



1. 調査風景 (SD-03)



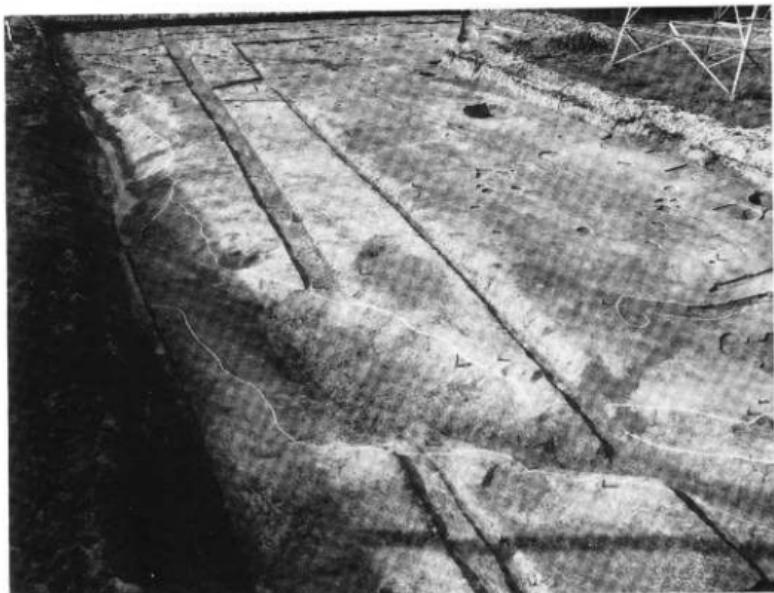
2. 同上 (SD-01)



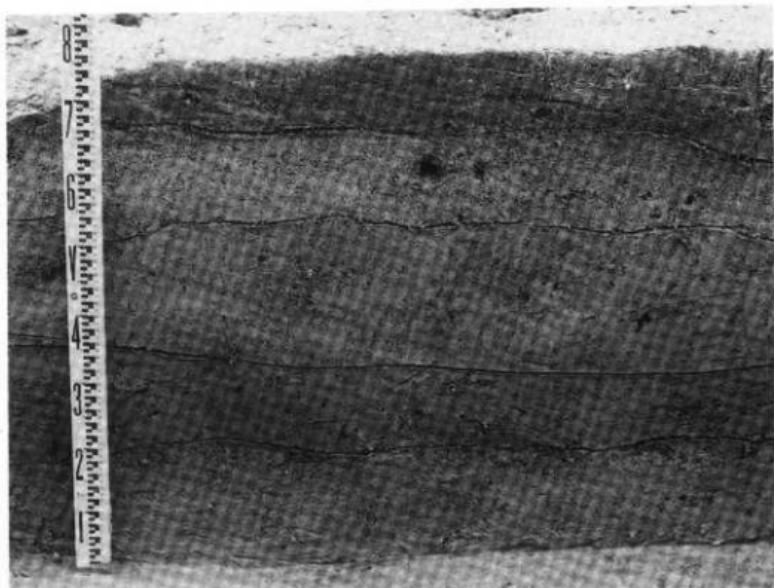
1. SD-01 最上層遺物出土状況（韓式系土器、東より）



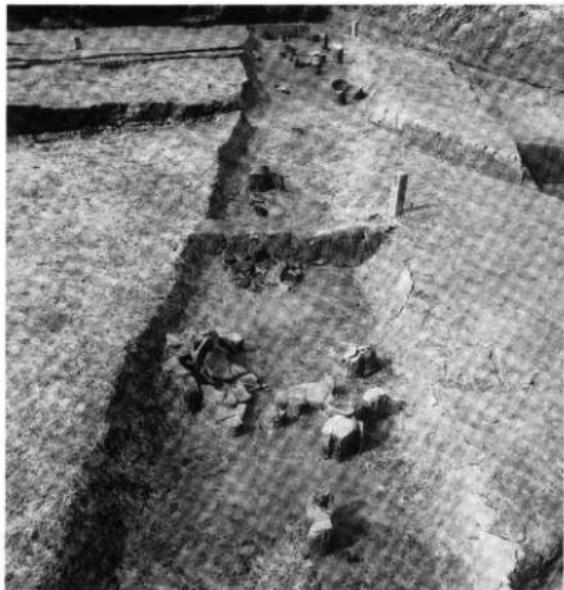
2. 同上 中層木製品出土状況（南より）



1. SD-01 完掘状況（東より）



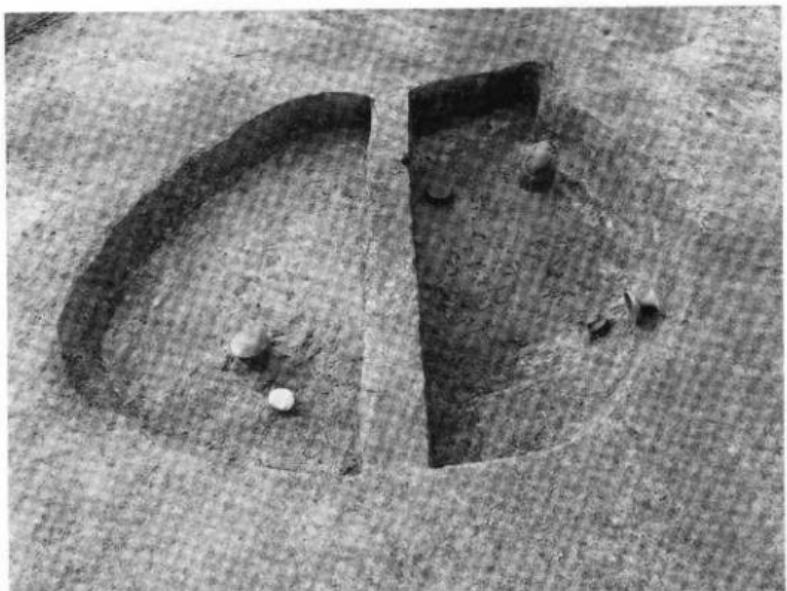
2. 同上 層序（縦断面）



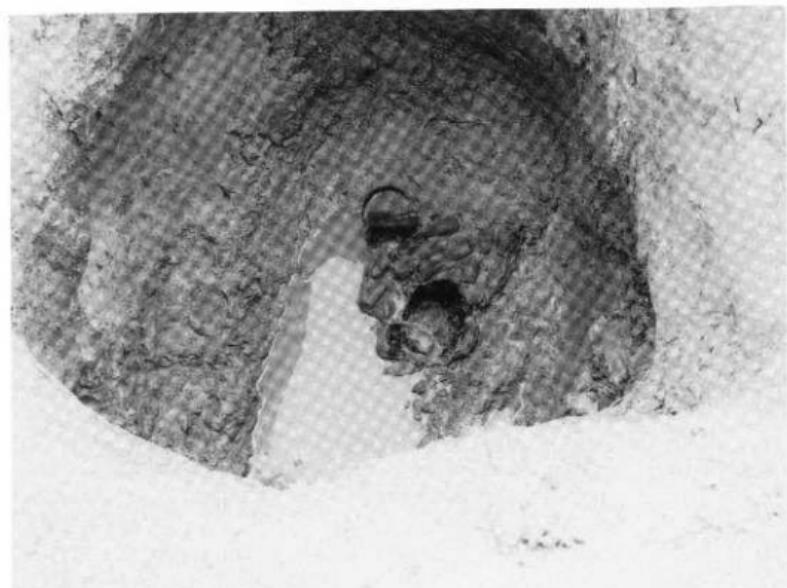
1. SD-03 上層遺物出土状況（東より）



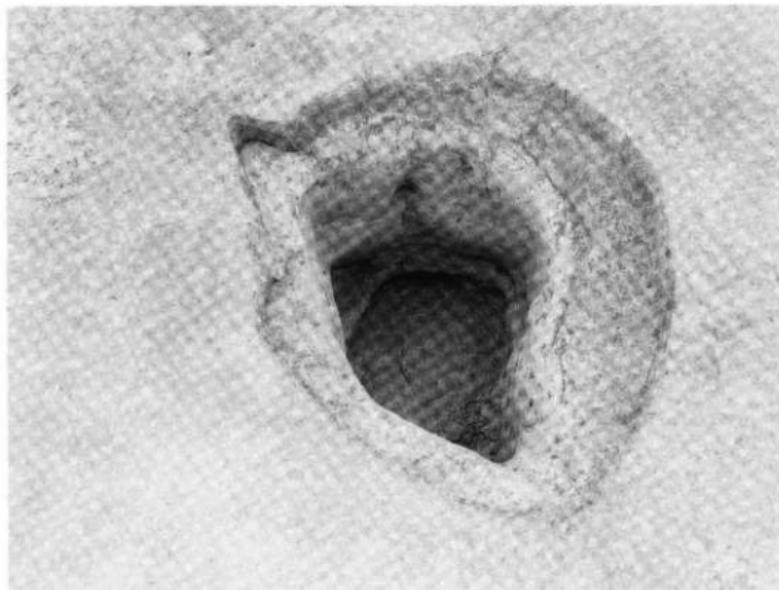
2. 同上 完掘状況（東より）



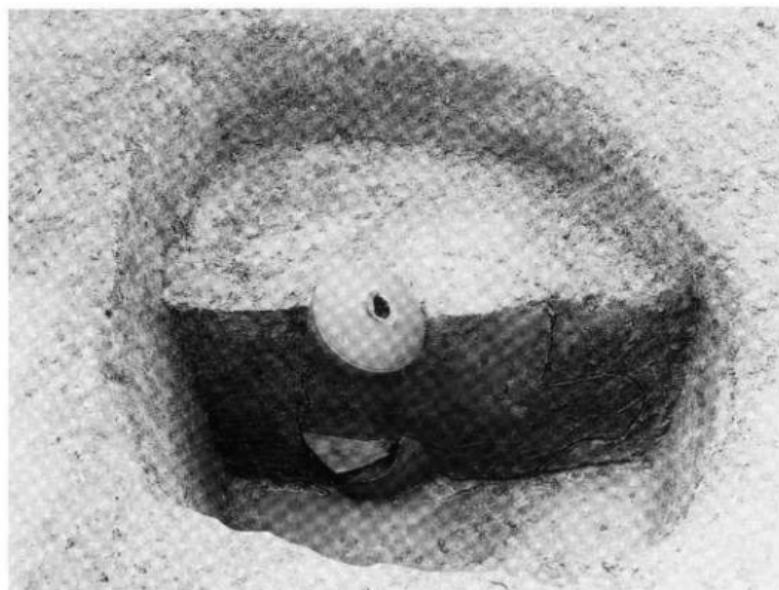
1. SK-06 上層遺物出土状況（東より）



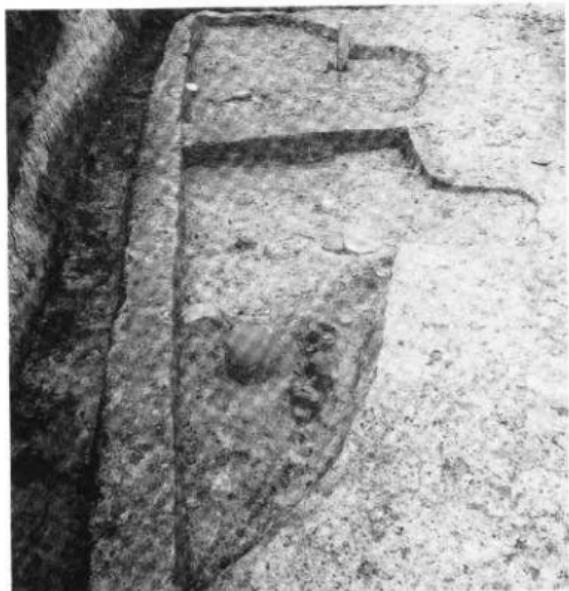
2. 同上 下層遺物出土状況（ツチノコ等、西より）



1. SK-06 完掘状況（西より）



2. SK-08 半掘状況（西より）



1. SX-01 遺物出土状況（西より）



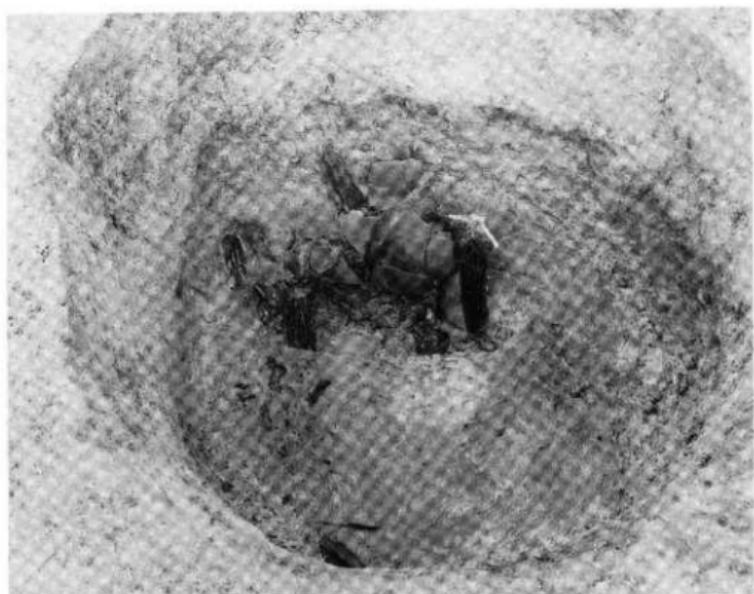
2. 同上（部分）



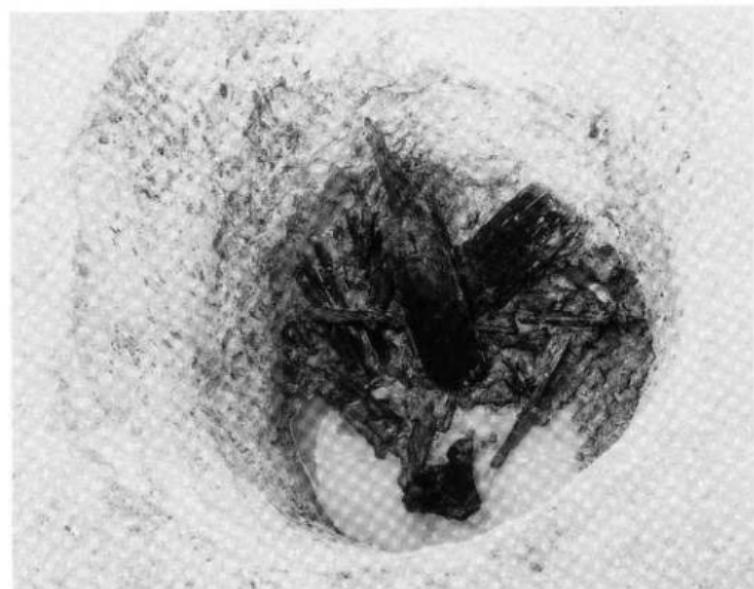
1. SK-02、SD-02 上層遺物出土状況（東より）



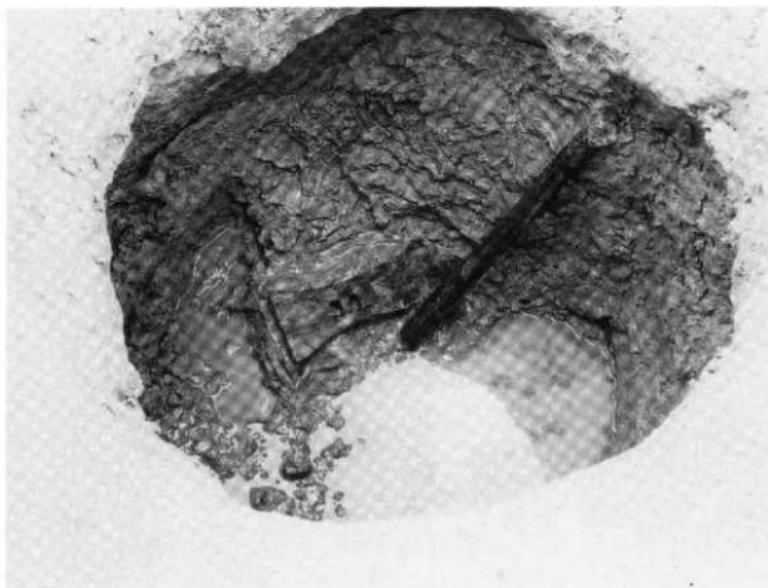
2. 同上 完掘状況（東より）



1. SK-05 第1層遺物出土状況（南より）



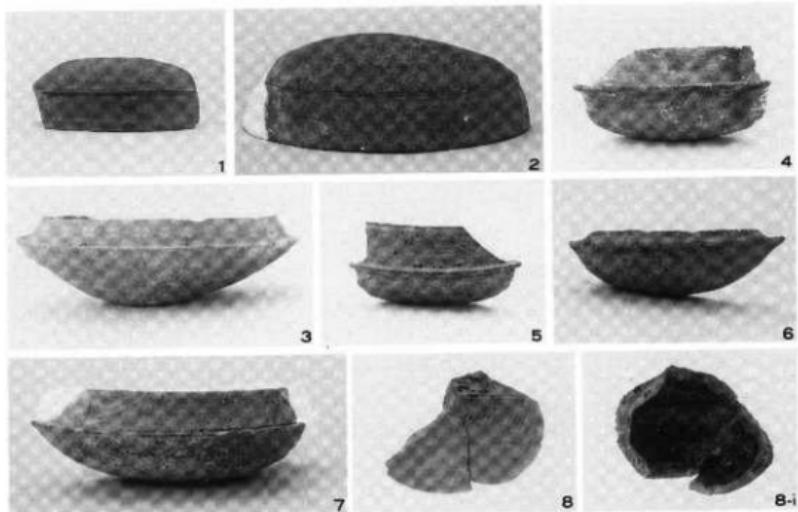
2. 同上 第2層遺物出土状況（南より）



1. SK-05 第3層遺物出土状況（南より）



2. 同上 第4層遺物出土状況（南より）



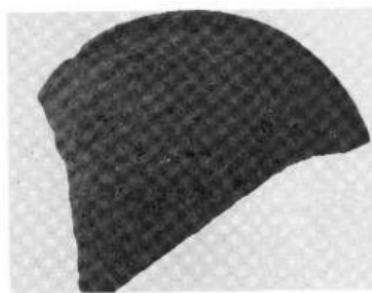
SD-01 出土土器 1 (最上層 S 4号)



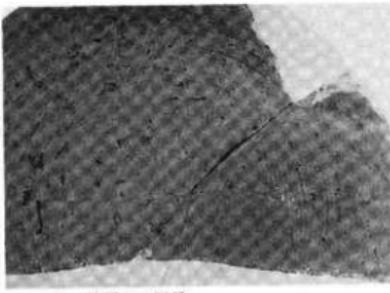
2 内面スタンプ文



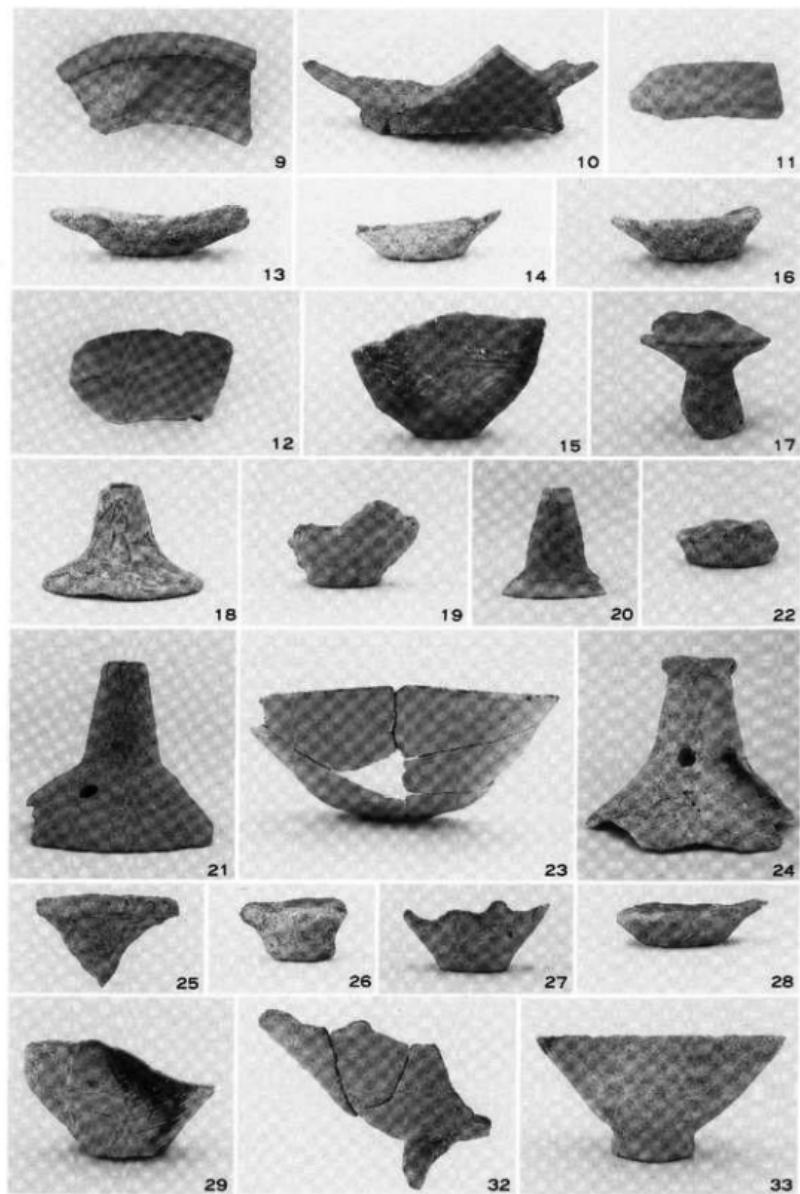
4 外面ヘラ記号



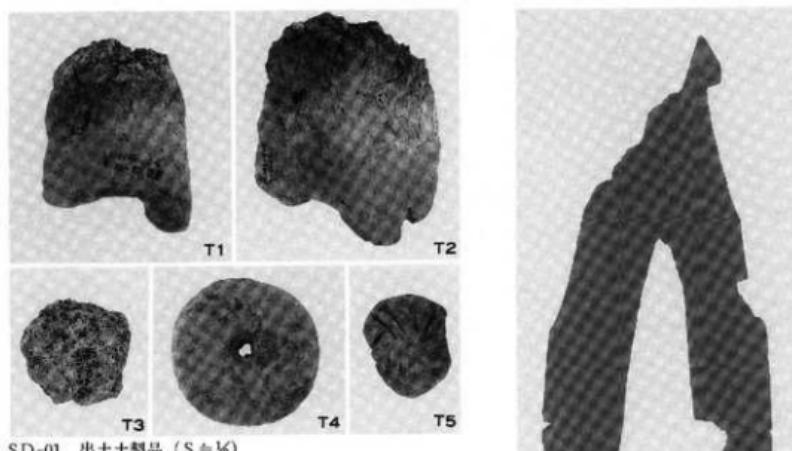
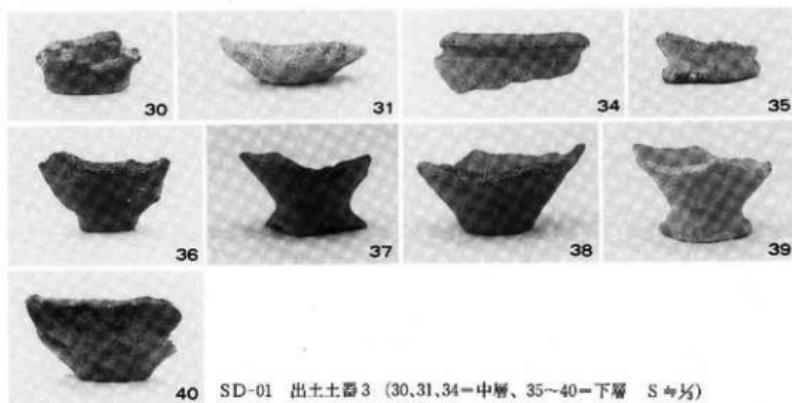
6 外面ヘラ記号



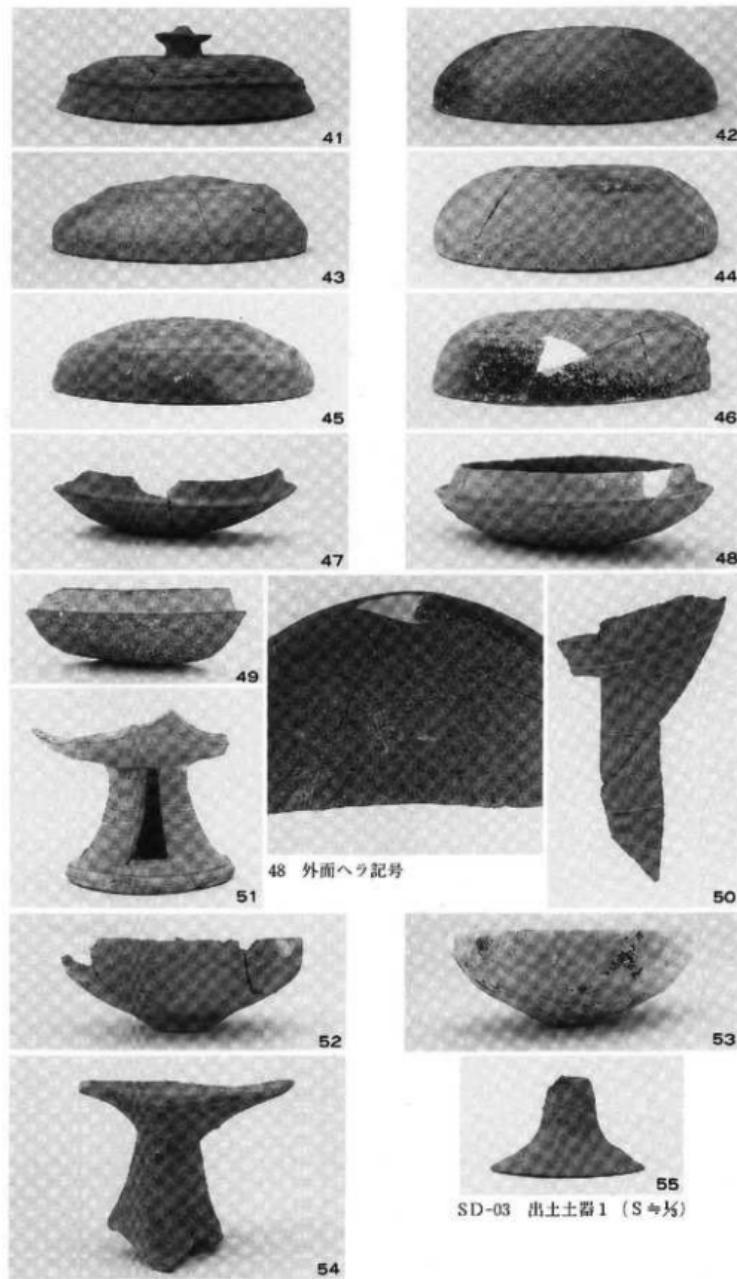
7 外面ヘラ記号

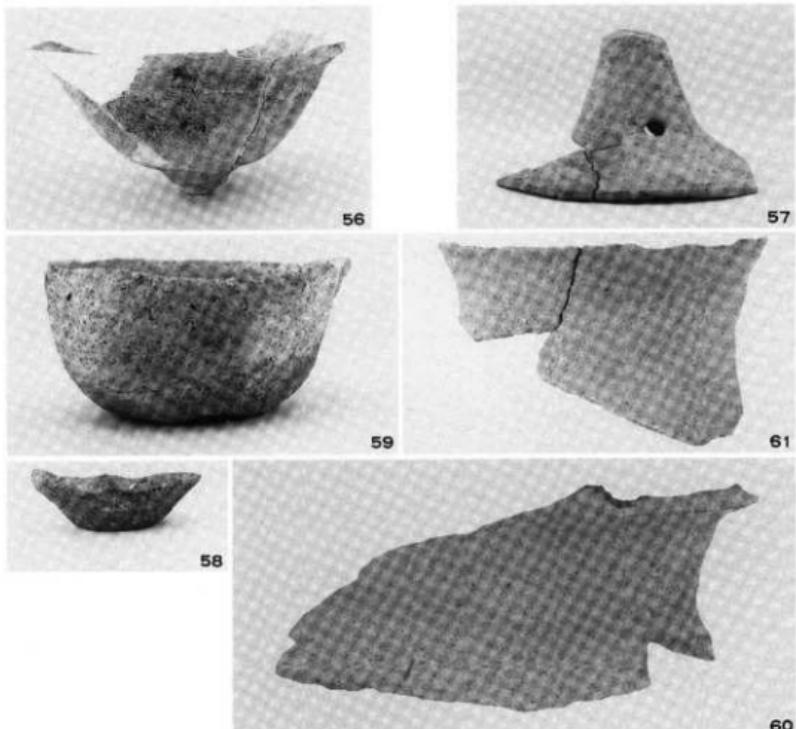


SD-01 出土土器 2 (9~22-最上層、23~29-上層、32,33-中層 S=1/2)



石製品 (G1=SD-01、G2=包含層 S 1/2)



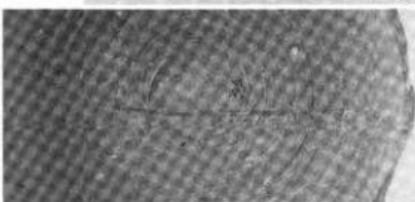


SD-03 出土土器 2 (S 類)



66 外面ヘラ記号

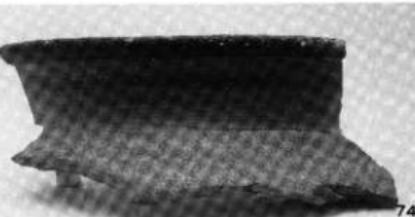
70



71



72



SK-06 出土土器 1 (S 種)

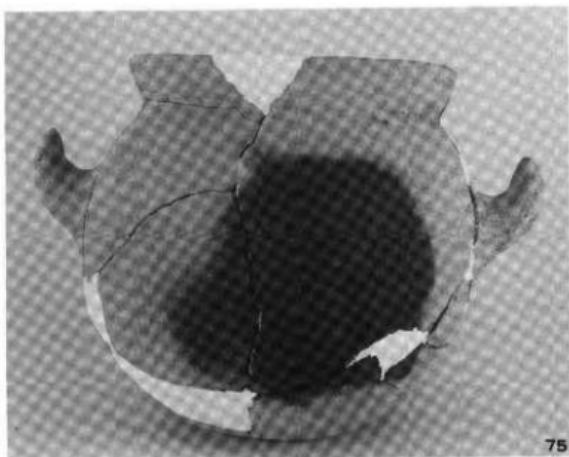
73

65

68

77

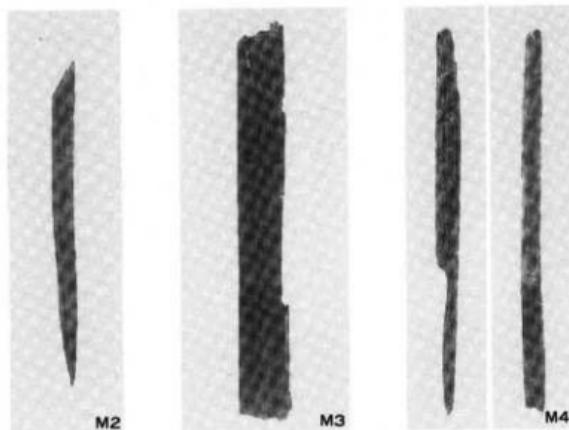
74



75



76

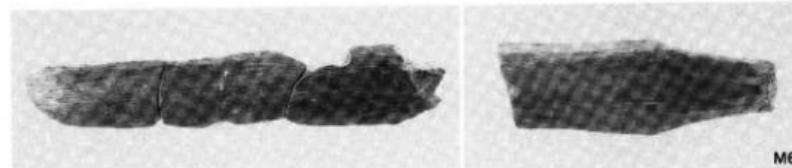


M2

M3

M4

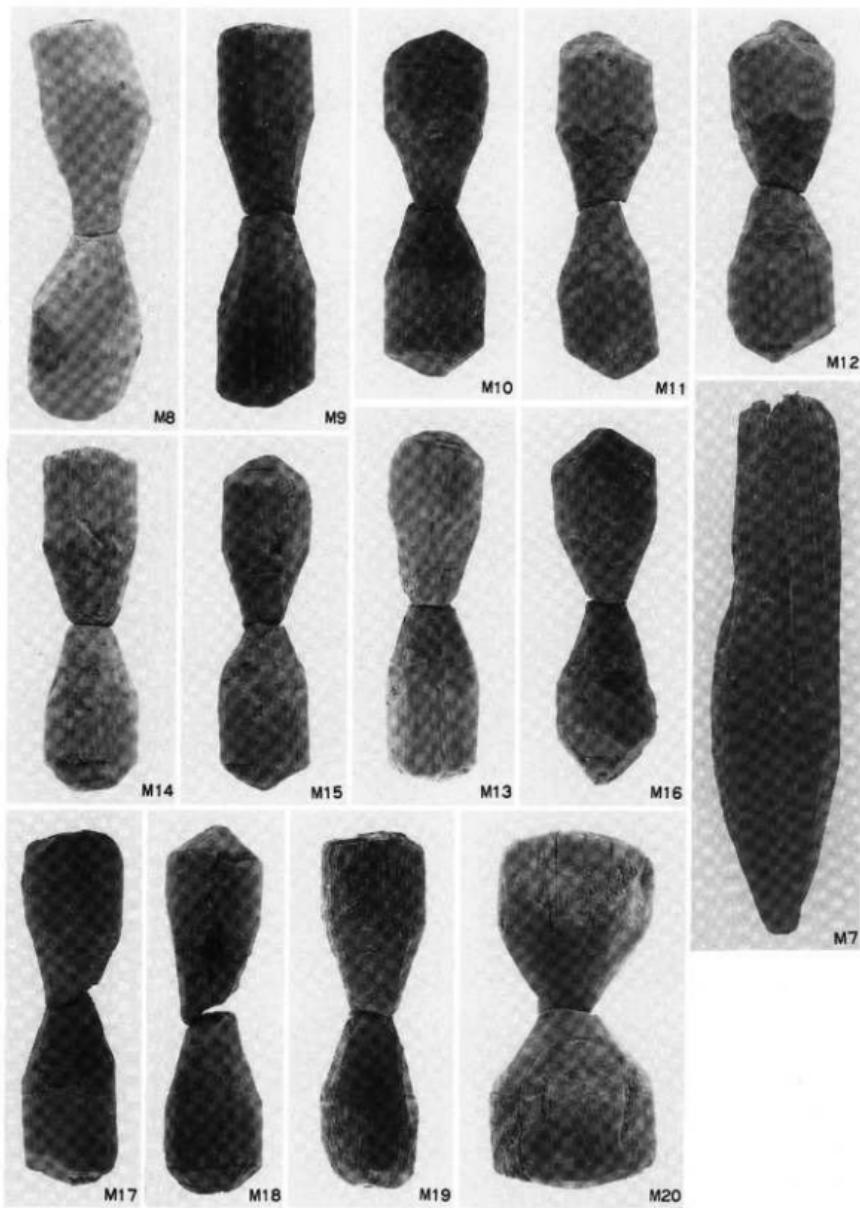
M5



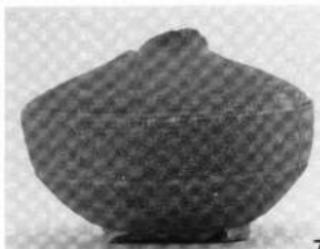
M6

SK-06 出土土器 2 (S 1/4) 同 磨石 (S 1/4)

同 木製品 1 (M2、M3は S 1/4 M4～M6は S 1/4)



SK-06 出土木製品2 (S<sub>4</sub>・S<sub>5</sub>) M7はS<sub>4</sub>・S<sub>5</sub>



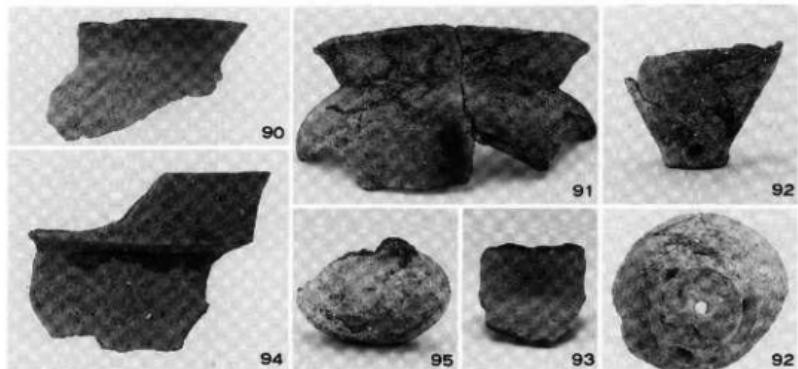
SK-08 出土土器 (S 与 3)



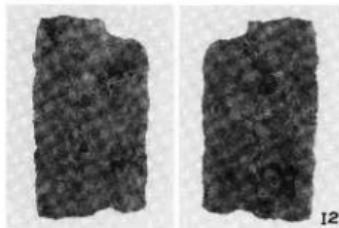
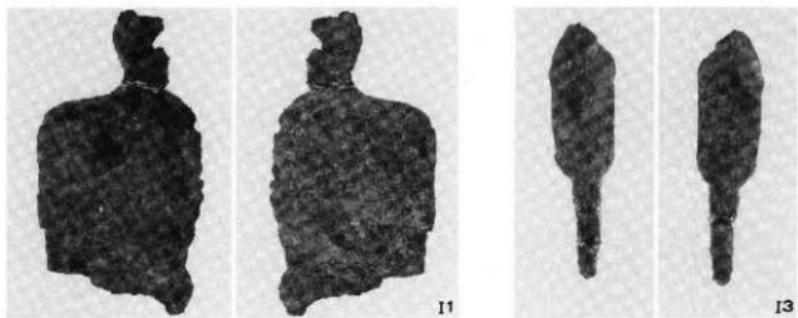
SX-01 出土土器 (S 与 3)



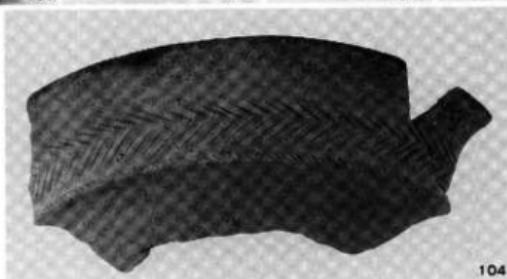
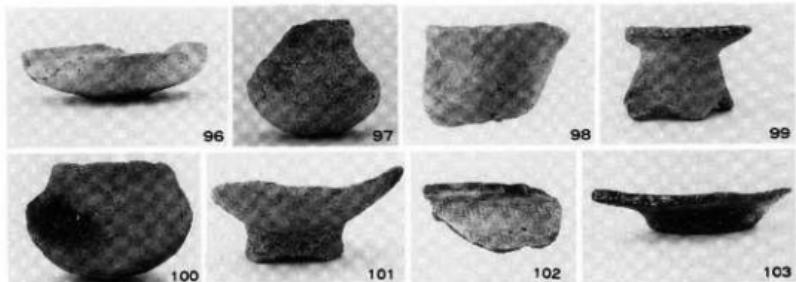
SX-02 出土土器 (S 与 3)



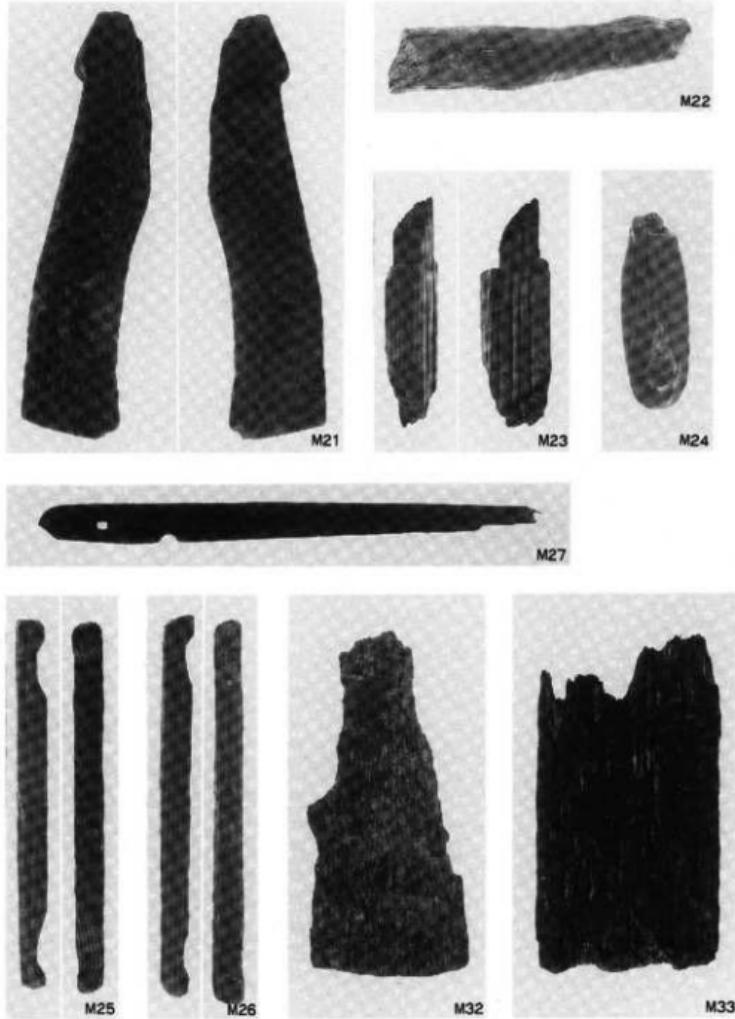
SD-02 出土土器 (S=1/2)



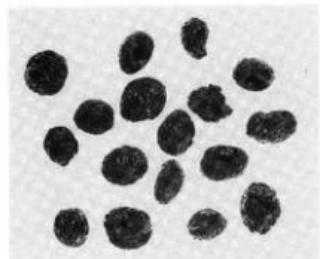
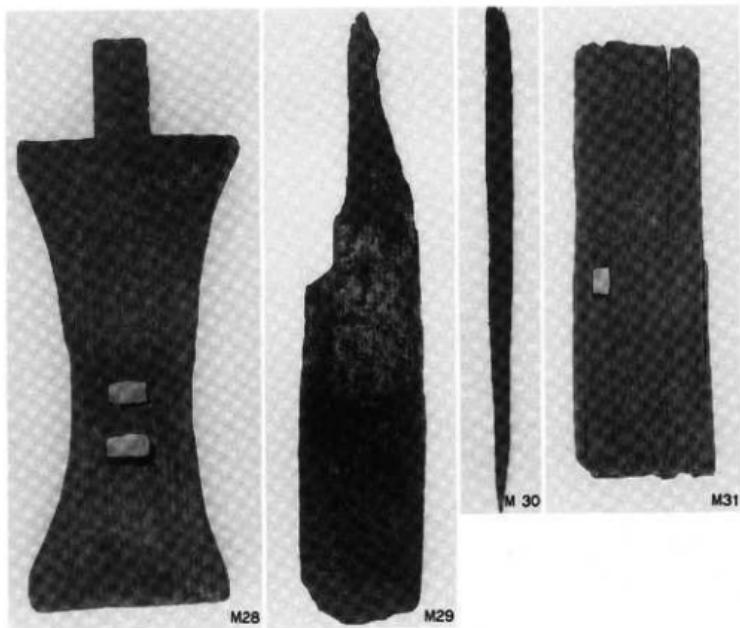
I2 SD-02 出土鉄製品 (S=1/2)



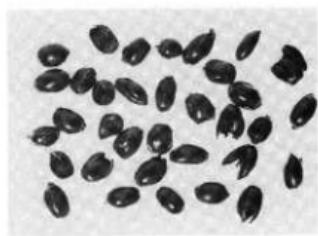
SK-05 出土土器 (S 1/6 105は S 1/4)



SK-05 出土木製品 1 (M21～M24、M33はS<sub>2</sub>・3<sub>3</sub> M25～27、M32はS<sub>2</sub>・3<sub>4</sub>)

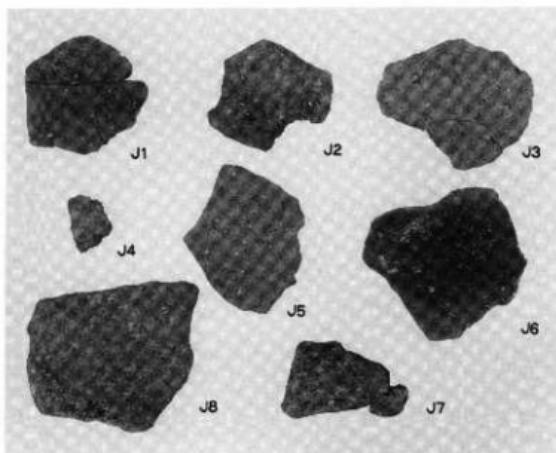
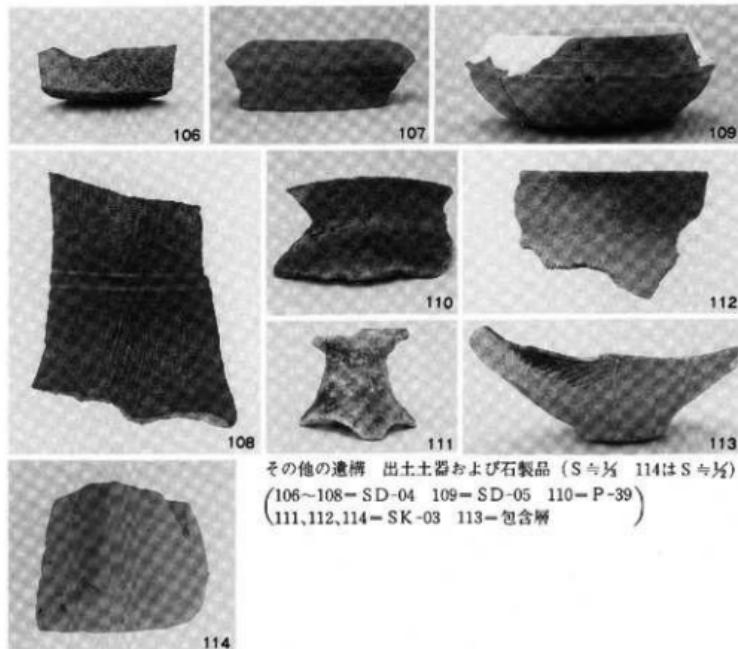


桃種核

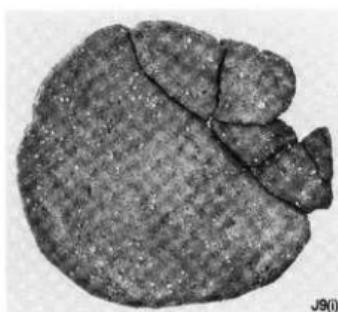


コナラ属種子

SK-05 出土木製品および自然遺物 (S 1/6、M28は S 1/4)

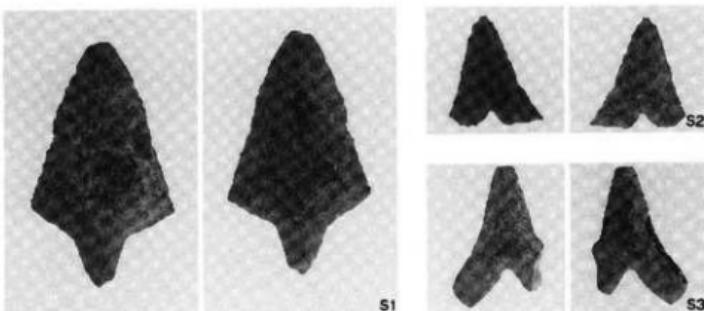


縄紋土器 1 (S 4号)



縄紋土器 2 (S 8号)

J9(i)



S1

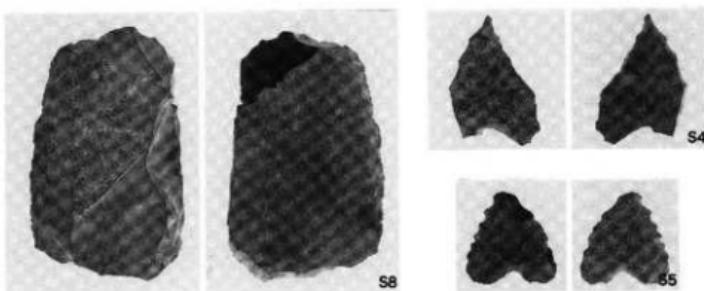
S2



S3

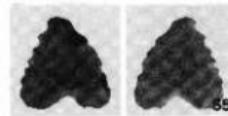


S2

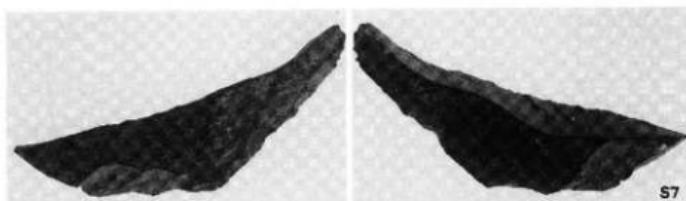


S8

S4

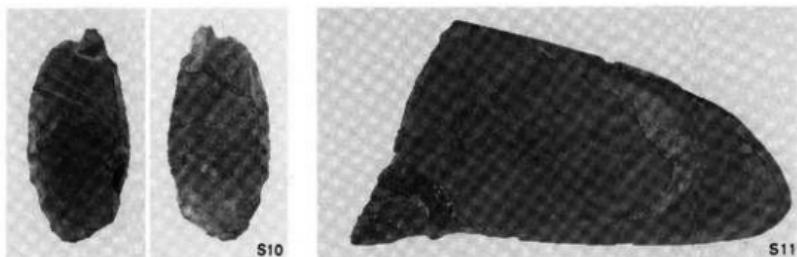
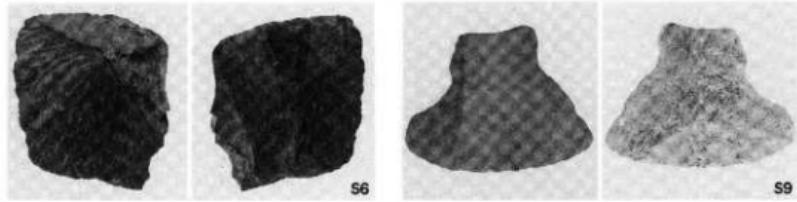


S5



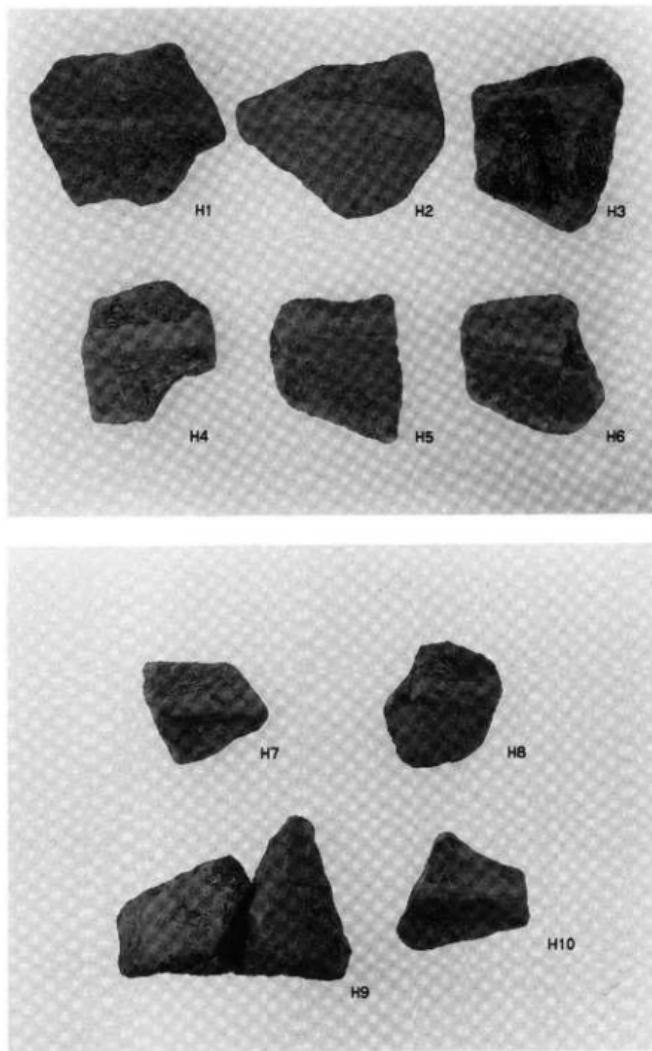
S7

石器 1 (S 8号 S 8は S 8号)

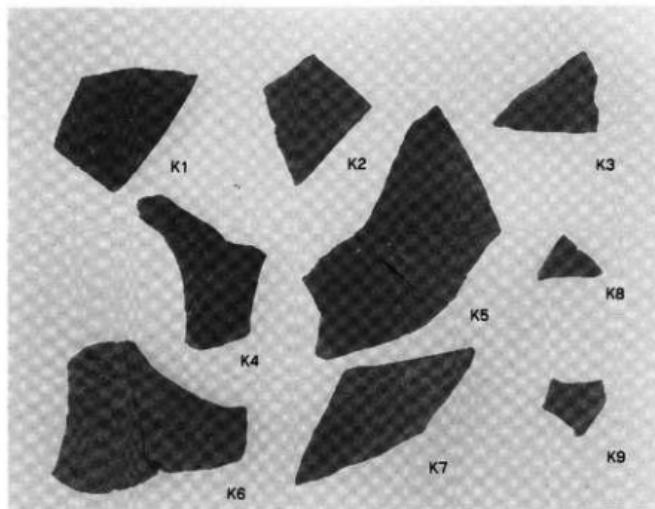


石器 2 (S 6、S 11、S 12はS 28  
S 9、S 10はS 29)

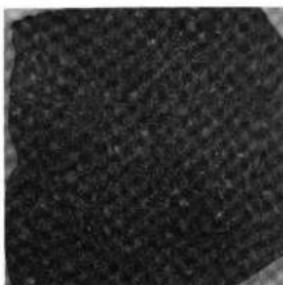




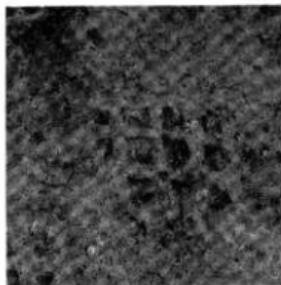
SD-01 最上層出土埴輪 (S = 1/5)



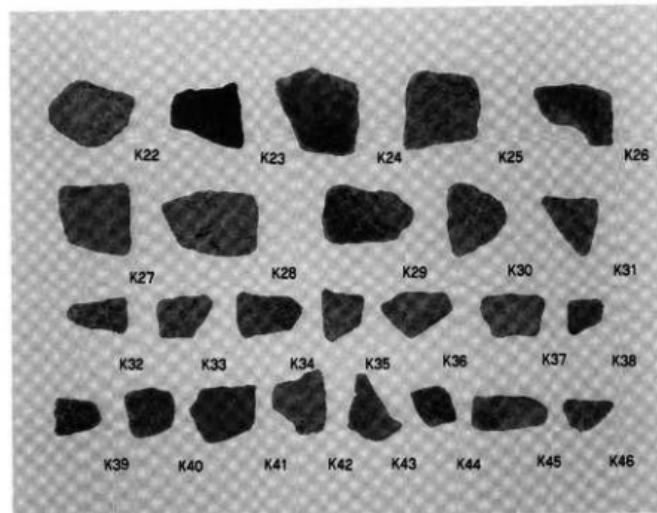
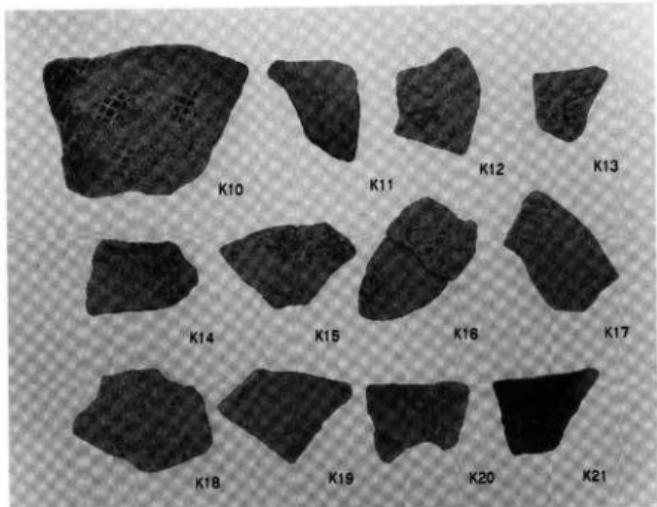
SD-01 最上層出土韓式系土器（陶質 S 4号）



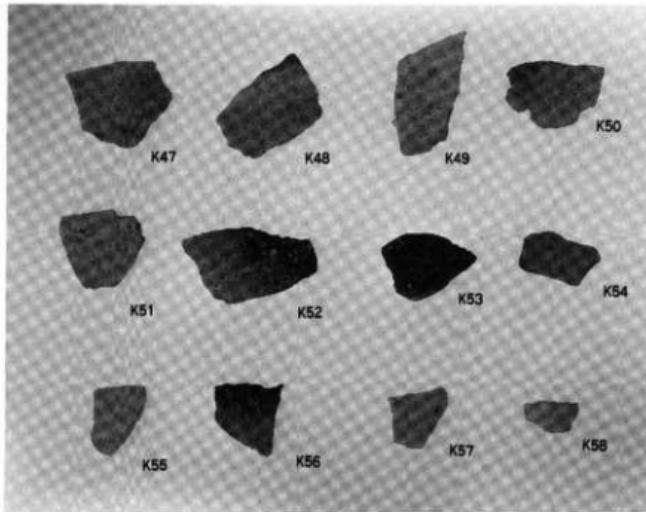
韓式系陶質土器（部分）



韓式系軟質土器（部分）



SD-01 最上層出土韓式系土器（軟質 S=5%）



SD-03 出土韓式系土器（軟質 S=35）

平成4年3月31日発行

大和郡山市埋蔵文化財発掘調査報告書 第2集

**原田遺跡 第3次調査報告**

編集発行 大和郡山市教育委員会  
大和郡山市北郡山町248-4  
印 刷 東洋印刷株式会社  
桜井市三輪371